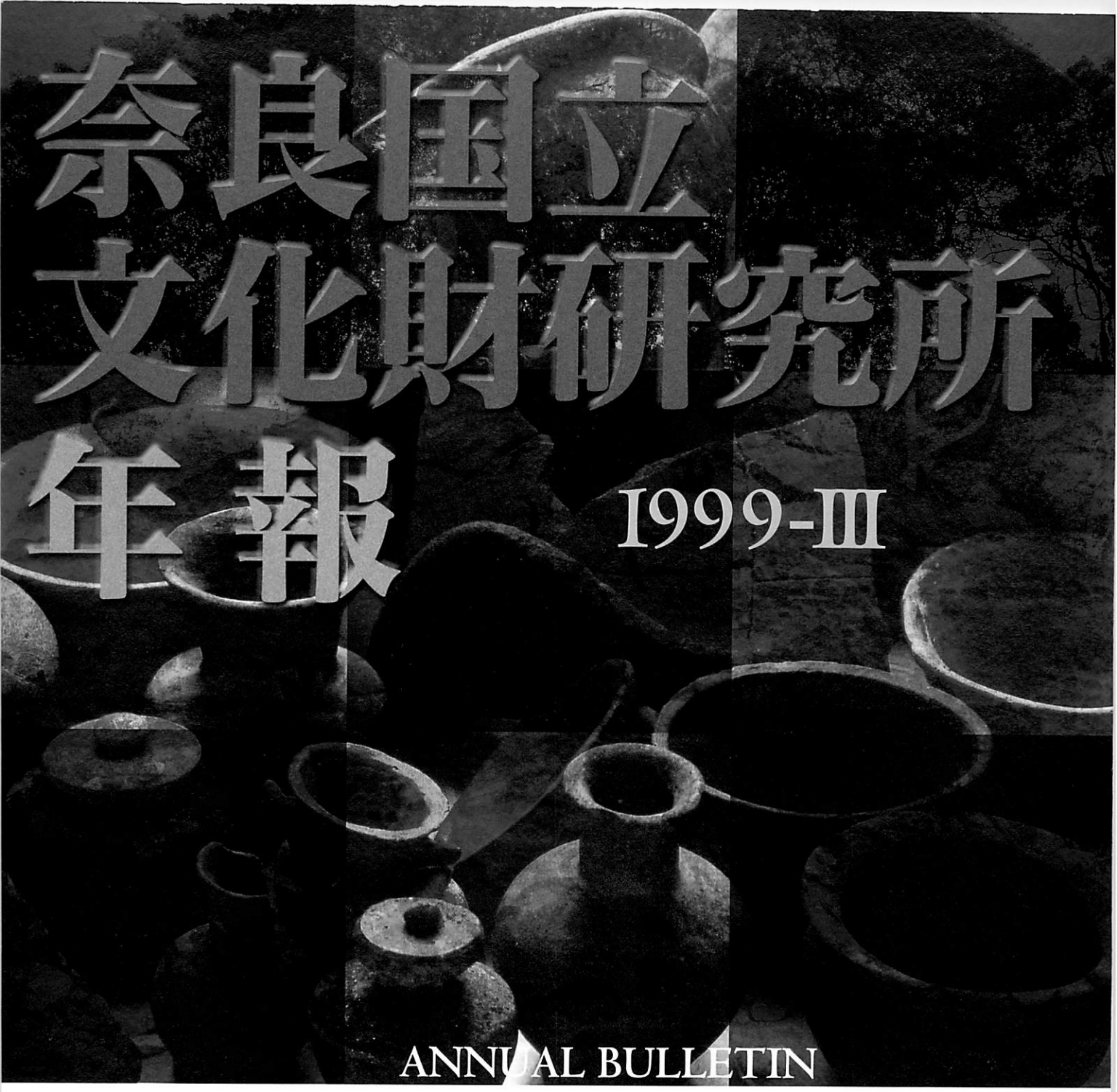


奈良国立文化財研究所年報

1999-III

ANNUAL BULLETIN
of Nara National Cultural Properties
Research Institute 1999-III

奈良国立文化財研究所

平城宮と平城京の調査

興福寺中門（第297次調査）
興福寺による「境内整備構想」にもとづき、今年度から主要堂宇地区の中金堂、中門・回廊、南大門およびその周辺地区を継続調査することとなった。第1年次は中門全域と東西に取り付く南面回廊を対象とした。本文50頁参照（撮影／佃　幹雄）

第一次大極殿SB7200（第295次調査）
平城宮第一次大極殿の遺構は奈良時代後半の大規模な整地造成などにより、基壇土はほぼ完全に削平され、最下部の地覆石痕跡を残すのみである。しかしこのわずかな痕跡が、建物の復原考察にとって重要な情報を与えてくれるのである。本文4頁参照（撮影／牛嶋　茂）

西隆寺出土銀製帯先金具（第299次調査）
対葉花文をあしらった小さな金具である。材質は純銀にちかい。その用途については、装身具、刀装具などさまざまな可能性があるが決め手はない。いずれにしても人々の目を驚かせ、身分の差を認識させるものであったろう。本文58頁参照（撮影／佃　幹雄）

木樋調査状況（第296次調査）
細かく区画された宮内の施設において、滞水を防ぐための排水施設は不可欠なものであった。第一次大極殿院の築地回廊をくぐりぬけるこれらの木樋も効果的な機能を果たしていたのであろう。本文17頁参照（撮影／佃　幹雄）

馬寮東方地区SB18000（第298次調査）
過去の調査で存在が想定されていた布掘りを伴う大規模な礎石建物を調査した。これによってこの一画は東西対称に配置する建物群を持つ施設であることが明らかになった。記録にあらわれる「西池宮」が有力な候補となる。本文24頁参照（撮影／佃　幹雄）

東院地区総柱建物SB17800（第292次調査）
東院西辺部に大規模な総柱建物の存在を明らかにした。関係資料の検討からこの建物は眺望を得ることを目的とした「楼閣宮殿」と呼ぶにふさわしい。眺めはどんなものであったろうか。
本文36頁参照（撮影／牛嶋　茂）

目　次

Ⅰ 平城宮の調査

第一次大極殿院地区の調査　第295次・第296次　4
馬寮東方地区の調査　第298次　24
平城宮北辺地域の調査　第293-3次・第293-4次　34
東院地区の調査　第292次・第293-10次　36

Ⅱ 平城京等の調査

西大寺境内西南隅の調査　第294次　48
興福寺中門・南面回廊の調査　第297次　50
西隆寺旧境内・右京一条二坊の調査　第299次　58
旧大乗院庭園の調査　第300次　62
左京三条六坊の調査　第293-6次　64
薬師寺旧境内の調査　第293-8次　66
一条条間路の調査　第293-7次　71
その他の調査／寄贈礎石の紹介　72

凡　例

1 本書は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が1998年度に実施した平城宮跡、平城京内遺跡等の発掘調査の概要報告である。各調査報告の執筆は、各調査の発掘担当者が主におこなった。

2 発掘遺構図に付した座標値は、いずれも国土方眼第Ⅵ座標系による。また、高さは全て海抜高で示す。

3 遺構には一連の番号をつけている。番号の前には、SA（築地・塀）、SB（建物）、SC（回廊）、SD（溝・濠）、SE（井戸）、SF（道路）、SK（土坑）、SS（足場）、SX（その他）などの記号を付した。

4 平城宮出土軒瓦・土器の編年は以下のようにあらわす（かっこ内は西暦による略年代）。平城京内等についても、この編年に準拠している。

軒瓦：平城京出土軒瓦編年第Ⅰ期（708～721）、第Ⅱ期（721～745）、第Ⅲ期（745～757）、第Ⅳ期（757～770）、第Ⅴ期（770～784）

土器：平城宮土器Ⅰ（710）、Ⅱ（725）、Ⅲ（750）、Ⅳ（765）、Ⅴ（780）、Ⅵ（800）、Ⅶ（825）

5 本文未収録の調査については、巻末の「その他の調査」を参照されたい。

6 年報Ⅰの編集は木村勉・深澤芳樹、年報Ⅱの編集は長尾充、年報Ⅲの編集は金田明大が担当した。

奈良国立文化財研究所年報 1999－Ⅲ

発行日――1999年9月27日
発行――奈良国立文化財研究所
編集――奈良国立文化財研究所　平城宮跡発掘調査部
〒630-8577　奈良市二条町2-9-1　TEL 0742-34-3931
印刷――岡村印刷工業株式会社

ANNUAL BULLETIN
of Nara National Cultural Properties Research Institute
1999-Ⅲ

CONTENTS

Ⅰ Excavations at the *Nara* Palace Site

- Excavations in the Former Imperial Audience Hall Compound sector; No. 295, 296
- Excavation in the sector east of the Stables; No. 298
- Excavations in the vicinity of the northern palace boundary; No. 293-3, No. 293-4
- Excavations in the East Palace sector; No. 292, No. 293-10

Ⅱ Excavations at the *Nara* Capital Site and elsewhere

- Excavation of the precinct of *Saidaiji* Temple; No. 294
- Excavation of the Middle Gate of *Kofukuji* Temple; No. 297
- Excavation of the former precinct of *Sairyuji* Temple, and in West Second Ward on First Street; No. 299
- Excavation of the garden of the former *Daijoin* Temple; No. 300
- Excavation in East Sixth Ward on Third Street; No. 293-6
- Excavation of the former precinct of *Yakushiji* Temple; No. 293-8
- Excavation of an interward road in West First Ward; No. 293-7
- Other excavations; introductions of foundation stones donated to the Institute

1999年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査一覧

調査次数	調査地区	遺跡	調査期間	面積	調査地	担当者	調査要因	掲載頁
292次	6ALR-F	東院地区	98.4.1～7.3	1780m²	奈良市法華寺町	清野孝之	学術(宮)	36～45
293-1次	6BFO-C	法華寺旧境内地	98.4.7～4.8	28m²	奈良市法華寺町	金田明大	住宅建設	72
293-2次	6ADD-J	宮西面壕地・西一坊大路東側溝	98.4.20～4.21	12m²	奈良市二条町	渡邉晃宏	歩道整備	72
293-3次	6ASA-J	宮北方遺跡	98.4.27	6m²	奈良市佐紀町	井上和人	住宅建設	34～35
294次	6BSD-L	西大寺旧境内地	98.4.27～6.10	180m²	奈良市西大寺芝町	浅川滋男	建物建設	48～49
295次	6ABP-I	第一次大極殿および西面回廊	98.6.23～11.19	2695m²	奈良市佐紀町	蓮沼麻衣子	学術(宮)	4～16
293-4次	6ACN-Q	宮内北辺西部	98.6.15～6.16	35m²	奈良市佐紀西町	井上和人	住宅建設	34～35
296次	6ABR-D・6ABS-E	大極殿院回廊西南隅	98.11.9～99.1.13	480m²	奈良市佐紀町	古尾谷知浩	学術(宮)	17～23
297次	6BKF-K	興福寺中門	98.10.2～99.1.21	841.5m²	奈良市登大路	次山淳	史跡整備	50～57
293-5次	6ASB-K	宮北辺	98.9.10	24m²	奈良市佐紀町	内田和伸	住宅建設	72
298次	6ACP-L・M	馬寮東方地区	99.1.7～3.22	1100m²	奈良市佐紀町	玉田芳英	学術(宮)	24～33
299次	6BSR-P	西隆寺旧境内地・右京一条二坊	99.1.18～3.5	320m²	奈良市西大寺東町	千田剛道	道路整備	58～61
300次	6BGN	旧大乗院庭園	99.1.19～3.4	200m²	奈良市高畑町	高瀬要一	史跡整備	62～63
293-6次	6AED-B	左京三条六坊十二・十三坪	98.1.7～1.14	68m²	奈良市小西町	山下信一郎	住宅建設	64～65
293-7次	6BFO-D	一条条間路	99.2.19～2.26	12m²	奈良市法華寺町	加藤真二	住宅建設	71
293-8次	6BYS-Q	薬師寺境内地	99.2.26～4.05	158m²	奈良市西ノ京町	箱崎和久	建物建設	66～70
293-9次	6ADB-S	宮西南部	99.2.25～3.4	21m²	奈良市二条町	山下信一郎	住宅建設	72
293-10次	6ALS-C	東院地区	99.3.3～3.17	40m²	奈良市法華寺町	高瀬要一	史跡整備	46
293-11次	6ABN-K	宮北面大垣	99.3.23～3.26	18m²	奈良市佐紀町	千田剛道	住宅建設	58

I 平城宮の調査

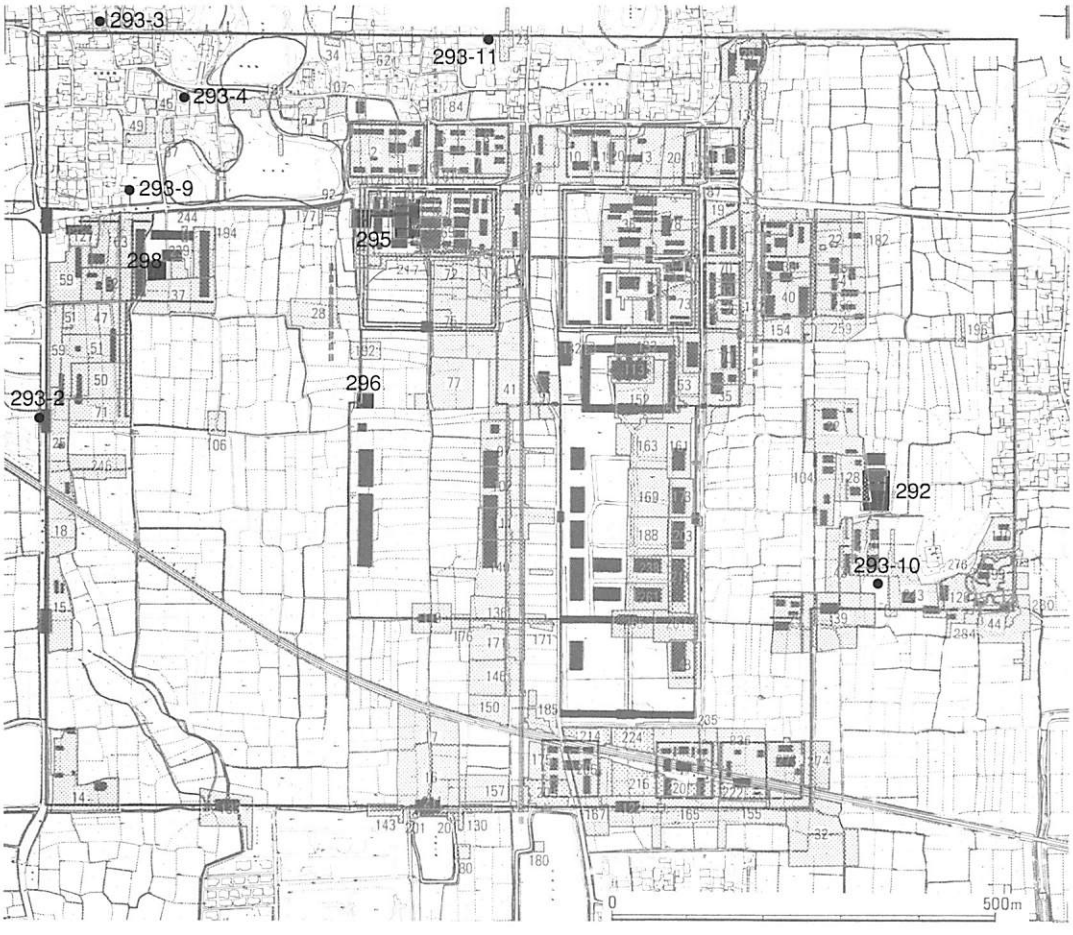


図1　1998年度　平城宮内発掘調査位置図　1：10000

◆第一次大極殿院地区の調査
―第295次・第296次

1．はじめに

第一次大極殿院地区の発掘はすでに東半分をほぼ終了し、第一次大極殿も第69次（1970）・第72次北（1971）調査で東3/4を検出しており、これらの成果は『平城報告XI』（1981）でまとめている。一方、西面築地回廊部分は第192次（1988）・第217次（1990）調査で一部を発掘したが、詳しい様相はあきらかとなっていない。

このようなことから、第295次調査は第一次大極殿の全容と大極殿から西面築地回廊に至る部分の様相を、第296次調査は西面築地回廊の南西隅の様相を解明することを目的としておこなった（図2）。ところで、第一次大極殿院地区の遺構変遷は『平城報告XI』では、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと大きく3期に分け、Ⅰ期をさらにⅠ-1～4の4小期に細分化する。すなわちⅠ-1期は、第一次大極殿・後殿・築地回廊などを造営した時期［和銅3年（710）～］、Ⅰ-2期は、閤門両脇に楼閣を建て、大極殿院南に朝堂とそれを囲む掘立柱塀が建つ時期［神亀・天平初年～］、Ⅰ-3期は、恭仁京遷都で大極殿と東西築地回廊を撤去し、掘立柱塀で区画する時期［天平12年（740）～］、Ⅰ-4期は、平城京還都で東西築地回廊を再建し、基壇を貫く暗渠をつくりなおす時期［天平17年（745）～］、Ⅱ期は、南面・北面の築地回廊を内側に寄せ、内部の北半に掘立柱建物が林立する時期［天平勝宝5年（753）～］、Ⅲ期は、平城上皇が西宮を造る時期［大同4年（809）～］である。

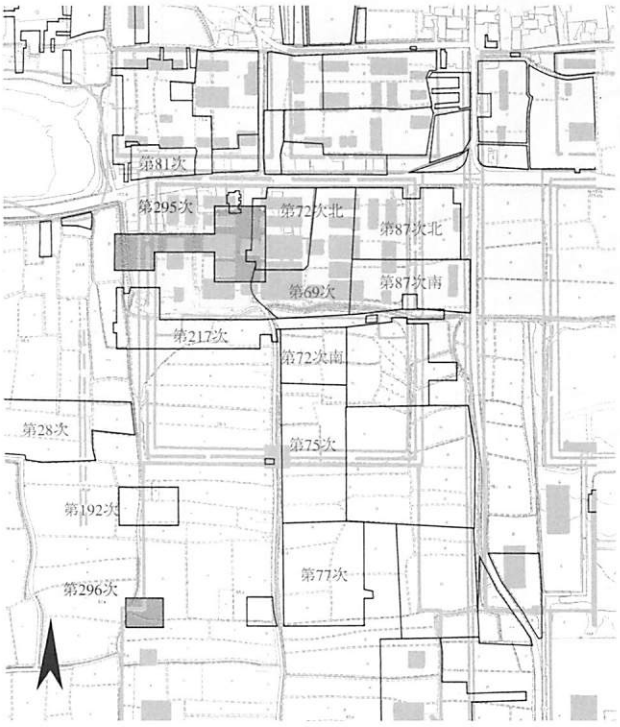


図2　第295・296次調査位置図　1：5000

そこで本稿では、まず第295・296次調査それぞれで、遺構の詳細と変遷、『平城報告XI』の時期区分との関係、新知見と考察を説明し、最後に両次を包括した第一次大極殿院地区の問題点を述べる。

2．第295次発掘調査

第295次調査区は、東区・中区・西区の3つに分け（全体で2695㎡）、東区（東西34m×南北50m）では第一次大極殿の未発掘部分（既発掘部を含めた西1/3）を発掘し、遺構の全貌を解明するとともに、中区（東西40m×南北10.5m）では大極殿から西面回廊までの敷地造成を、西区（東西25m×南北22m）では西面築地回廊周辺の様相をあきらかにすることを目的とした。

今回の調査で検出した主な遺構は再検出も含め、礎石建ち建物1、掘立柱建物21、足場穴8、築地回廊2、築地塀1、掘立柱塀9、溝16、土坑1、バラス敷き2である。遺構は切り合い関係や建物配置より、大別してA～Gの7時期、さらにAとBは大極殿基壇と仮設建物の変化に基づきA1, A2, B1, B2に細分する。

発掘前の状況と基本層序

発掘前の調査区の地形は、北東より北西に向かってゆるやかに下がっており、西区西端から約8mのところに

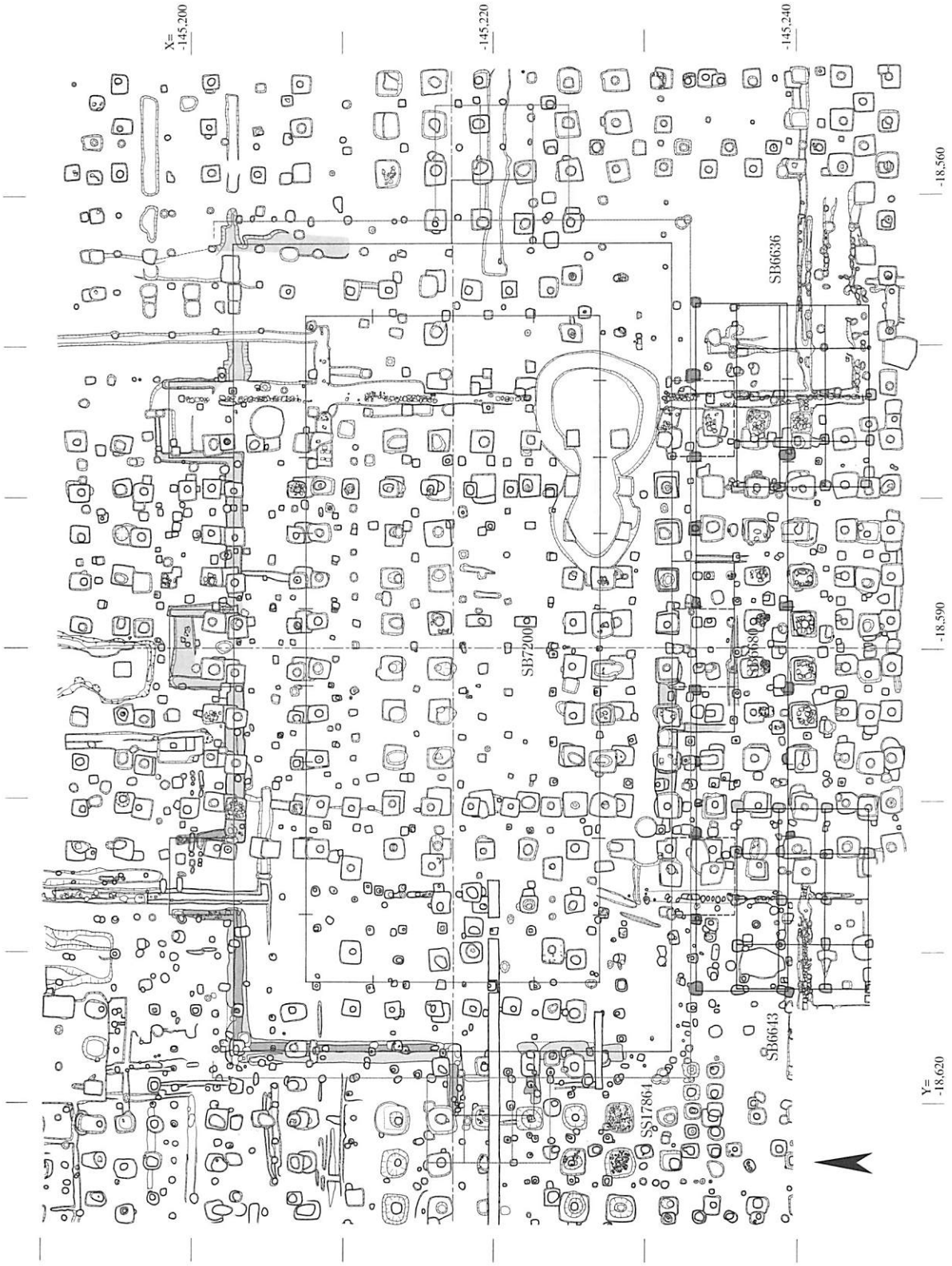


図3　第一次大極殿遺構平面図　1：400

西に1.5mほど下がる大きな段差があった。

東区の基本的な層序は、上から整備粗砂、耕土、床土、褐灰砂質土（遺物包含層）、バラス・黄色土ブロック混茶褐粘質土（整地土）、バラス混硬質茶褐砂質土および軟質明褐砂質土（地山）となる。遺構は整地土および地山の上面で検出した。

中区は、Y=-18,643.0付近で後世の耕地化にともなう約50cm西に下がる段差があり、段差を境に基本層序と検出面で大きな違いがある。すなわち、段差以東は東区と同様だが、段差以西では、地山はY=-18,651.0付近で西に急激に下がり、地山上面は褐色砂礫粘土の厚い整地土がおおい、さらに西端部では上下2層のバラス整地がのる。遺構はおもに整地土と上層バラスの上面で検出した。

西区は、東辺部および中央部における層序として、上より耕土、床土、バラス混じり暗灰褐シルト（遺物包含層）があり、その下で奈良時代の遺構である上層バラスSX17866と下層バラスSX17865および築地基壇土（黄橙白粘質土）を検出した。西区西辺部の段差以西における層序は、上から耕土、床土、黄褐・灰褐シルトであったが、奈良時代の遺構は削平されてまったく残っておらず、シルト層上面で中世以降の遺構のみを検出した。

以下、各時期のおもな遺構を説明する。なお、SB6605, SB7164, SB6620, SB7170, SB6611, SB7150, SB7151A, SB7151B, SB7152については既発掘部分ですでに全掘した遺構で、今回の調査結果で遺構解釈は変わらなかったことから、本稿では説明を割愛する。

検出した主な遺構

A期の遺構

SB7200・SB6680・SS17864　第一次大極殿SB7200は7間×2間の身舎に四面庇が付く基壇付礎石建ち、東西棟建物で、第69・72次北調査同様、地覆石据付掘形を北面で東西約17m分、西面で南北約23m分検出した。基壇北西隅は検出したが、南西隅から北1/3ほどと南面は削平されており検出できなかった（図3）。

今回の成果としては、まず未発掘部分全面で据付掘形、抜取痕跡を明確に区別して検出したこと、西面階段・北面西階段の遺構を検出したことが挙げられる。

据付掘形は幅130～160cm、外側が浅く（深さ0～5cm）内側が深い（深さ15～20cm）2段掘りで、埋土は遺物をほとんど含まない茶灰褐砂質土であった。抜取痕跡は幅40～50cm、深さ10～15cm、据付掘形の深く掘り下がった部分の中央にあり壁がほぼ垂直に上がる。埋土は凝灰岩や瓦片などを含む黄灰褐砂質土である（図6）。北面西階段の抜取痕跡から出土した凝灰岩片は、分析の結果、「流紋岩質溶結凝灰岩（いわゆる竜山石）」と「流紋岩質凝灰角礫岩（二上層群ドンヅルボウ累層産出）」の2種類であることがわかった（図4）。

北面西階段と西面階段は地覆石痕跡の折れ曲がりから確認した。北面西階段は建物の西から2間目に対応し、抜取痕跡のみ検出した。階段幅は地覆石の心々寸法で17尺、出は14尺となる。西面階段は南から2間目に対応し、据付掘形・抜取痕跡を検出した。階段幅は抜取痕跡の心々寸法で18尺、出は14尺である。南面西階段は検出できなかった。

大極殿の基壇規模は、地覆石痕跡の北西隅を検出したことから、東西181尺×南北98尺と確定した。（なお、基準尺は1尺＝0.2954mと推定。）建物規模は、階段地覆石の心を建物の柱心と合わせているという前提にたてば、今回の調査で桁行・梁間の階段と柱の位置がすべて把握できたことから、東西149尺×南北66尺と推測できる。

また、SS17864は大極殿基壇地覆石の据付掘形より約5尺離れた位置で検出した小穴列で、足場穴とみられる。基壇の西面で24基、南面で4基検出したが、西面では2回

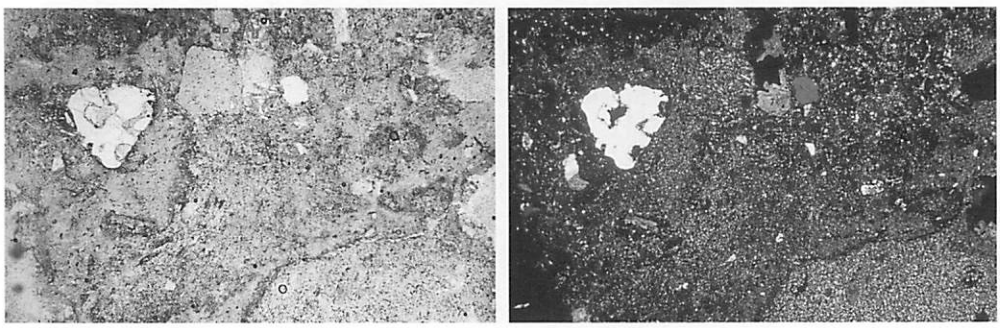


図4
第一次大極殿SB7200地覆石
（流紋岩質溶結凝灰岩）
偏光顕微鏡写真　約12.5倍
左：-ニコル　右：+ニコル

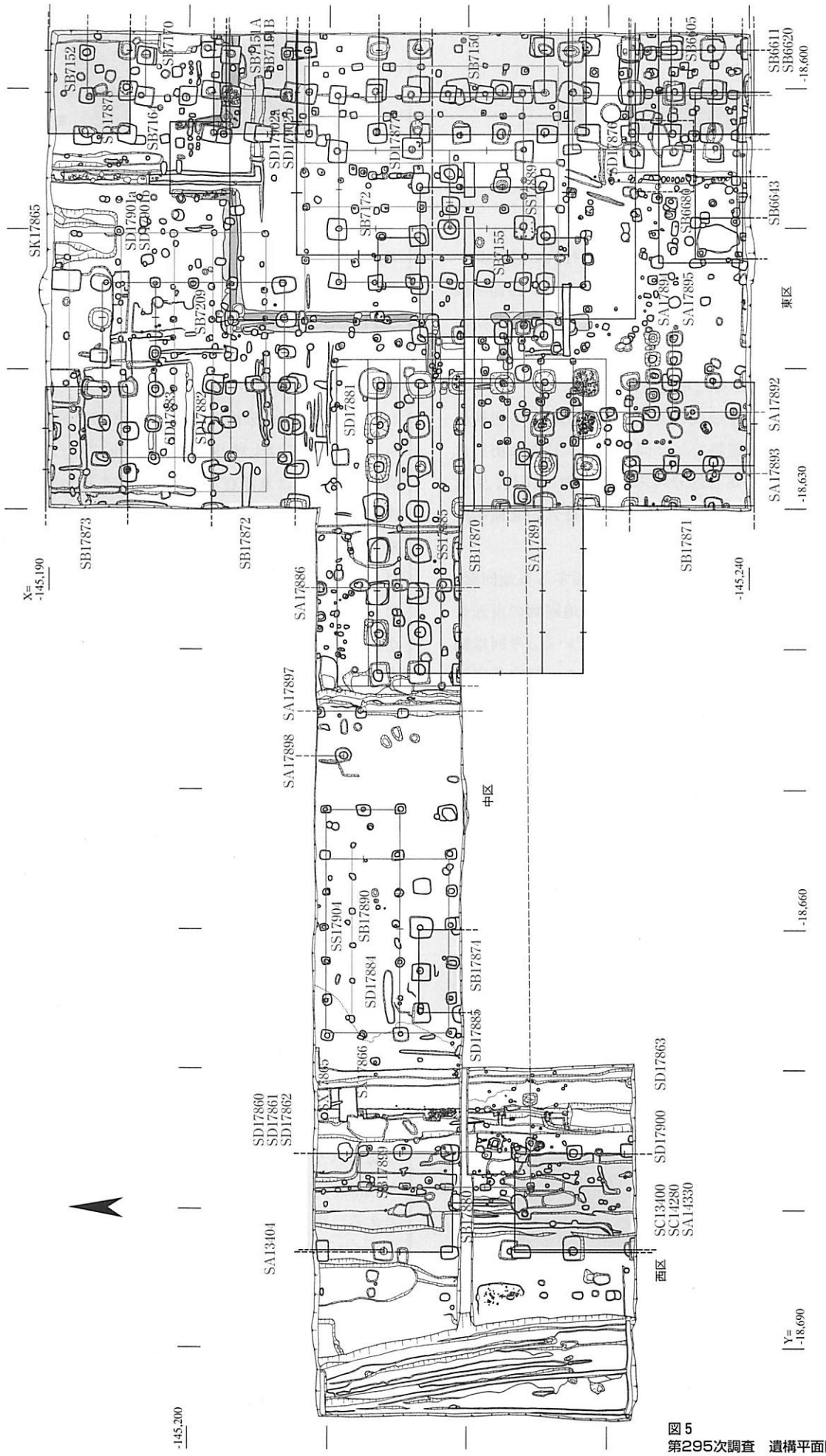


図5
第295次調査　遺構平面図　1：400

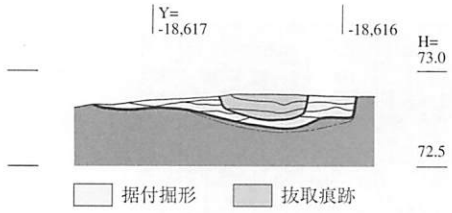


図6　第一次大極殿SB7200地覆石痕跡
断面図（X=－145,209.6）　1：40

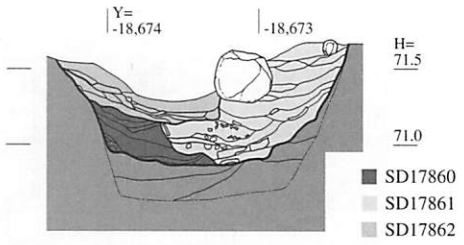


図7　西面築地回廊東雨落溝 SD17860・SD17861・SD17862
断面図（X=－145,227.2）　1：50

分ある。柱間は7尺～11尺と不規則で、柱穴の径は40～50cm、地山面を40cmほど掘り込む程度で浅い。西面階段を囲むように東西20尺・南北36尺ほど突出した部分がある。性格は特定できないが、ここに足場の踊り場もしくは足場に登る階段があった可能性がある。

この他に大極殿の南5.5尺の位置に建つSB6680も再検出した。掘立柱東西棟建物で、9間×1間、柱間は桁行は大極殿北面階段折り返し部分のみ19尺で他は16尺、梁間は20尺となるが、今回再検討した結果、柱穴が北面階段折り返し位置と重複することがわかった。

SC13400　第一次大極殿院の西面を画する築地回廊。東面築地回廊SC5500に対応する。西面築地回廊の南延長部は、第192・217・296次調査で発掘している。今回は幅約1.8mの築地基底部を南北23m分検出した。築地基底部は白色粘土や褐色砂質土、黄橙白粘質土を積む版築でつくられており、築地心はおよそY=－18,679.5である。これは第296次調査の推定心より約2m西、第217次調査の推定心より約60cm西にあたり、掘り込み地業も認められなかった。側柱は礎石建ちと思われるが、今回、A期の側柱柱穴は検出できなかった。しかし位置的にはC期のSA13404が西側柱位置を踏襲していると考えられる。築地心よりSA13404の柱心まで12尺、東雨落溝SD17860まで20尺。後者より築地規模は幅40尺と推定できるが、基壇化粧はまったく残っていない。

図8　SD17860・SX17865・SX17866（北西から）

SD17860・SX17865　SD17860は西面築地回廊東雨落溝。X=－145,225.5以北では、底に直径4～5cmの石を敷き、東岸に側石を並べる。側石は直径約10cmの拳大の石を連ねたもので約11m分検出した。下層バラスSX17865の西端も兼ね、D期には上層バラスSX17866に覆われる（図8）。調査区北端では東側石と底石のレベル差が5～6cm、幅は西端が全面的に壊されているので定かでないが、断面観察より60cm内に収まるとみられる。一方、X=－145,225.5以南では素掘りで幅2m弱、深さ80～90cmと大きくなる。第192次調査で検出したSD13401に対応するが、SD13401が奈良時代前半の間存続するのに対し、SD17860は恭仁京遷都前のB期までしか存続せず、遷都の際には壊して素掘り溝SD17861につくりかえている（図7）。SD17860は下層バラスSX17865の西端も兼ね、SX17866に覆われる。

SX17865はSD17860の東に広がるバラス敷き。大極殿創建当初の整地土と考えられる。直径4～5cmのバラスで形成され、SD17860と同様、SX17866に覆われる。

B期の遺構

SB6643　SB7200の南西側にある4間×3間、総柱建の掘立柱東西棟建物。SB7200の南東側のSB6636と一対になる遺構で、第69次調査で一部検出し、4間×4間と推定していたが、今回の発掘で北側1間は検出できず、梁間が3間で、位置も西に1間分ずれることがわかった。

C期の遺構

SA13404　SC13400の西側柱と重なる位置にたつ掘立柱南北塀。一部E期の西面築地回廊SC14280の西側柱柱穴に切られている。柱間は15尺で今回は4間分を検出したが、南から3間目は30尺あり、通路として開けてあったと考える。南から2・3番目の柱穴では柱の礎板に塼を使っており、他の一つは抜取痕跡の底部中央に瓦がつまっていた（図9）。礎板塼は5～6個を2段ずつ積むが、形状からみて、恭仁京遷都の際に壊した塼積擁壁の塼を転用したと考える。第192・217次調査でもSA13404の柱穴で同様の地下地業を確認している。

SD17861・SD17863　SD17861はSD17860を壊してつくった蛇行する素掘り溝。西区南半ではSD17860と同様に

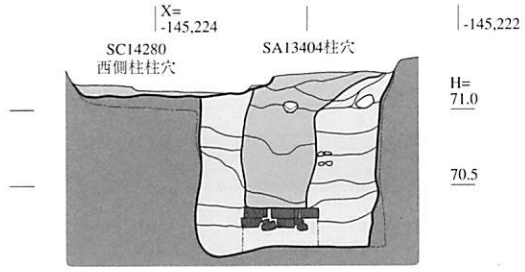


図9　SA13404・SC14280　断面図（Y=－18,683.0）　1：50

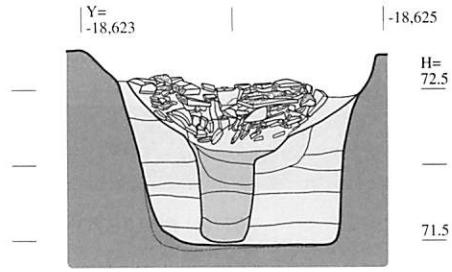


図10　SB17870南庇柱穴　断面図（X=－145,228.3）　1：50

幅広で深くなる。溝底にSA13404の礎板塀と同形状の塀を捨てている。D期のSD17862に切られる。

SD17863はSD17860の7尺東にあり、SX17865を切る素堀りの南北溝。幅約50cmで22m分検出した。

D期の遺構

SC13400・SD17862　平城京還都後のD期に西面築地回廊SC13400がつくりなおされた。B期の築地回廊基底部を踏襲し、SD17862を東雨落溝とする。側柱は礎石建ちと推測するが、礎石据付掘形や基壇外装などはまったく残っていなかった。

SD17862はSC13400の東雨落溝で、SD17860とSD17861の西岸を破壊する。幅広で浅く素掘りだが、これはF期に破壊された姿であり、最初の姿は不明である。溝の東肩がSX17866の上面と一致するので、SX17866の上面から掘り込んだとすれば、掘削がE期に下る可能性もある。

SX17866　SD17862の東側で中区まで不整形に広がるバラス敷き。SX17865を覆い、SX17865より小振りのバラス（直径約2～3cm）で形成される。E期のSB17874の柱穴に切られており、E期建物を建てる時点では敷かれていたことがわかる。

E期の遺構

SB17870・SS17885　7間×3間の身舎に南北庇が付く掘立柱東西棟建物で、身舎内に間仕切りがある。西脇殿群の中心建物とみられる。柱間は桁行、梁間とも10尺等間。側柱や庇柱は掘形が160～180cm四方で深さも120～130cmと大きく、抜取痕跡は上部が漏斗状で下部は円筒状であった（図10）。遺物は抜取痕跡上部に含まれていたが、特に南側柱の東端2基の抜取痕跡で多量の瓦片と鉄釘が出土した（図11）。また足場穴もSS17885a, bの2回分がみつかっている。

SB7155　桁行3間×梁間1間の身舎の南北中央1間に土庇がつく掘立柱東西棟建物。柱間は桁行12尺等間、梁間10尺等間で、北庇は9尺、南庇は10尺出る。第72次北調査で部分的に発掘し、今回全体を検出した。

SB17871　桁行3間以上×梁間3間の掘立柱東西棟建物。柱間は桁行、梁間とも10尺等間。第69次調査で検出したSB6655と対応することから桁行5間と推測する。

SB17872・SD17881・SD17882・SS17886・SB17873・SD17883・SS17887　SB17872とSB17873は3間以上×梁間2間の掘立柱東西棟建物で、東側柱を揃える。ともに柱間は桁行、梁間とも10尺等間で、一部、SB7209の柱穴に切られる。第69・87次北調査で検出したSB6666、SB6669と対応することから、桁行7間と考える。

SB17892に付随して、南側柱より6尺離れた位置で南雨落溝SD17881を東西5.5m、北側柱より6尺離れた位置で北雨落溝SD1882を東西6.5m検出した。またSB17893でも、南側柱より6尺離れた位置で南雨落溝SD17883を東西5.5m、さらに足場穴SS17887も検出した。

SB17874・SD17884・SD17885　桁行1間以上×梁間2間の掘立柱南北棟建物。柱間は桁行、梁間とも10尺等間で、北端1間分を検出した。調査前は第87次北・南調査で検出したSB8245と対応する遺構であることから、梁間3間の総柱建物と想定していた。しかし今回、東1間分が検出できず、西から2列目の柱穴も妻柱以外検出できなかったことから、SB8245のような梁間3間の総柱建物にはならないことが判明した。

また今回、北側柱から8尺離れた位置で北雨落溝SD17884を東西4m、西側柱から10尺離れた位置で西雨落溝SD178885を南北4.5m検出した。

SK17875　東区北端中央で検出した土坑。東西約3.3m×南北約4.5m以上、ほぼ長方形を呈しており、深いところで約70cmある。土坑内で瓦編年Ⅲ期に属する軒丸瓦6691Aが出土し、土坑上面でF期のSB7209の足場穴がみつかっていることから、E期の遺構と考える。

SD17876・SD17877・SD17878　SD17876、SD17877、

図11　SB17870南東隅柱穴検出状況

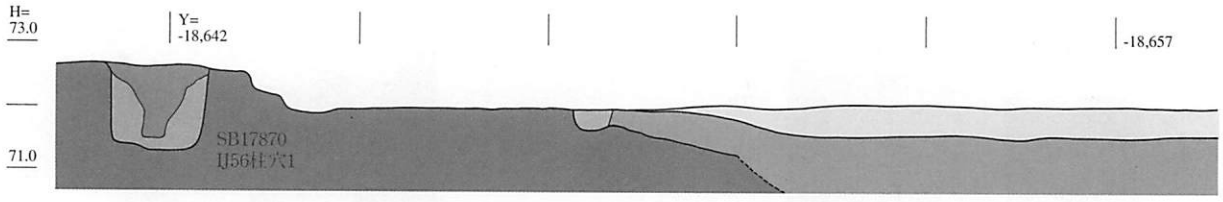


図12　SB17870～SD17860にかけての断面図　（X=－145,219.5）　1：120

SD17878はそれぞれ中央建物群のSB6611、SB7150、SB7152の西雨落溝で、南北にわたって9m、3m、8mを検出した（SD17876の幅は90cm）。それぞれ溝の内部に石の抜取痕跡が重複して連なっているため、本来は一連の石敷雨落溝であったと推測する。

SC14280・SB17880　E期の西面築地回廊SC14280はA期以来の築地基底部を踏襲し、1間門SB17880を開く。今回、礎石据付堀形を東側柱で6基、西側柱で2基検出した。築地心から側柱心までは12尺、側柱の柱間はA期よりも狭く、13～14尺であった。柱穴はいずれも深さ約40cmと浅く掘形・抜取を区別できないため、礎石の据付堀形の下部とみられる。

SB17880は築地回廊に開く掘立柱の南北1間門で東面門SB8230に対応する。柱間は15尺で、柱穴2基を検出したが、うち南の柱穴の南東隅・南西隅に直径約30cmの上面の平らな礎石が据えられていた。これは建築的にみると、築地塀の切れ目を押さえる「かいのくち」という板壁を支える柱の礎石と推測できる。さらに柱穴と柱穴の間で敷石の抜取痕跡も検出した。

F期の遺構

SB7172・SS7228・SB7209・SS17889　SB7172は桁行5間×梁間2間の身舎に東西庇が付く掘立柱南北棟建物。柱間は桁行、梁間とも9尺等間だが、庇の出は各13尺となる。第72次調査で一部を検出し、今回全体を検出した。庇の柱穴はすべて検出したにもかかわらず、身舎の柱穴は2基検出しただけである。中央間の東西2基の柱穴は間仕切り壁の柱と考える。また足場穴SS7228も検出した。

SB7209は桁行4間×梁間3間の身舎に南北庇が付く掘立柱東西棟建物。柱間は桁行8.4尺等間、梁間9尺等間、庇の出が各12尺となる。SB7209でもSB7172同様、庇柱はすべて検出しているが、身舎柱で見つからない部分があった。また足場穴SS17889も検出している。

SB17890　桁行5間×梁間2間の身舎に東庇・南庇が付く掘立柱南北棟建物。柱間寸法は桁行、梁間ともに9尺等間で、東庇は10尺、南庇は12尺出る。東妻柱は検出していないが、東1間のみ柱間が広いことから東庇が付くと考える。第87次北調査で検出した四面庇の付くSB8224に対応するが、想定位置よりも西に約3mずれ、西庇が付かないことから同規模とはならない。

SA17891・SA17892　SA17891はSB7172の南妻柱列より西にのびる掘立柱東西塀。SA6624に対応する。柱間寸法は10.5尺等間で、今回は4間分を検出した。さらに西にのびて西区のSB17899につながる。

SA17892はSA17891の東から3番目の柱穴から南にのびる掘立柱南北塀。柱間寸法は10尺等間で、今回は5間分を検出したが、さらに調査区外南につづく。

SA17893　掘立柱南北塀。SA17892の西15尺の位置で平行にのびる。柱間寸法は6.5尺等間で、4間分を検出したがさらに調査区外南につづく模様。

SA17894・SA17895　SA17894はSA17892の南から3つめの柱から東にがのびる東西掘立柱列。SA17895はSA17894の南5尺離れた位置でそれと平行に並ぶ東西掘立柱列である。柱間寸法はともに4.5尺で各4間分検出した。SB17871の柱穴を切るので、F期の遺構と考えられるが、柱間寸法が極端に小さく、掘形が類似していることから短期間で作り替えられた一連の塀と推定する。

SA17896・SA17897・SA17898　SA17896は中区で検出した掘立柱南北塀。SB17870の柱穴を切る。今回3間分を検出したが、SA6625と対応することから調査区外の南北につづく模様。柱間寸法は10尺等間。

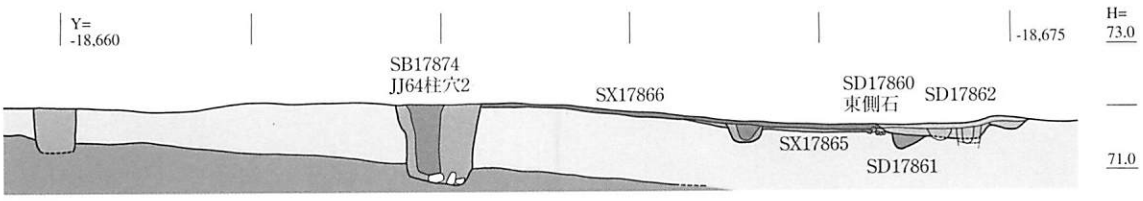
SA17897はSA17896の西30尺の位置でみつかった掘立柱南北塀。柱間寸法は10尺等間で2間分を検出した。SA6629と対応するため、南北に延長するとみられるが、柱穴は非常に浅く、南は削平されて検出できなかった。

SA17898はSA17897の西10尺の位置で検出した掘立柱南北塀。浅い柱穴1基を検出しただけであるが、SA8225と対応することから、調査区外北にのびるとみられる。

SB17899　SB17899はSA14330の東にある1間×4間の掘立柱南北棟建物。西は築地塀、南はSA17891に接していることから、隅に建つ物置小屋のような建物か。

SA14330・SD17900　SA14330は第217次西調査で検出した築地塀。西面築地回廊の基底部を踏襲してつくられたと考える。西区南端で幅約80cmの東雨落溝SD17900を南北約7.5m検出し、築地心と溝心との距離は11尺であることから築地塀の規模は22尺と推定できる。

SD17901a・SD17901b　東区北部で検出した南北溝。東区北端より約15m検出したが、さらに北にのびる模様。SD17901aは幅約1m、深さ約40cm、堆積土は軟質灰黄土



である。SD17901bはSD17901aの中央にあり、幅約50cm、深さ約25cm、堆積土は瓦を多く混入する黄褐粘質土で、下部には扁平な石や石の抜取痕跡がある。おそらく前者が暗渠の据付溝で後者が抜取溝であろう。

SD17902a・SD17902b　SD17901の南端で折れ東へのびる東西溝。東西８ｍ検出。a,bの分類はSD17901に従う。E期柱穴と切り合うことから、SD17901・SD17902はF期に属することがわかる。

G期の遺構

平安時代以降の遺構は、西区東半部の耕土直下で土器や瓦器を多量に含む暗灰土層があり、この面で遺物を含む小穴や土坑、柱穴などを検出したほか、西区西端で北西から南東に流れる斜行溝を検出した。また東区では遺構面直上で縦横にはしる耕作溝も多数検出した。

遺構変遷

以上のことから、遺構変遷は次のようになる（図13）。

A1期・A2期　A1期は、築地回廊で囲んだ東西178m南北318mの区画の中央北寄りに、大極殿と後殿を建てる時期。この時期の大極殿には、南面に階段を付設していない。大極殿から西面回廊までは中程で地山が急激に西に下がり、バラスの多く混ざる土と粘質土を交互に積んで整地していた。A2期は、大極殿の南面にSB6680を建て、西は東雨落溝SD17860をともなう西面築地回廊で画する。

B1期・B2期　B1期は、SB6680を壊して大極殿の南面中央に幅38尺、出14尺の石階を取り付ける時期。西面築地回廊の東雨落溝は存続する。B2期は、大極殿の南面階段の両脇にSB6636, SB6643を付設する時期。

C期　恭仁京に遷都する時期。西面築地回廊SC13400を壊して大極殿とともに移築する。その後、築地回廊の西側柱の位置に掘立柱塀SA13404を建て、東雨落溝SD17860を壊して素掘り溝SD17861をつくる。

D期　平城京に還都する時期。還都後は、SA13404を壊さしてSC13400をつくりなおす。またこの時期に、SX17866を整備したと考える。

E期　大極殿を壬生門北方の第二次大極殿院地区に新築し、以前に大極殿があった地には掘立柱建物が林立する時期。高台中央に３棟の主殿、東西に脇殿と数多くの掘立柱建物群を建てた。今回は５棟の西脇殿を検出している。一方、A期の築地基底部を踏襲した西面築地回廊SC14280には１間門SB17880を開いた。

F期　平城上皇が平城宮に一時住まう時期。E期の主殿と同じ位置に主殿を、その東西に脇殿を配置した。西面築地回廊SC14280は築地塀SA14330につくりかえる。

G期　東区南半部に耕作溝、西区段差下に斜行溝がある。

『平城報告XI』の時期区分との関係

前述のとおり、A1, A2期あわせて『平城報告XI』のI-1期に、B1, B2期あわせてI-2期にあたる。すなわち『平城報告XI』では、大極殿の南面階段を創建当初からの付設と解釈したが、後述の検討の結果、付設前と後に分ける必要性がでてきた。C期は恭仁京に遷都するI-3期、D期は還都後のI-4期にあたる。西面築地回廊の東雨落溝の変遷観が南延長部の第192・217次西調査の所見と異なる。E期、F期はそれぞれII期、III期にあたり、既発掘部分の遺構解釈は特に変更はない。平成上皇期後は特に時代が比定できる遺構はみつからなかった。

遺構の問題点

第一次大極殿SB7200に関する成果の中で、基壇地覆石の据付掘形・抜取痕跡を明確に区別して検出し、基壇の平面規模が確定したこと、痕跡の折れ曲がりから北面西階段と西面階段の位置を確認できたことの意義が大きい。基壇化粧だが、据付掘形は外側が浅く内側が深く下がる２段掘りとなることから、地覆石の外側下面に延石はなかったと考える。一方、抜取痕跡の壁が垂直に上がることから、地覆石は抜取痕跡の中に収まり、幅は1.2～1.3尺程度と推測する。（基準尺は１尺=0.2954m）

南面階段について、『平城報告XI』では、SB6680の桁行柱間が北面階段を南に折り返した位置のみ広いのは、大極殿の階段をさけたためと考え、創建当初には南面階段が３基あると解釈した。しかし今回、南面西階段を検出できなかったことから、既発掘部分も含めた遺構の再検討したところ、北面階段の折り返し位置がSB6680の柱穴に重複することが判明した。南面階段の幅が北面階段の幅より狭くない限り、SB6680と常設の南面階段３基が共存するとは考えがたい。したがって創建当初には大極殿の南面階段はなく、B期に幅38尺の中央階段が１基付設されて完成期をむかえたと考える。

以上から、遺構変遷も『平城報告XI』とは異なり、恭仁京遷都前のA期とB期でそれぞれ2時期、計4時期に分けた。SB7200の前面に建つSB6680の建設時期は常設の石階がないA2期とするが、柱間が広い部分には仮設の木階などを設置した可能性を考える。

ところで大極殿の足場穴であるが、東面にも今回西面と南面で検出したものと同様の柱列が並ぶ。特に東面階段部分で東に突出した柱穴列がみられ、踊り場の存在が予想できる。また、南面中央階段の内側にも建物としてまとまらない柱穴が東西4基並ぶが、これも足場穴とする。ちなみに北面には足場穴となる柱穴列はみられない。

一方、SB6643だが、『平城報告XI』では4間×4間の規模としたが、調査の結果、4間×3間の東西棟となった。これを踏まえ、SB6636も再検討したところ、SB6636も同規模で中軸線に対してSB6643と対称となることがわかった。これらを大極殿の南面中央階段をさけるように左右に建てていることから、B期でも大極殿の南面中央階段ができた後のB2期と考える。

また、西面築地回廊SC13400を推定心より約60cm西で検出したことから、大極殿本体の中軸線Y=-18,589.9と回廊で囲まれる大極殿院の中軸線Y=-18,590.4に約50cmのずれが生じることが判明した。ちなみに東面門心と西面門心による東西築地回廊の心心距離は178.18mとなり、基準尺を1尺0.2954mとした場合、約603尺となる。

E期の遺構は、西脇殿とみられるSB17870, SB17871, SB17872, SB17873を東脇殿からの推定位置で検出した。したがって、ほぼ東西脇殿が10尺方眼にのる形で中軸線に関して対称に配置されていた。ただしSB17874は、対応するSB8245とは異なる規模となったため、必ずしもすべての脇殿が対称になるとは限らないことがわかった。

F期の遺構の特徴は、柱穴がE期より全体的に浅く、特殊な建築構法がとられていることなどが挙げられる。特にSB7172やSB7209で、庇の柱穴は検出したのに身舎の柱穴は検出できなかった理由として、次の2つが想定できる。①庇も身舎も掘立だが、身舎部分を盛り土して柱穴を掘り、盛土が削平されて検出できなかった場合、②庇は掘立だが身舎は礎石建ちで、浅い据付掘形は検出できなかった場合である。しかし身舎の柱穴は方形か隅丸方形であり、礎石の据付掘形とは考えにくい。したがってこれらは①の場合が当てはまるであろう。

奈良時代の敷地造成と旧地表面のレベルに関しては、A～D期は後世の削平が激しく、西面築地回廊の東側に2層のバラス敷きがあった程度しかわからない。しかしE・F期の場合は遺構の遺存状況から多少推定できる。

今回、E期の中央建物群の西雨落溝SD17876、SD17877、SD17878を検出した。これらは底石の抜取痕跡しかみつからなかったが、東雨落溝SD6608では底石がかなり残っていた。そこで成20cm程度の側石を1石置いたと仮定した場合、旧地表面のレベルは中央建物群の北端から南端までの南北約50mで、73.25m～72.74mと南に約50cm下がっていたと推定できる。この傾斜は中央建物群と東脇殿群の検出面や柱穴底でも観察された。

一方、西脇殿群では、南北方向の検出面および柱穴底はほぼ水平で東のような傾斜はない。東西方向では、中区の段差に関して、段差東にあるSB17870のIJ56柱穴1と段差西にあるSB17874のIJ64柱穴2の深さはほとんど変わらなかった（図12）。ここでSB17870とSB17874で旧地表面がほぼ水平ならば、IJ64柱穴2は深さが180cm近いことになるが、今回検出したE期の柱穴で深さが140cmを越えるものはなかった。したがって旧地表面はSB17870とSB17874の間でレベル差があったとみられる。

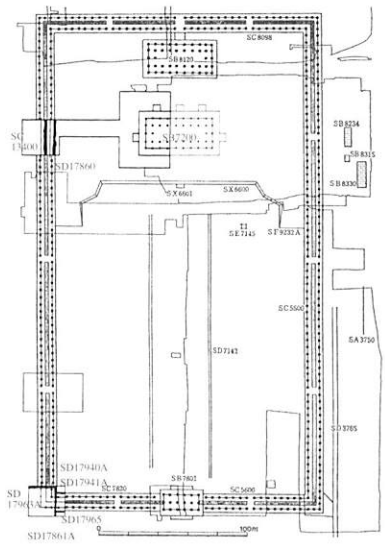
しかも両建物に雨落溝があったとすると、両雨落溝間の約15mの空間内で、約50cmのレベル差を解消しなければならない。以上から、ここにはスロープでなく擁壁のような「段差」を設けていたと考えるべきだ。

ところで、この「段差」はF期まで残存していた可能性が高い。つまり、SB17890とSA17896の柱穴はある程度の深さを持つのに対し、SA17897とSA17898の柱穴は深さ数cmと非常に浅い。これはSA17898以東では旧地表面が高い位置にあり、その西に「段差」が設けられていたが、後世に大きく削平されたことを示唆している。さらに、E期のSB17874とF期のSB17890をともに推定位置より西で検出したことに注目したい。これらが他の遺構と異なり、東脇殿と対称位置に配置できなかったのは、建てる際に「段差」をさけたためではなかろうか。

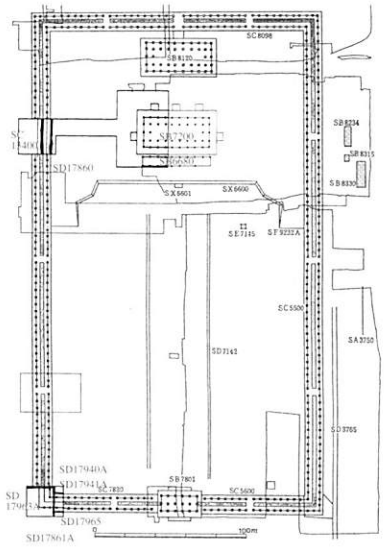
このようなことから、少なくともE・F期の旧地表面ではSB17874とSB17870の間に西に下がる「段差」があったと推定できる。これがE期造成時にはじめてつくられたか、それともA～D期にも存在したかは今後、本調査区南の発掘で解明することを期待する。　（蓮沼麻衣子）

表1　時期区分比較表

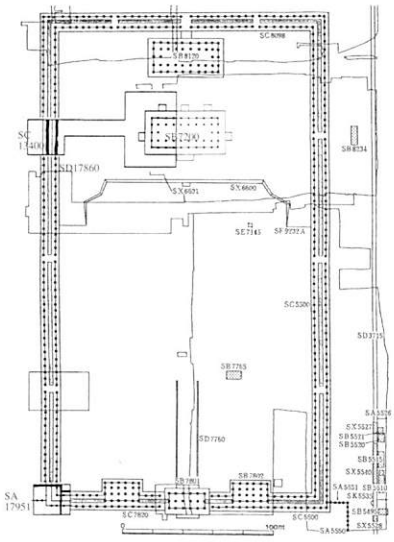
295次	296次	『平城報告 XI』
A1	a	I -1
A2	a	I -1
B1	b	I -2
B2	b	I -2
C	c	I -3
D	d	I -4
E		Ⅱ
F		Ⅲ
G		中世以降～



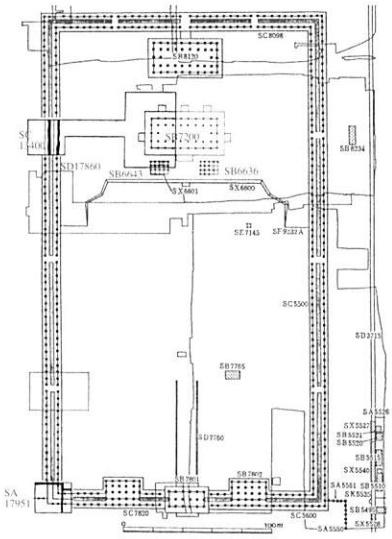
A1・a期



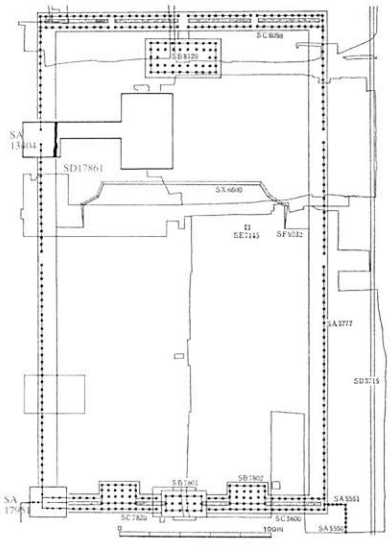
A2・a期



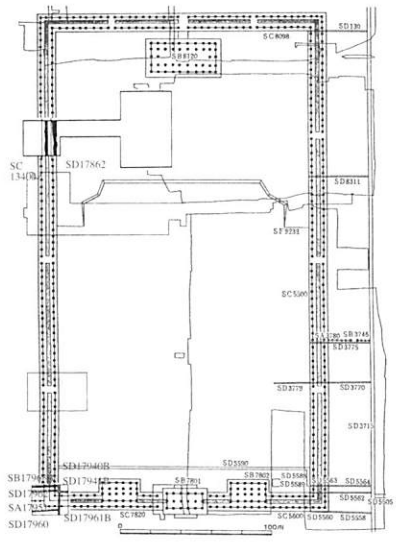
B1・b期



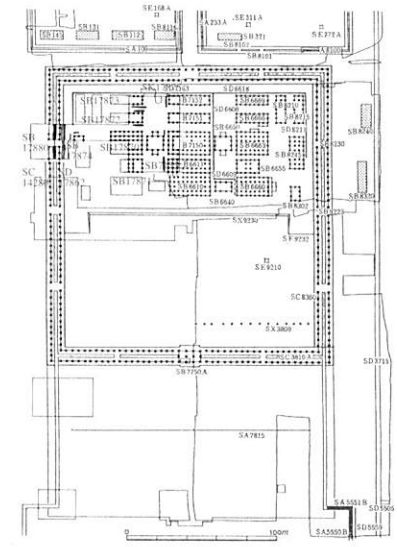
B2・b期



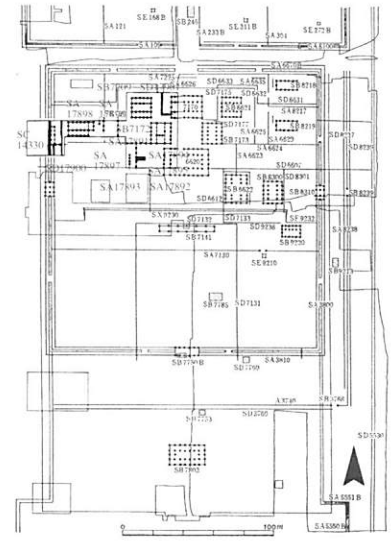
C・c期



D・d期



E期



F期

図13　第一次大極殿院　遺構変遷図　1：5000

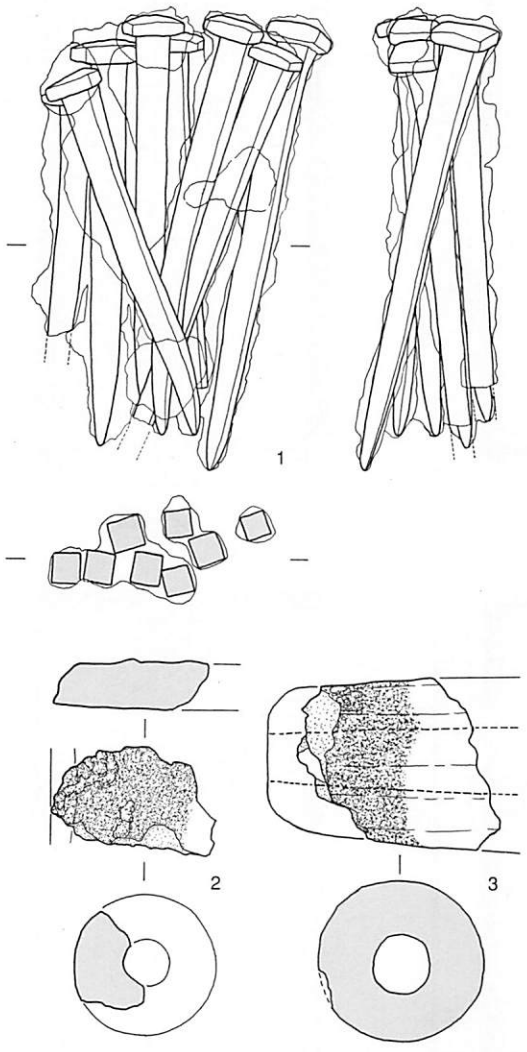


図14　第295次調査出土鉄釘・鞴羽口実測図　1：3

出土遺物

金属製品ほか

1は鉄釘。東区SB17870の南東隅柱穴抜取痕跡穴から、同一規格の角釘8本が束状に固着して出土した。基部で一辺約1.2cmの脚部に、一辺約2.2cmの頭部をつける鍛造の方頭釘である。最もよく遺存している個体の全長は18.6cm。束ねていた紐などの痕跡はみられない。曲がっている個体が含まれており、建物に使用していた釘を解体時に廃棄したものであろう。

2・3は鞴の羽口で、直線羽口の先端部周辺の破片である。胎土は礫を多く含み、黄褐色を呈する。ともに西区南東部より出土した。2は外径5.6cm、内径1.8cmに復元できる。先端は溶解しており、外面は被熱のため灰色から黒色に、内面は橙色から暗赤褐色に変色している。3は先端部を欠損している。外径6.5cm、内径2.3cm。外面は灰色、内面は橙色に変色している。　（石橋茂登）

土器・土製品

瓦塼類以外の土器・土製品には、古墳時代の埴輪・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器、平安時代の土師器・須恵器・黒色土器、中世の瓦器・土師器・白磁、青磁などの輸入磁器・国産磁器、近・現代の陶磁器があるが、ここでは第Ⅱ期（『平城報告XI』）建物群の柱抜取痕跡及び西面築地回廊周辺で出土した古代の土器についてふれることにする（図15）。

第Ⅱ期建物群柱抜取痕跡出土土器　SB17870・17871・17874の柱抜取痕跡から比較的まとまって出土した。特にSB17870では、大量の瓦や燃えた木片、木炭とともに出土しており、その出土状況は、これらの土器を建物解体時に他の廃材とともに一括して投棄したことを示している。土師器と須恵器が各々の抜取痕跡から出土したが、7割以上が土師器である。土師器には杯A（3、4）、杯B蓋（1、2）、杯C（5、6）、皿A（7～10）、椀A（11～14）、甕A（15～18）、高杯、盤Aがあり、大小の甕A、椀A、皿Aの出土量が目立つ。須恵器には杯A（19）、杯B（20～22）、杯B蓋（23～25）、壺A、平瓶、甕があり、食膳具である杯A・Bの出土量が大半を占める。これらの土器は、その形態や調整から平城Vと考え、SB17870は長岡京遷都後間もない頃に解体されたものと思われる。SB17871出土の遺物は少なく、甕（34）が図示できるのみである。SB17874の一ヵ所の柱抜取痕跡からは、土師器杯Aと皿A4点が一括して出土した（26～29）。杯A（26）はC手法で調整されるが、口縁部直下外面には削り残しが認められ、皿Aの削りも粗く施されている。これらの土器はその特徴から平城上皇時代の平城Ⅶと考える。

西面築地回廊周辺出土土器　東雨落溝SD17862出土の土師器杯A（30）、皿A（31・32）を図示した。いずれも奈良時代後半。（33）は平底を呈する須恵器甕で、口縁部外面は赤褐色に発色する。愛知県猿投窯の製品。遺物包含層である暗灰色砂礫土層出土。

今回、第Ⅱ期建物群の柱抜取痕跡から出土した土器は、建物解体のような作業時に使用された食器の構成を知る手懸かりとなるものである。また、出土土器の年代から、第Ⅱ期建物群の解体には時期差のあることが推定されるようになった。その具体的な土地利用の変遷過程の解明が今後の検討課題として残される。　（川越俊一）

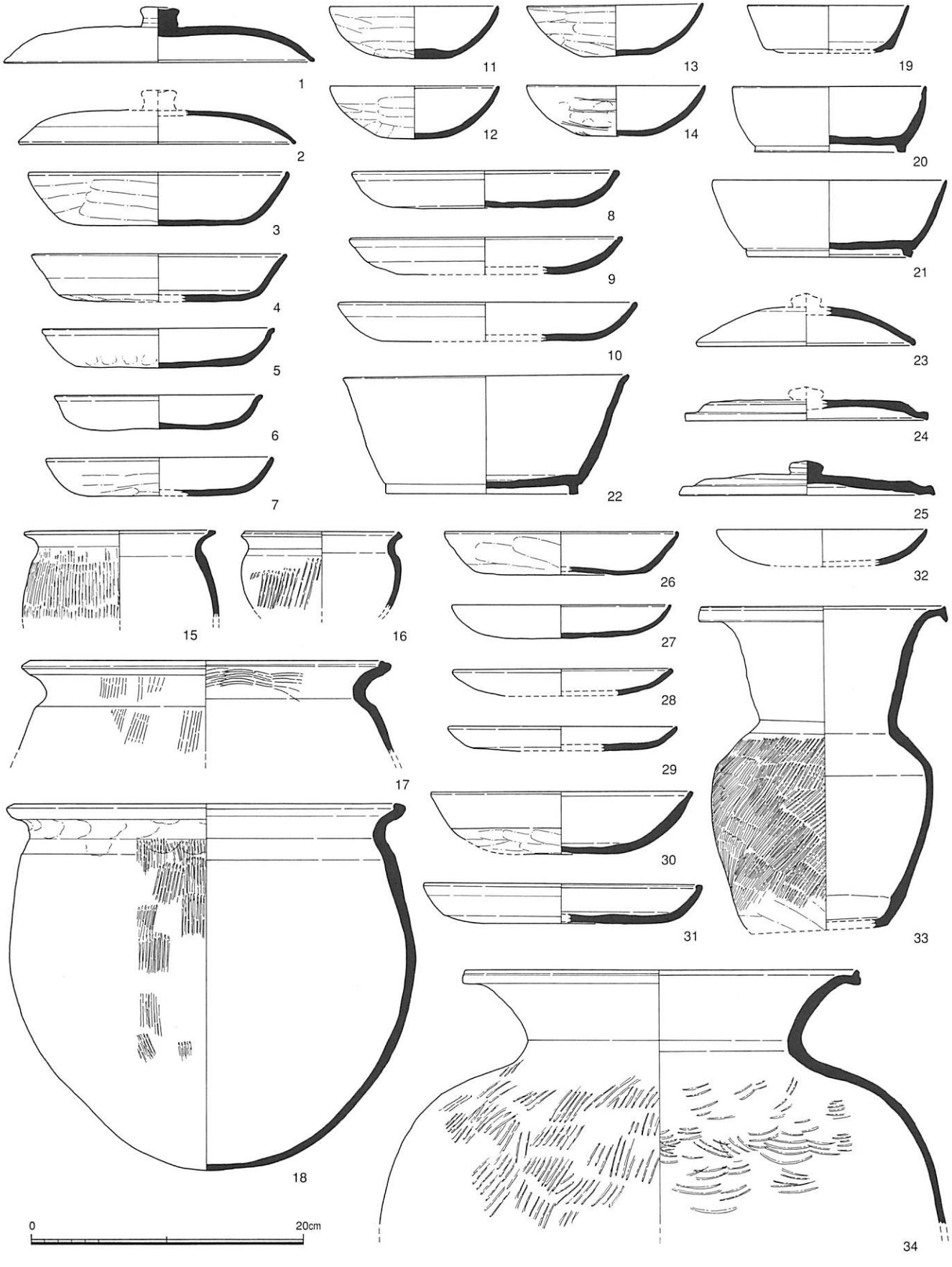


図15　第295次調査出土土器　1：4

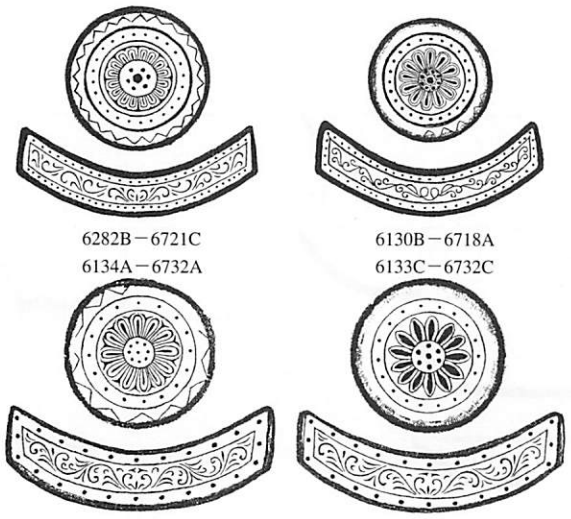


図16　第Ⅱ期殿舎の軒瓦

瓦塼類

従来の調査で、第一次大極殿院地区での軒瓦の組合せの大まかな変遷は、6284-6664、6313-6685→6225-6663、6282-6721→6133-6732であることが判明している（『平城報告XI』）。これは平城宮軒瓦編年Ⅰ～Ⅱ期前半、Ⅱ期後半～Ⅲ期、Ⅳ期に対応する。当調査区での出土軒瓦の様相を①殿舎地区と②西面回廊地区に分けて記述し、③で問題点を述べる。

①殿舎地区　従来の調査では、瓦Ⅱ～Ⅲ期の6282-6721、瓦Ⅳ期の6133・6134-6732の組合せが主であり、大極殿SB7200に使用の6284C-6664Cが少ないのは、SB7200とともに恭仁宮に運んだためと推定している。

第295次調査区でも、瓦Ⅰ期の6284C 0点、6664C 2点、6664I・6664M・6665Aが各1点とやはり少ない。瓦Ⅱ～Ⅲ期では、6225・6308B各1点、6282B 6点、6721C 2点が、SB17870の柱抜取痕跡から出土したほか、6131A・6282 B・6282C・6282G・6308Cが各1点、6663A 3点、6663が1点、6691A 5点、6721C 1点がある。瓦Ⅳ期では、SB17870の柱抜取痕跡から、6130B 52点、6718A 97点のほか6133A 1点、6133C・6732A各3点、丸瓦218kg、平瓦435kgが出土、SB7155の柱抜取痕跡から6718A・6732A各1点が出土したほかは、6134A 3点、6732A・6732C各1点が出土したに留まる。

②西面回廊地区　東面築地回廊で殿舎地区に接する北半部分では、瓦Ⅰ期の6284C-6664C、瓦Ⅱ～Ⅲ期の6282-6721、瓦Ⅳ期の6133-6732が多かった。当調査区の西面回廊でも、瓦Ⅰ期の6284が1点、6664C 7点、6665A・6314A・6682A各1点と、殿舎地区に比して多い。瓦Ⅱ～Ⅲ期では、6282B・C・G各1点、6721が3点、6691A・6681B各1点、瓦Ⅳ期では6133C 1点、6718A 2点、6732C 1点、6732O 2点である。点数が少ないが東面回廊と傾向は同じである。

表2　第295次調査出土瓦塼類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6130	B	53	6663	A	3
6131	A	1		?	1
6133	Aa	1	6664	C	9
	C	4		I	1
	?	1		M	1
6134	A	3	6665	A	2
6225	?	1	6681	B	1
6282	B	8	6682	A	1
	Ca	2	6691	A	6
	G	2	6718	A	100
6284	?	1	6721	C	5
6308	B	1		?	1
	C	1	6732	A	4
6314	A	1		C	2
型式不明		61		O	2
近世		1	型式不明		50
			現代		1
軒丸瓦計		142	軒平瓦計		190

	丸瓦	平瓦	塼	凝灰岩	道具瓦他	
重量	270.4kg	687.8kg	48.5kg	60.7kg	鬼瓦	1
点数	2,804	8,135	80	40	面戸瓦	5
					隅切平	1
					刻印丸「理」	1

③問題点　第Ⅱ期（『平城報告XI』）のSB17870の柱抜取痕跡から多量に出土した6130B、6718Aを、SB17870に葺いたのだろう。初めて明らかになった組合せである。この2種は、殿舎地域の他地点では7点ずつ出土しただけであるから、第Ⅱ期殿舎では建物によって軒瓦の種が異なっていたと推定する。従来、6130Bは瓦Ⅱ期後半に置いていたが（『平城報告XⅢ』）、瓦Ⅳ期に下ると見られる。

『平城報告XI』では、第Ⅱ期殿舎を飾った瓦として、瓦Ⅳ期の6133・6134-6732のみならず、瓦Ⅱ～Ⅲ期の6282-6721も挙げている。これは第Ⅱ期殿舎の建設期間が瓦Ⅱ期からⅣ期まで長期に及んだことを意味するのだろうか。『平城報告XI』での遺構変遷における、第Ⅰ-3期は恭仁宮期で瓦Ⅱ期後半、第Ⅰ-4期は平城還都～天平勝宝5年で瓦Ⅲ期、第Ⅱ期は天平勝宝5年以降で瓦Ⅲ期末以降となるが、天平勝宝5年は東楼SB7802の解体年であって、第Ⅱ期建物の実際の建設年代がどこまで下るかは、諸説があって確定していなかった。第Ⅱ期建物群の個々の建物に葺いた瓦は不明な点が多かったが、正殿SB6610・6611の柱抜取痕跡から6134・6133-6732が出ており、今調査でもSB17870の柱抜取痕跡から多量の6130B-6718Aが出土したことから、瓦Ⅳ期を主体とすると考えて良かろう。そうすると殿舎地区での瓦Ⅲ期の瓦は、一段階古い瓦を第Ⅱ期造営に用いたか、第Ⅱ期でなく第Ⅰ-4期の造営に用いたかのどちらかだろう。後者とすると、第Ⅰ-4期の造営は東面・西面の築地回廊の復活だけであり、殿舎地区では何も行っていないという過去の所見に照らすと、殿舎地区から一定量のⅢ期瓦が出土することが説明しにくい。還都前後から来るべき造営に備えて用意していた多量のⅢ期の瓦を、第Ⅱ期造営にも投入したと考える方が良い。　（岩永省三）

3．第296次調査

第296次調査はいわゆる第一次大極殿を取り囲む築地回廊の西南隅部分の状況を明らかにすることを目的として、東西24m、南北20mの、480m²の調査区を設定して行った。

調査期間は1998年11月９日～1999年１月13日である。

基本層序

調査区の発掘調査前の地形は、大きく南辺部（調査区南端から北約５mまで。結論的には朝堂院部分に相当）及び西辺部（調査区西端から東約６mまで。大極殿院区画の西外側部分に相当）の一段低い逆Ｌ字形の範囲と、それ以外のやや高い部分（築地回廊基壇部分及び大極殿院広場部分に相当）からなり、奈良時代の旧状をある程度反映したものになっていた。

調査区南辺部では、上から順に整備盛土（約45cm）、耕土（約10～30cm）、黄灰色土（約５～15cm）、灰褐色土（約５～20cm）の遺物包含層があり、その下で後述の礫敷SX17944（約５～10cm、上面の標高約67.2～67.4m）を検出した。礫敷の下、青灰粘土の地山との間に、奈良時代の整地土とみられる灰褐色または橙灰色の粘質土（０～約20cm）が残る部分もあるが、調査区南壁ではこれは失われている。

西辺部では、上から順に整備盛土（約20～60cm）、耕土（０～約40cm）、黄灰色土または礫混灰褐土、淡茶灰砂質土などの遺物包含層（０～約40cm）、南辺から続く礫敷SX17944（約５～10cm、上面の標高約67.3～67.4m）となる。さらにその下に、奈良時代の整地土とみられる暗茶斑茶褐色土（０～５cm）、明橙灰粘質土（０～５cm）が残る部分があり、その下に青灰色粘土の地山が続く。

中央部以北の一段高い部分では、整備盛土（約35～40cm）、耕土（約５～15cm）、遺物をほとんど含まない黄灰色土または橙褐色土の層（約０～５cm）の下に、後述の礫敷SX17943（約５～15cm、上面の標高約67.9～68.0m）がある。この下で築地回廊基壇上面などを検出した。

遺構

今回の調査では、築地回廊２、掘立柱塀１、溝11、広場２、礫敷２などを検出した。

第一次大極殿院地区では、過去に1967年の第41次調査で、今回の調査地と東西対称の部分に当たる築地回廊東南隅を調査している。その成果は、大極殿院東半分全体の調査と合わせ、『平城報告XI』にまとめられている。本報告では、まず今回の調査の知見に基づいて遺構の時期変遷をおさえた上で、最後に『平城報告XI』の時期区分との対応関係を述べることにする。

a期の遺構

SC7820・SC13400　第一次大極殿院を区画する南面築地回廊SC7820と西面築地回廊SC13400である。基壇積土及び礎石痕跡６カ所を確認した。基壇南辺、西辺では、整地土及び地山を掘り込んで幅約20～35cm、深さ約10～15cmの溝を巡らして、基壇土を積む範囲を画している。基壇の断面観察によって積土の状況をみると、青灰色粘土の地山の上に、南方の朝堂院地区と一連の工程の整地土を約15～25cm敷いた上で上述の溝を掘り、その内側に現存約35～50cmの厚さで部分的に礫の入る層を交えて版築を行っていることがわかる。なお、大極殿院の西外側にも奈良時代の整地層が残るが、これと基壇部分の整地とは一連のものではない。

築地回廊東半を発掘した第41次調査や、SC13400の北延長部を発掘した第192次調査では、掘込地業を確認しているが、今回では、上述の基壇南、西辺を画する溝より内側を掘り込んでいる状況は認められない。

また、基壇外装については、SC13400の東辺の一部で、後述のd期の雨落溝SD17940Bが設けられる以前に抜き取られた痕跡を検出したのみで、他の部分では削平により確認できなかった。その他、現存基壇積土南辺部の斜面で、もともと基壇外装に用いられていた可能性のある長径約25cmの凝灰岩片を、転落した状態で検出した。

次に、礎石の状況をみると、SC7820の南側柱列３カ所、SC7820北側柱列及びSC13400東側柱列計３カ所の抜取痕跡を検出した。一部については、長径15～40cm前後の根石が入っていた。SC13400西側柱列は削平されていた。また、一部の礎石痕跡の傍らに足場穴の可能性のある小穴を検出したが、延長部が調査区外となるため、確定はできない。

つづいて規模についてみると、柱間は検出長が短いため正確には測定しがたいが、桁行約4.5m、梁間約7.0mに復元できる。現状では削平されているが、梁間の中央に

図17　SX17943（上段）とSX17944（下段）（南東から）

図18　第296次調査区全景（東から）

築地が想定できるので、築地の心から側柱までは約3.5mとなる。すなわち、回廊西南隅のSC7820とSC13400の交差部分では柱間約3.5mということになる。また、築地想定心から基壇南辺までは約5.2m、西辺までは約5.4mである。すなわち、基壇幅は約10.4m～10.8mと推定できる。

なお、SC7820とSC13400における築地心の交点の国土方眼座標はX＝－145,461.8、Y＝－18,677.5である。

今回検出した築地回廊の規模は、第41次調査で検出したものの規模とほぼ同じであることが判明した。

SD17940A　a期における西面築地回廊SC13400の東雨落溝。d期に同位置につくられるSD17940Bにより破壊されているため、SD17940Bの下層に厚さ約５～15cmの堆積土が残るのみである。

SD17941A　a期における南面築地回廊SC7820の北雨落溝。d期に同位置につくられるSD17941Bにより破壊されているため、SD17941Bの下層に厚さ約25cmの堆積土が残るのみである。なお、築地回廊の南、西雨落溝は削平されており検出できなかった。

SX17942A　a期における大極殿院内の広場。調査区東辺、北辺に設けた断ち割りトレンチで検出した。整地土が約10～20cmの厚さで残るが、検出面は礫やバラスなどが残っておらず、凹凸があって平らでないため、本来の面をとどめていないと思われる。

SD17963A　SD17940Aの雨水を暗渠により築地回廊SC13400の西側へ排出するための東西溝。暗渠は木樋を通していた可能性もあるが、おそらくd期に同位置につくられるSD17963Bの木樋掘形を掘る際に抜き取られており、SD17963Bの下層及び北肩に部分的に木樋を据えた際の裏込めの灰色粘土が残るのみである。

SD17961A　SD17940A、SD17941Aの雨水を暗渠により築地回廊SC7820の南側へ排出するための南北溝。暗渠は木樋であったと推定されるが、d期に同位置につくられるSD17961Bの暗渠掘削に先立って抜き取られており、SD17961Bの下層及び西肩に部分的に木樋を据えた際の裏込め土が残るのみである（図19）。

断面観察により設置の過程を復原すると、以下のようになろう。まず大極殿院で最初の基壇であろうSC7820をつくるにあたって、旧地表面を全体に地山まで掘り下げ平らにならす。ただし、この区画では、掘り込み地業はなされていない。それに続いて、地山の上に約25cmの整地を行った段階で、その面から掘り込んで木樋を据える。その後、土を埋め戻し暗渠を塞いだ後、回廊全体を覆うように基壇土を約40cm以上積んでいると考えられる。つまり、基壇上面では最初の掘形は検出できない。

SD17965　朝堂院内に東西に設置された詰石暗渠。幅約50cm、深さ約15～20cmの溝を掘り、径約５～10cmの河原石を詰めている。後述のd期の南北溝SD17961B及び東西溝SD17960により破壊されており、約3.2m分しか検出していないが、排水系統から考えて西に向かって流れていたものと考えられる。

b期の遺構

SA17951　朝堂院の北辺を画する東西の掘立柱塀。柱穴２基を検出。柱間約3.2m。地山の上に30cm以上基壇土を積んだ後、掘形を掘っている。

このほかのa期の遺構は存続したと考えられる。

c期の遺構

SA13404　大極殿院の西辺を区画する南北の掘立柱塀。SC13400を撤去した後に設けられている。SC13400

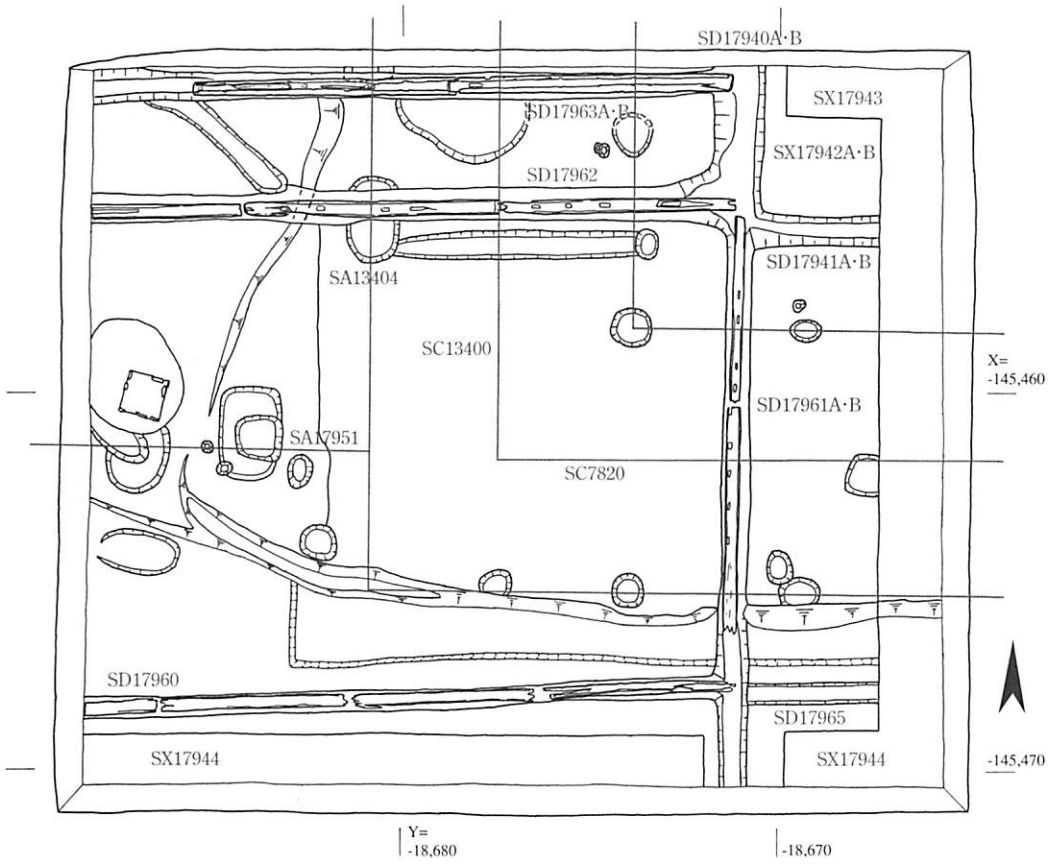


図19　第296次調査　遺構平面図　1：200

の西側柱列と筋をほぼ揃える。柱穴は2カ所検出したが、北のものは調査区外にかかり、柱間を正確には測定できなかった。南端は撤去されなかったSC7820の西端の柱に接続すると考えられる。北側の柱掘形はa・b期の東西溝SD17963Aを切り、抜取り穴は後述するd期のSD17963Bに切られる。南側の柱穴は掘形、抜取り穴ともにd期のSD17962に切られる。

この他、SC7820、SA17951などは存続していたと考えられる。

d期の遺構

SD17940B　d期における西面築地回廊SC13400の東雨落溝。検出面での幅約1.4m、深さ約30cm。溝の東肩に径約5～10cmの河原石を並べるが、転落しているものが多い。

SD17941B　d期における南面築地回廊SC7820の北雨落溝。幅約70cm、深さ約40cm。SD17940B同様、溝の北肩に径約5～10cmの河原石が小口を揃えて一列に並べられており、ほぼ全て原位置を保っているとみられる。

SX17942B　d期における大極殿院内の広場。SX17942Aの上に約20～25cmの土を積み、その上に0.5～1.0cmの厚さで径0.3～1.0cm程度の非常に細かい石を敷きつめている。この石は人工的に細かく砕いた小石であり、溝肩に並べられた石列で画されている。上面の標高は約67.6mである。大極殿院広場の景観を復原するのに重要な知見が得られた。

SD17940B、SD17941B、SX17942Bの上には瓦が約5～15cmの厚さで堆積していた。これは築地回廊を最終的に解体した際に投棄されたものであろう。この瓦堆積は下にいくほど完形のものを多く含む傾向にある。軒瓦の詳細は後に譲るが、面戸瓦や熨斗瓦が一定数出土しており注目される。上層は前述の礫敷SX17943に覆われる際、意図的に細かく打ち砕いて平らにならした跡が読み取れる。SX17943が第一次大極殿院築地回廊南辺部の廃絶とそう隔たらない時期のものであることを示している。

SD17963B　SD17940Bの雨水を西へ排出するための溝。基壇下を木樋暗渠で貫くが、基壇の西外側は木樋がないことと、砂が詰まった土の状況から開渠とみられる。SD17940A埋土、SA13404柱抜取り穴を切ってSC13400基壇上面から掘り込み、SD17963Aの木樋を抜き取った後に新たに木樋を据え、埋め戻している。木樋を据える際

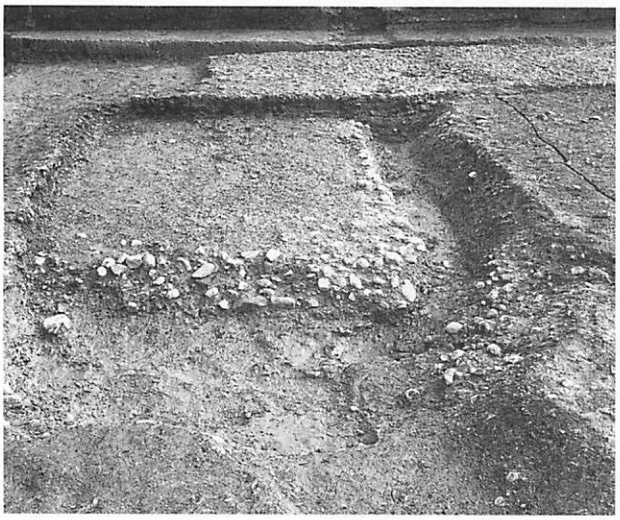


図20　SX17942B　（東から）

に、木樋全体を灰色粘土で包んだ状況が確認できる。
木樋は断面円形の材を断面逆台形に刳り抜き、蓋をしているが、蓋板は一部のみ残存し、大部分は腐食して失われていた。２本の材を用い、東側の材の西端を西側の材に印籠継ぎ状に差し込んでいる。材の法量は、東から長さ7.3m、径40cm、長さ6.9m、径40cmである。樹種はコウヤマキと思われる。東西両端及び継ぎ目部分では木樋の沈下防止のため、下に径15～20cm程度の河原石を敷いている。また、東西両端部では各２枚の板を一対打ち込んで、木樋がずれることを防いでいる。取水口である木樋東端では、樋内にも１mの範囲にわたって径５～15cm大の河原石を詰め、水を濾している。木樋には、蓋板を載せる桟をはめ込むための抉りが施されている。なお、この木樋には多数の柄穴があり、それをことごとく埋木で塞いでいる。これは第41次調査で検出したSD5563の暗渠に用いられていた木樋とほぼ同じ形態である。二本とも一方の端から２m程のところで身が細っているところがあり、その部分がもともと立てられていた時の地上に出ていた部分と掘形に埋まっていた部分の境と考えられる。柄穴の状況も考え合わせると、掘立柱塀の柱を転用したものであろう。おそらくc期のものを再利用したと考えられるが、それ以前の履歴を持っていた可能性が高い。

SD17962　SD17940BとSD17941Bの雨水を西へ排出するための溝。基壇下及び基壇西外側を木樋暗渠で貫く。SD17940A堆積土、SA13404柱抜取り穴を切って、SC13400基壇上面から掘込み、木樋を据え、埋め戻している。これも木樋は灰色の粘土で包まれている。SC13400の西側では明橙灰粘質土の整地層で覆われており、上から検出することはできない。木樋は断面矩形に材を刳り抜き、外形もある程度四角く整え、上から蓋をしている。蓋板は一部のみ残存するが、SD17963Bの木樋に比べてやせ細っている。３本の材を継いでいるが、材の長さは東から6.4m、6.7m、一番西のものは調査区外へ延びており、全長を計測できない。幅はそれぞれ35cmである。樹種はコウヤマキと思われる。これにも柄穴が残っており、転用材であろう。ただし柄穴には埋木をせず、精良な粘土を充填している。なお、断ち割ってみたが、暗渠の掘り直しの痕は確認できなかった。溝埋土から須恵器杯Aがほぼ完形で出土した。

SD17963BとSD17962を比較すると、勾配は前者が急で、木樋の形状や石敷の有無も異なることから、同様の機能を持つことを考慮すると、時期が微妙にずれると考えられる。しかし、重複関係や出土遺物からは前後はあきらかにできない。

SD17961B　SD17940B及びSD17941Bの雨水を南へ排出するための溝。基壇下を木樋暗渠で貫くが、朝堂院部分では開渠とみられる。SD17941Aの堆積土を切ってSC7820の基壇上面から掘込み、SD17961Aの暗渠を抜取り、灰色粘土で包んだ木樋を据えている（図18）。木樋は断面箱形に材を刳り抜いて用いている。蓋板は残っていない。２本の材を継いでいるが、北から長6.0m幅40cm、長4.8m幅30cmである。樹種はコウヤマキ。これにも木樋転用以前にあけられた柄穴があり、埋木を用いず粘土を詰めている状況が確認できる。

暗渠南端付近に一括投棄された状況で軒瓦がまとまって出土している。また、ほぼその位置に暗渠埋土を切って土坑SK17945が掘られており、中から土師器壺が伏せた状態で出土している。

SD17960　朝堂院内にあって、SD17961からT字に分岐し、西へ排水するための溝。基本的にはSD17965の詰石暗渠をSD17961より西側で踏襲しているが、軸線はややずれている。木樋暗渠であり、地山を掘込むが、整地層で覆われているため、本来は上から検出できない。木樋は外形も樋断面も箱形に加工し、他の木樋とは異なった形態を持つが、残りは悪い。現状で４本を継いでいる。東から現存の長さ5.0m、4.9m、5.0mであり、西端のも

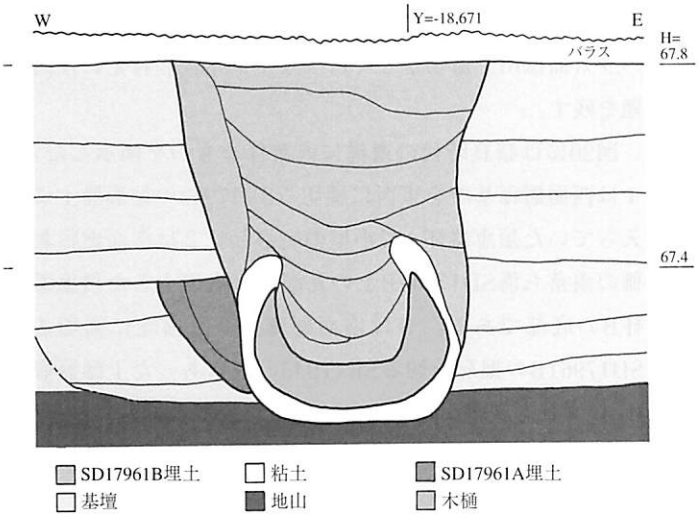


図21　SD17961A・B　断面図　1：15

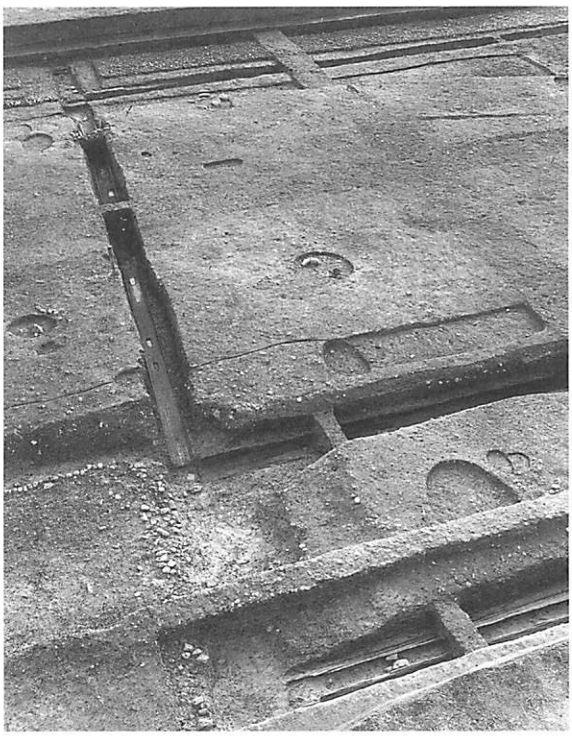


図22　SD17961B・SD17962（北東から）

のは調査区外へ延びているため計測できない。幅はそれぞれ現存30～35cm。樹種はヒノキ。朝堂院の西辺を画する塀の外側まで暗渠は続いているのだろう。

e期の遺構

SX17943　この地区の施設を全て撤去した後に敷き詰めた礫敷。瓦器など中世遺物を含まないので、中世までは下らないであろう。前述のSX17942B上に堆積した瓦溜の層との関係を見ると、瓦溜の上層がSX17943に覆われる際に意図的に細かく打ち砕いて平らに均していたあとが読み取れる。瓦溜とSX17943の間には、別の層をほとんどはさんでいない。また、SX17943の礫層の中から出土した軒瓦をみると、平城宮出土軒丸瓦編年Ⅰ～Ⅱ期のものに限られ、それより新しいものを含んでいない。これらのことから、SX17943はd期の築地回廊解体とそう隔たらない時期のものであることが推定できる。

f期の遺構

SX17944　調査区南辺部及び西辺部で、SX17943を切って一段下がった部分に敷き詰めた礫敷。これにはSX17943に比べて大量の平城宮瓦が混ぜられており、石の大きさもやや大きい。全体に粗い仕事になっているように観察できる。上面で瓦器を見出しており、中世以降のものと思われる。なお、この調査区西端にある井戸は近現代のものである。

遺構小結

以上、今回の調査区の中での重複関係の知見に基づいて、築地回廊など第一次大極殿院西南隅の区画施設が存続していた時期の遺構をa～dの４期に、これが解体された後の遺構をe・fの２期に分けて述べた。

a期が築地回廊が造られた時期、b期が朝堂院を画する掘立柱塀がつくられる時期、c期が西面築地回廊が撤去され、掘立柱塀に建て替えられる時期、d期が西面掘立柱塀を撤去し、築地回廊基壇雨落溝や基壇を貫く暗渠を作り直す時期とすることができる。これを過去の第一次大極殿院の調査から導かれた『平城報告XI』の時期区分と対応させてみるならば、a期がⅠ-期、b期がⅠ-2期、c期がⅠ-3期、d期がⅠ-4期に相当すると考えられる。但し、大極殿院東半の調査の知見では、Ⅰ-4期に西面掘立柱塀SA13404に対応する東面掘立柱塀SA3777を撤去した後に東面築地回廊SC5500が再建されたことが判明しているが、今回の調査区ではd期における西面築地回廊の痕跡は確認できなかった。また、Ⅱ期については、朝堂院北辺掘立柱塀の、SA17951に対応するSA5551Aが抜き取られた後、築地塀SA5551Bに建て替えられたことが判明しているが、今回の調査区ではSA17951の抜取り穴を検出したのみで、築地の痕跡は削平されており、確認できなかった。

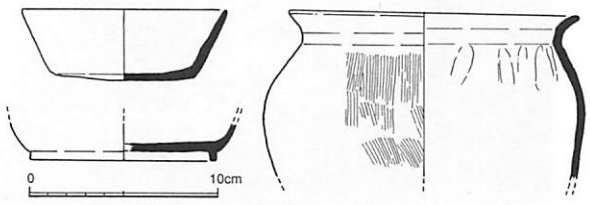


図23　第296次調査　出土土器　1：4

なお、今回の調査のe・f期については礫敷にともなう遺物は少なく、その性格も不明であり、暦年代を明らかにする手がかりも得られなかった。このため、『平城報告XI』で述べられたII期以降の遺構との対応関係も明らかでなく、こうした点の解明は他日を期したい。

次に、遺構の平面的位置関係について今回の調査と第41次調査の築地回廊東南隅の調査とを比較したい。東面回廊SC5500と、西面回廊SC13400は、大極殿院南門SB7801の心を軸にほぼ正確に東西対称の位置関係にあることがわかる。また、東南隅におけるI-1期の排水溝SD5556・5565はそれぞれ今回の調査におけるSD17961A・17965に対応し、I-4期において多数つくられる排水溝についても、東南隅のSD5563・5562・5561・5560はそれぞれSD17963B・17962・17961B・17960に対応する。但し、SD17961Bが南へ延びるのに対し、SD5561は東折してSD5560になるなどの違いはある。以上のことから考えて、第一次大極殿院南面においては、築地回廊のみならず、排水施設についても東西対称を強く意識して造営されていたことが確認できる。　（古尾谷知浩）

出土遺物

木製品・石製品

木製品は、遺構の項で述べた暗渠の木樋のほか、SD17963Bの調査区西端開渠部分の堆積層から、造営の際に木材を加工する時にできたと思われる木片が多数出土した。石製品は、礫敷SX17944の上面から弥生時代サヌカイト製の石鏃が1点出土した。

土器

発掘区全体で出土した土器の総量は遺物整理用コンテナ2箱に満たない。それには埴輪、土師器、須恵器、青磁、瓦器、中近世以降の陶磁器などがある。上下2段のバラス面より上位の土や井戸の掘形からは近現代の遺物が出土しているが、下のバラス面では13、14世紀頃の瓦器皿、土師器羽釜片が出土しており、バラスによる整地の下限がその頃であることを示している。ただし、上段のバラス面は出土遺物がとくに少なく、年代の特定には問題を残す。

図20には奈良時代の遺構に直接伴うものを図示した。1は西面廻廊基壇を東西に横切るSD17962の掘形埋土に入っていた須恵器杯Aで小型の完形品。2は南面廻廊北側の雨落ち溝SD17941B上の瓦溜りから出土した須恵器杯Bの底部である。3は南面廻廊基壇を南北に横切るSD17961Bの掘形を切るSK17945の底にあった土師器壺B。いずれも厳密な時期比定は難しい遺物であるが、回廊の年代に齟齬するものではない。　（高橋克壽）

瓦塼類

今回の調査で出土した瓦塼類は別表の如くである。量的には大極殿院広場SX17942Bの上に投棄された瓦溜のものが多い。軒瓦にして20点を数えるが、特に平城宮出土軒瓦編年I-1期の軒丸瓦6284A・Cが5点、軒平瓦6664Cが7点と目立つ。これらは第一次大極殿院地区創建に際して用いられていたものが、築地回廊解体に際して投棄されたのであろう。

また、SD17961Bの木樋暗渠部分南端付近の埋土から同じく平城宮出土軒瓦編年I-1期の軒瓦が5点まとまって出土した（軒丸瓦6284Aが2点、6284Fが1点、軒平瓦6664Cが2点）。これらも第一次大極殿院地区創建に際して用いられていたものが、木樋暗渠の改修時に埋土と一緒に投棄されたものであろう。　（古尾谷）

表3　第296次調査出土瓦塼類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6133	A	2	6664	C	12
	B	1	6665	A	1
6225	L	1	6685	B	1
6284	A	7	型式不明		8
	C	4			
	F	1			
	?	1			
6304	C	1			
6311	Aa	1			
型式不明		14			
軒丸瓦計		33	軒平瓦計		22

	丸瓦	平瓦	塼	凝灰岩	道具瓦他	
重量	243.7kg	746.1kg	17.5kg	0.1kg	面戸瓦	65
点数	2,724	8,108	10	1	熨斗瓦	17
					道具瓦	11

4．結び

第295次調査で得た知見としては、(1) 大極殿の北面西階段・西面階段を含めた基壇西北部を検出し、基壇の規模を確定したこと、(2) 西面築地回廊を推定心より西に約60cmずれて検出し、あわせて東雨落溝、および創建当初のバラス敷きも検出したこと、(3) E・F期の西脇殿の様相が把握できたことの3点が挙げられる。

(1)は二重基壇で南面中央階段を3基から幅38尺の中央階段1基とするなど、階段部分を含めた基壇形状の復原に少なからず影響を及ぼした。(2)に関して、第192・296次調査では東面築地回廊からの推定位置どおりに検出したのに対し、北の第217次調査では多少西に振れる。したがって、さらに北の第295次調査で大きく西に振れたと考えられなくもない。しかし一方で、第295次西区南半で検出した幅の広いA～D期の東雨落溝を第217次調査区では検出していない。以上のことから、この溝が第295次調査区と第217次調査区の間で築地回廊を横断し、その南北と築地心がずれる可能性が出てきた。これらの問題解明は今後の調査結果を待ちたい。

また、大極殿から回廊・磚積擁壁までの敷地造成に関して、E・F期にはSB17870とSB17874の間に段差があることが推測できたが、これが大極殿創建当初までさかのぼって存在したかは現時点ではわからない。この問題も、敷地全体を復原する上で、今後の調査を踏まえてさらに検討を加えねばならないであろう。

一方、第296次調査で得た知見は、(1)築地回廊西南隅の基壇や一部の礎石の位置を明らかにしたこと、(2)大極殿院内の水を排出するための暗渠などの施設を明らかにしたこと、(3) 大極殿広場の小礫敷を良好な状態で検出したことなどである。(1)(2)では大極殿院南面の東西対称性や、従来の時期区分の妥当性を再確認することができたが、築地回廊の復原に対して他の調査区との結果を踏まえたさらなる検討の必要性も指摘した。また、(1)(3)についても、将来の大極殿院全体の敷地造成や復原を考える上で、地盤高を含めた重要な情報を提供した。

以上のように、今回の調査で、第一次大極殿はもちろん、第一次大極殿院地区における奈良時代、平安時代初期の遺構や敷地造成を把握する上で、重要な資料と問題を提示できたと考える。 (蓮沼・古尾谷)

平　城　専（こらむ）欄　①

◆ことしの現場班

3人が転出、新たに4人がメンバーとなりました。班の顔ぶれも変わり、刺激の強い？現場が多かったようです。
春は、早速新人が研修に登場。真の新人I氏は黙々と、新人というにはためらいもある（失礼）T氏は持ち前のバイタリティを発揮、他調査員を圧倒してバリバリと調査を切り盛りしました（本人は大分遠慮したそうですが…）。
夏はH氏が研究所初の女性総担当者で登場。現場や遺物整理の作業員のみなさんに心配されつつも、研修から連続参加のI氏を堂々従え、長い調査を乗り切りました。
秋は食欲の秋にふさわしく、現場近くの食堂で、一食千円以内でいかに質・量共に優れた好きな料理？を食べるかが競われ、一部調査員の間で話題となりました。このコスト感覚が今後研究や生活にいかされるのでしょうか？？
冬は中規模現場の連続。調査員が分散し、休憩時間恒例トランプもあまりできなかったようです。整理棟の横なので時々自主参加していた人間もみましたが…（私です）。
景気よく出た昨年に比べ、木簡の出土が皆無で、少し寂しい一年でした。ここでも不況ですか？ (K)

考古第1	井上　和人	
考古第2	金田　明大	
考古第3	清野　孝之	石橋　茂登
遺　構	浅川　滋男	川越　俊一
計測修景	平澤　毅	岩永　省三
史　料	渡邊　晃宏	蓮沼麻衣子
		内田　和伸
		舘野　和己
	次山　淳	
	高橋　克壽	
	山崎　信二	加藤　真二
	西山　和宏	玉田　芳英
	高妻　洋成	千田　剛道
	古尾谷知浩	箱崎　和久
		高瀬　要一
		山下信一郎

色付きは総担当者

◆馬寮東方地区の調査 ―第298次

1．はじめに

平城宮の第一次大極殿の西、馬寮との間には周囲を築地塀で囲われた大規模な区画があり、馬寮東方地区と仮称している。平城宮跡発掘調査部では、この馬寮東方地区について継続的な発掘調査を行なってきた。最初の第37次調査（1967年）では、南辺の掘立柱塀と東西に庇が付く南北棟礎石建物SB5300の南半部を検出した。第52次調査（1968年）と第63次調査（1970年）では、西辺と北辺の築地塀を確認した。次いで第194次調査（1988年）ではSB5300全体を調査し、柱間寸法が約4.2m（14尺）で桁行が21間、全長が90m近くにもおよぶ長大な南北棟礎石建物であることが判明した。第191-13次調査（1989年）では区画の西辺部に礎石建物の一部である南北方向の布掘りと14尺間隔に並ぶ礎石根石２ヶ所を検出した。第239次調査（1993年）では中央部に正殿と思われる東西棟礎石建物SB15750を発見した。SB15750は南の庇を確認したが、北にも庇が付くものと考えられる。この調査では三彩小塔の一部となる黄釉六角形屋蓋が出土した。これは正倉院伝存のものと同じで、平城宮で出土したのはこの1点のみであり、馬寮東方地区の特殊な性格をうかがわせる。第244次調査（1993年）では、正殿の北に南北に庇を持つ東西棟礎石建物SB16320の一部を検出し、これは後殿と考えられる。この結果、この地域は正殿を中心として、北に後殿、東西に脇殿を配するという施設であることが判明した。これら４棟の礎石建物は、すべて柱筋に「布掘り」の基礎地業をした後に礎石を据えて建物を建てる工法と、柱間寸法が桁行方向は14尺、梁間方向は10尺である点で共通している。建物配置とも合わせて、ここが特殊な性格を持つ一画であると推定でき、『続日本紀』に記載のある「西池宮」の可能性が指摘されていた。

今回の調査地は、西脇殿東半の南半部がかかる地域にあたる。西脇殿は第191-13次調査でその一部を検出しているとはいえ、第37次調査区では明確な形では確認していない。しかし、第37次調査区では南北方向のバラス列SX5333をSB5300と南端を揃える形で検出しており、これが西脇殿関連の遺構であると考えられた。今回の調査は西脇殿の規模を推定するとともに、正殿の東西規模を確定することと、周辺の状況を明らかにすることを目的として行なった。当初の面積は約880m²で、37次調査区に220m²の拡張区を設け、合計1100m²となった。調査期間は1999年1月7日～3月22日である。

2．検出した遺構

西脇殿SB18000　調査区西半で、南北方向の布掘りを３条検出した。東の２条は幅約2.5mで、中軸線間の距離は約３m（10尺）ある。布掘りの内側には、拳大のバラスを一面に敷きつめている。その西側、調査区の西端には、約６m（20尺）の間隔を置いて布掘りとバラスを部分的に検出した。この３条の布掘りは第191-13次調査で検出した布掘りと一連のものであることはほぼ確実であり、前者は東の側柱、入側柱と西入側柱で、後者は西側柱にあたる。これによって、西脇殿は東脇殿SB5300と同じく、東西に庇を持ち、柱間寸法は桁行方向が14尺、梁間方向は10尺の礎石建物であることが判明した。西接する第52次調査区では、西雨落溝と考えられる南北溝を検出している。なお、西脇殿には第193-13次調査で既にSB13520と遺構番号を付しているが、今回新たにSB18000と番号を付け直した。

SB18000は南北端ともに調査区外に延びており、建物の規模を推定するため、南接する第37次調査区を再発掘した。その結果、SX5333は西脇殿の東側柱と入側柱のバラス列および布掘りであることを確認するとともに、南妻の布掘りも検出した。すなわち、SB5300とSB18000は南妻を揃えることが判明したのである。北はまだ調査していないので不明であるが、西脇殿SB18000は東脇殿

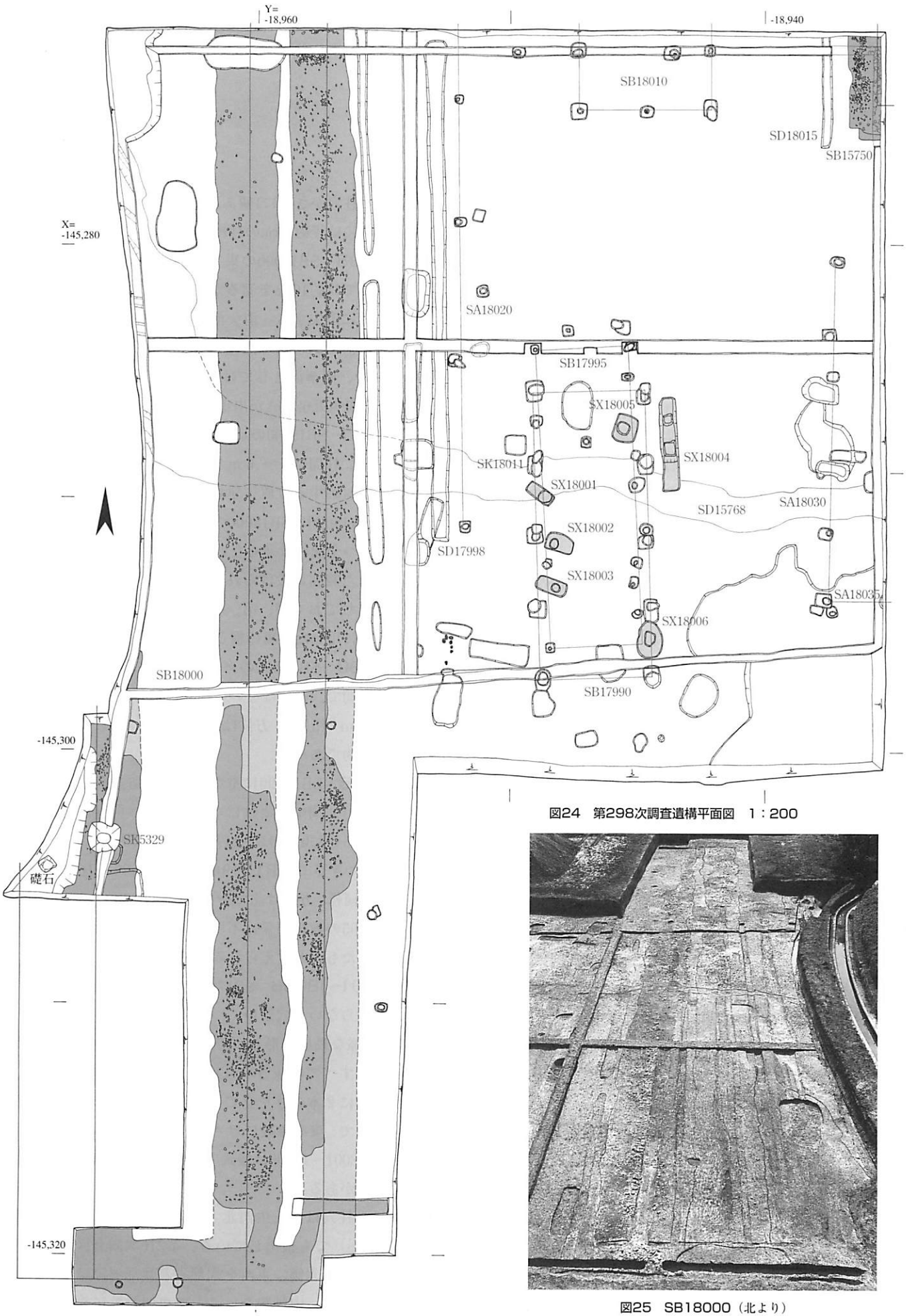


図24　第298次調査遺構平面図　1：200

図25　SB18000（北より）

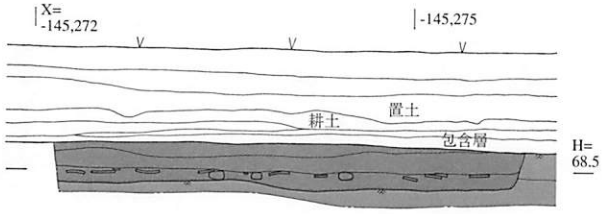


図26　SB15750布掘り土層図　1：60

SB5300と正殿SB15750をはさんで対称の配置にあることから、東脇殿と同じく桁行21間の長大な南北棟建物である可能性が高い。第63次調査区では、北と西の雨落溝と推定される溝を検出しており、この想定を裏づける。

今回の調査区は全体的に削平が著しく、布掘りは深さ約5cmほどしか残っていない。検出したバラスは底に敷きつめていたものがかろうじて残っている状況で、礎石の位置を示す根石は失われている（図27）。布掘りの埋土からは平城宮土器Ⅱ～Ⅲ古段階の須恵器杯B蓋が出土した。SB18000の布掘りの幅は約2.5mあり、SB5300が約1.5mであるのに対してかなり広く、かつSB5300では底にバラスを敷いていないなど、地業の施工法に違いがあるが、これは工法差として理解できる。

なお、西入側柱の布掘りの西には径約1mの石が水路に落とし込まれた状況であり、これは礎石であろう。石のすぐ北東には土坑SK5329があり、これは西入側柱の布掘り内で、南から4間目の柱位置にあたる。SK5369は本来この位置にあった礎石を抜き取った穴であると考えられる。建物の時期は、出土した瓦と土器などから、奈良時代前半に建てられ、その後奈良時代を通じて存続していたと考えられる。

正殿SB15750　調査区東北隅で、南北方向の布掘りを検出した。これは第239次調査で検出したSB15750西妻の布掘りの西南角にあたり、東西5間の規模であることが確定した。削平が著しく、検出面には径約3cmのバラスや瓦が敷きつめてあるが、礎石根石は残っていない。布掘りは深さ約20cm残っており、版築層は3層確認できた（図26）。底に1層版築土を積んだ上に完形に近い平瓦を一面に敷いており、これは根固めであろう。布掘り内からは平城宮土器Ⅱの須恵器杯B蓋が出土した。西約2mには西雨落溝SD18015があるが、南雨落溝は削平のため失われている。

SB18010　SB15750の西にある南北棟掘立柱建物。今回はその南端1間分を検出した。南妻がSB15750の南側柱列に揃い、約6m（20尺）の距離にあることから、密接な関係があると思われる。柱間は桁行が2.4m（8尺）、梁間が2.55m（8.5尺）。桁行が仮に5間であるとすると、桁行総長は40尺となり、これはSB15750が南北に庇が付くとした場合の梁間総長に一致する。西側柱の西8尺には柱筋を揃える柱穴がさらに1個あり、西に庇が付く可能性もある。妻柱には径約10cmの柱根が残る。

SD17998　SB18000の東方にある南北溝。幅約60cm、深さは北では約10cmを測るが、南は浅くなり、途中で削平のために消失する。消失部には石の抜取状の小穴が並び、石組溝であった可能性もある。SB18000との距離は約4.5mで、雨落溝としては離れすぎており、排水路か。埋土から軒丸瓦6225Aが出土した。

SA18020　SB18000の東方にある掘立柱南北塀。3間分検出した。柱間は5～6mと、一定しない。第194次調査区でも、対応する位置に建物の東妻とみている柱穴列がある。SA18020はSB18000の足場穴としては離れすぎており、かつ全面には通らない。第194次調査区では正殿を中心とした範囲に設けられているので、目隠し塀的な機能を想定しておくが、第一次朝堂院地区で検出した様な騎射行事に用いた馬場の柵という可能性もある。

SB17990　SB18000の東方にある南北棟掘立柱建物。桁行は4間で、妻柱はない。柱間は桁行が2.85m（9.5尺）、梁間が4.5m（15尺）。方位は北でやや西にふれており、仮設的な建物であろう。

SB17995　SB17990に重なる位置にある南北棟掘立柱建物。桁行4間で、妻柱はない。柱間は桁行方向は一定せずに2.85～3.3m（9.5～11尺）、梁間が3.9m（13尺）で、柱穴の大きさはSB17990に比べて小ぶりである。SB17990同様、方位は北でやや西にふれている。SB17990とSB17995の前後関係は不明であるが、仮設的な建物を建て替えたものと考えられる。

SX18001～18006　SB17990・17995の周辺には、建物にまとまらない柱穴がいくつかある。形態は、SX18001～18004の様な長楕円形と、SX18005・18006の不整円形があるが、すべて柱抜き取り痕を持つ。SX18004は細長い掘形の中に2本の柱を立てた痕跡が残る。この場所は正殿の前面で、東西脇殿にはさまれた広場にあたることから、SX18001～18006は儀式の際に立てた旗竿の柱穴である可能性がある。

同様の柱穴は、壬生門北方の第216次調査（『1990年度平城概報』）でも検出している。第216次調査区は壬生門を入ったすぐ北側、東西を式部省と兵部省にはさまれた広場にあたり、中軸線をはさんで東西対称に旗竿の柱穴

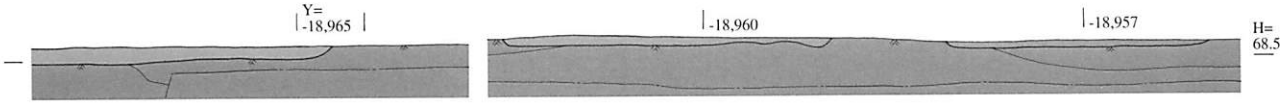


図27　SB18000布掘り土層図（X=-145.318付近、南から）　1：60

が並ぶ。SX18001～18006に関しては、中軸線で折り返した東側の位置は第194次調査区と第239次調査区の間の未発掘地にあたり、東側にも同様に柱穴が並ぶかは不明である。ただし、SX18006については第37次調査区で対応する穴を検出している。

SA18030・18035　調査区東辺にあるL字形の塀。南北塀SA18030は柱穴を検出していない部分もあるが、柱間は2.7m（9尺）に割り付けられ、5間になると思われる。南端で東西塀SA18035に連なる。SA18030は第239次調査で検出した南北塀SA15769と正殿をはさんで対称の位置にある。

その他、SD17998の西には数基の土坑が南北に並ぶ。いずれも埋土の下層には有機物を含んだ暗茶褐色の土層が堆積し、塵芥処理用の土坑と考えられる。

SD15768　調査区を東西に横切る古墳時代の流路。西半は整地土と布掘りの下にあり、全体は検出していない。調査区東辺部では1条であるが、西壁付近では数条の流れが認められ、流路を何度も変えていたようだ。西壁で、古墳時代の小型丸底壺が出土した。

3．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は極めて少ない。これは、遺構面が大きく削平されていることによるものであろう。瓦は表4に集計を載せておいたが、軒丸瓦が29点、軒平瓦が9点あり、Ⅱ～Ⅲ期のものが中心である。土器は、SB18000の布掘りとその周辺の整地土から平城宮土器Ⅱ～Ⅲ古段階のものが出土し、この地域の建物の造営年代を知る上で注目される。他には、SB18000東方の広場にある土坑SK18011から神功開宝が1点出土した。

なお、第37次調査区で検出した土坑SK5283からは550個体以上の土器が出土した。これらの土器はほとんど全てが須恵器であり、その中でも杯B蓋が主体を占める。この様な構成の土器群は平城宮・京内では例をみないものであり、後に別項を設けてここで合わせて報告する。

4．調査の成果とまとめ

第37次調査区検出遺構の再検討　今回の調査により、これまで詳細が不明であった馬寮東方地区の西脇殿が確かに存在し、しかも東脇殿SB5300と同規模の、東西庇付で桁行が21間という長大な南北棟礎石建物である可能性が非常に高くなった。第37次調査の成果は既に概報で簡単な分析がなされている（『平城宮第35～37・40・41次調査概報』）が、検出した遺構を再検討してみると、SB18000の他にもこの地区に関連する施設が新たにいくつか指摘できる（図28）。これらについては、今回新たに遺構番号を付し、ここで報告することとする。

表4　第298次調査出土瓦塼類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6225	A	1	6664	C	1
	?	1		?	1
6285	A	1	6671	C	1
6291	A	3	6681	B	1
6301	C	5		?	1
型式不明		18	型式不明		4
軒丸瓦計		29	軒平瓦計		9

	丸瓦	平瓦	塼	凝灰岩	道具瓦他	
重量	166.9kg	521.1kg	0.5kg	0.1kg	面戸瓦	3
点数	1,907	6,429	2	1		

まず、南限の施設に関しては、南辺の基幹排水路SD5280のすぐ南にSA5270があり、そのさらに南方にはSA5260と計2条の掘立柱塀がある。SA5270については柱穴も小さく、仮設的な塀と考えられ、SA5260がある時期の南限の区画施設であろう。SA5260は一部未発掘区にかかるため、全体を調査したわけではないが、当然検出できる位置に柱穴を見つけていない部分がある。ここは、ちょうど正殿SB15750の南面にあたることから、この場所に既に削平されていて遺構としては検出できなかったものの、礎石建ちの門があったと考えられる。門の規模は、柱穴のない範囲から東西5間と推定される。柱間は、後述する南面築地SA5265心上に東西に約3m間隔で並ぶ小穴列があり、これを足場穴とするならば、桁行方向は10尺にとれる。梁間方向については不明。

また、SA5260の北約2.5mには柱間が約2.7m（9尺）の掘立柱塀SA5340がある。この塀は柱穴の大きさが約0.3mほどしかなく、調査区西半分では南方約1.5mに柱筋を揃えた柱穴列がさらにあることから、築地の寄柱か添柱である可能性が高い。即ち、この一画は南面の閉塞施設も築地なのであり、SS5321（SA5340を改称）[注]を北、SS5321を南添柱（寄柱）とする基底幅6尺程度の築地SA5265を新たに想定する。掘立柱塀SA5260は築地SA5265に先行する仮設的なものであろう。SA5265は南門部分ではSS5321を検出しておらず、築地にも礎石建ちの南門が開

くと考えられる。しかし、掘立柱塀から築地への改修時に南門はそのまま存続したのか、位置をずらして建て替えたのかを判断する材料は全くない。

SB5300の西には、東西棟掘立柱建物SB5310の東半分に重なる位置に、3条の東西溝と2条の南北溝が連なるSD5293と1条の南北溝SD5277がある。これらの溝を合わせると、方形の区画で南に張り出しがある形となる。これは、SD5277・5293を地覆石抜き取り溝とする、南面に階段がある礎石建ち基壇建物であると考えられ、新たにSB5305とする。SB5305の基壇西辺は正殿SB15750の東妻と筋を揃え、両者の距離は約30m（100尺）となる。基壇の南辺、北辺は、それぞれSB5300の南から2間目、4間目の柱筋にほぼ揃える。東辺は後殿SB16320が東西11間とすれば、その東妻に揃う。こうした計画的な配置が想定できることからも、ここに基壇建物があった可能性は高い。なお、SB5305と中軸線をはさんで西の対称の位置には浅い落ち込みSX5308があり、これは基壇の掘込地業で、ここにも同規模の建物が存在していたと推定される。この様な東西に並立する小規模な基壇建物は、第二次朝堂院南門の南方の広場でも検出している（『1995平城概報』）。ここの広場でも儀式用の旗竿を立てたとみられる柱穴列を検出しており、馬寮東方地区との類似性がうかがわれ、興味深い。

西脇殿SB18000の南には、西を揃える形でSD5280に架かる橋SX5330がある。東脇殿SB5300の南にも2個の東西方向の柱穴列SX5254があり、全体は検出していないものの、ここにもSD5280に架かる橋があったと思われる。

多量の土器を出土した土坑SK5283は橋脚の抜取穴であろう。

遺構の変遷　これまで分析してきた様に、馬寮東方地区には4棟の大きな礎石建物が建ち並ぶことが明らかとなった。東脇殿SB5300については、基壇北部を横切る東西溝との関係から3期にわたる変遷が想定されているが、正殿SB15750、後殿SB16320、西脇殿SB18000については未調査部分が多いために不明である。南面の区画施設は、まずSA5270で閉塞した後にSA5260を作り、次いで築地塀SA5265に改作した。西、北面築地については、先行する掘立柱塀の有無や構築時期に関する判断材料に乏しい。

礎石建物の建設は、整地土や布掘りから出土した土器および瓦の年代から、奈良時代当初まで遡るものではなく、ある程度時期をおいてから建てたものと考えられる。布掘り埋土の出土土器から、正殿の建設は西脇殿に先行する可能性があるが、天平年間前半代には既にこの地域は整備された状況になっていたものであろう。これらの礎石建物の廃絶時期は不明であるが、建物と重なる遺構を検出していないことから、奈良時代を通じて建っていたものと考えられる。SB5305に関しては掘立柱建物SB5310と重複しており、前後関係は不明であるが、存続時期はやや短かったのであろう。

なお、SB18000の北端部が想定される位置には第63次調査でSB6487・6500の2棟の南北棟掘立柱建物を検出しており、SB6500は奈良時代中頃、SB6487は奈良時代末の時期とされている（『学報XII』）。しかし、両建物ともに北面築地SA6510の南雨落溝SD6507、西面築地SA6150の東雨落溝SD6151と一部が重なり、溝よりも古い。SD6151からは平城宮土器Ⅱ～Ⅲのものが出土しており、SB18000を建設する以前のものであると推定できる。

全体の配置計画と性格　馬寮東方地区の区画全体の大きさは、南北が北面築地SA6510と南面の掘立柱塀SA5260間で約119m（400尺）となり、南面築地SA5265との間ではやや短くなる。東西規模は東面築地をまだ検出していないので不確定であるが、中軸線で折り返すと約113m（380尺）の距離をとることができる。礎石建物の配置は、中央に桁行5間で南北に庇が付くと推定される正殿SB15750があり、その東西に桁行21間で東西庇付きの脇殿SB5300・18000が対称に並ぶ。正殿の北には、南北庇付きの東西棟で、SB5305との関係から桁行が11間の可能性が高い後殿SB16320があり、後殿の北側柱と東西脇殿の北妻は柱筋を揃える。各建物間の距離は、正殿心と後殿心間が100尺で、正殿と東西脇殿間は心々間でそれぞれ130尺という完数値をとる。また、先述した様にSB5305も各辺が正殿、後殿、東脇殿と揃う関係にあり、全体として非常に計画的な配置をとる（図29）。

これまでの平城宮の調査で、建物配置がある程度明らかになった官衙の配置をみると、兵部省、式部省、塼積基壇官衙（太政官か）の左右対称かそれに近い配置のパターンと、宮内省、馬寮、大膳職、内膳司、造酒司などの左右非対称配置のパターンに大きく分けることができる。非対称配置の官衙は、造酒司の調査で既に指摘されている様に、実務的な性格が強い。建物配置は左右対称

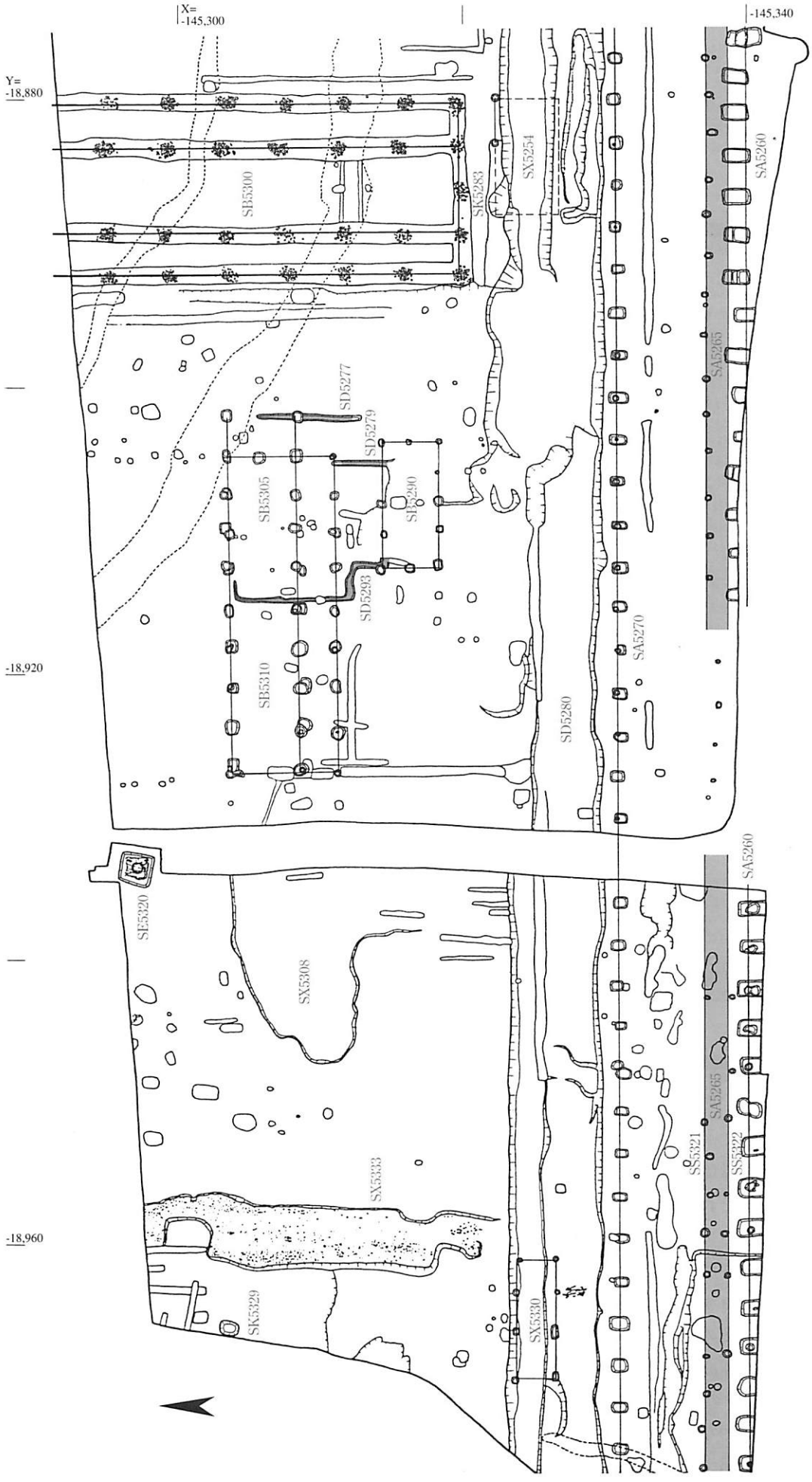


図28　第37次調査　主要遺構平面図　1：300

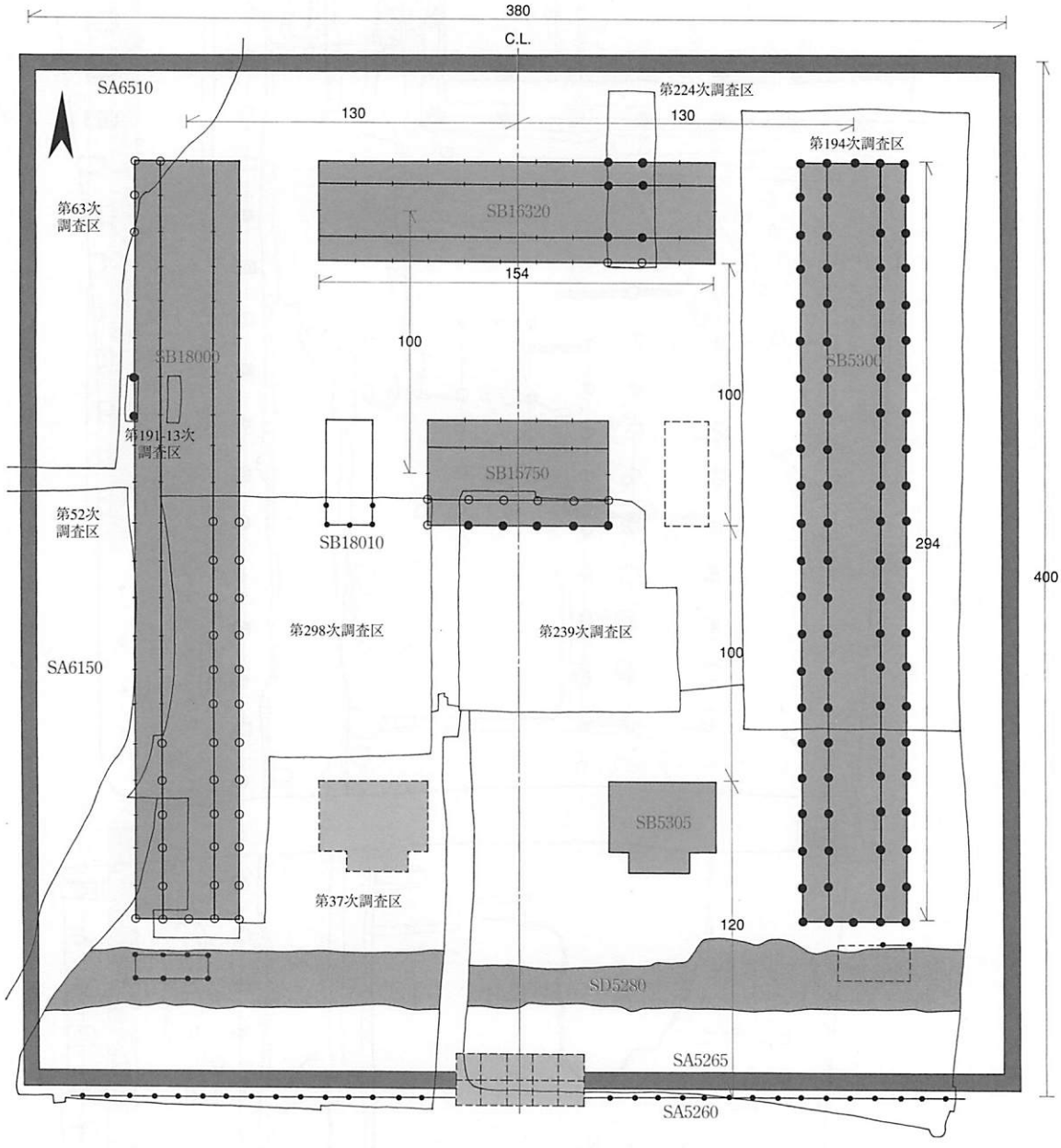


図29　馬寮東方東区の建物配置（単位：尺）　1：800

にこだわらず、日常的な仕事をするのに適した配置にしたものであろう。それに対して、対称配置のものは、大極殿と朝堂院がまさにその配置をとることや、兵部省を淳仁天皇が一時御在所にしたことなどを考えると、公的な行事を行なったりする、ある程度儀礼的な空間であったと推定される。その中で馬寮東方地区は規模が格段に大きく、内裏、大極殿、朝堂院を除けば、平城宮内の左右対称配置パターンの施設では最大のものである。

この一画の具体的な名称をうかがわせる文字資料はこれまでの調査では出土していない。しかし、その立地と建物配置を考えると、『続日本紀』天平10年７月癸酉条や『万葉集』巻８に出てくる、西池（佐紀池）の近くにあり、宴会を行なった「西池宮」が有力な候補となる。この地域は佐紀池に近いということと、左右対称に建物を配する大規模な施設であることから西池宮の可能性が現状では強いが、その決定は今後の検討課題である。いずれにしても、今回の調査で馬寮東方地区の構造と建物配置が明らかになったことは、平城宮の官衙や宮殿など、さまざまな区画の性格、機能を研究する上で、重要な成果であると言える。

（玉田芳英）

注）概報ではSA5340となっているが、壅積官衙南門と番号が重複しているため、改称する。

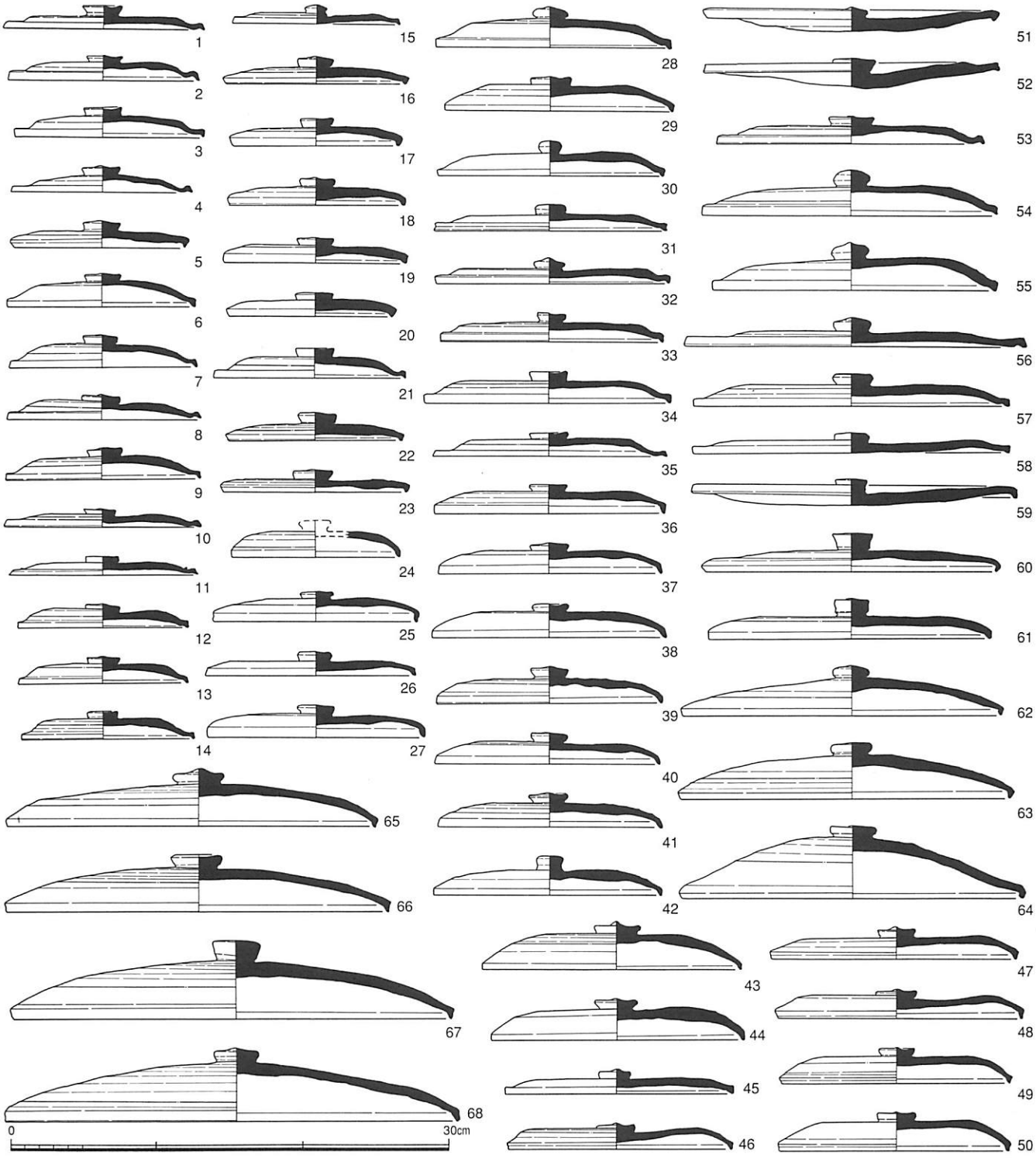


図30　SK5283出土土器（1）　1：4

5．SK5283出土土器

第37次調査区で検出した土坑SK5283は基幹排水路SD5280の北岸に位置し、径約２ｍを測る。出土土器のうち、土師器は杯Aの細片が1点と甕の破片が約20点あるのみで、ほとんど全てが須恵器である。須恵器は544個体以上あり、その構成を表５に示した。杯B蓋が345個体で63.4%を占め、転用硯は１点も見られない。この様な構成の土器群は馬寮東方地区の何らかの性格を反映していると考えられるが、詳細は今後の課題である。ここでは紙数の制限のため、実測図をなるべく多く掲載することを主眼とし、説明は器種ごとに簡単にとどめる。

杯Ｂ蓋（1～64･69～145）　器形、胎土、調整、焼成などの面からいくつかのグループに分けることが可能で、大きくＡ～Ｈ群とそれ以外に区分した。この群は従来の須恵器Ⅰ～Ⅵ群に完全に対応するものではない。

A群　白色粒、黒色粒を含む胎土を持つもの。焼成の具合により、A1群～A4群に細別できる。A1群（１～５）は表面は青灰色、断面はセピア色を呈し、硬く焼きしまる。A2群（６～14･51･52）は淡青灰色を呈し、A1群に比して

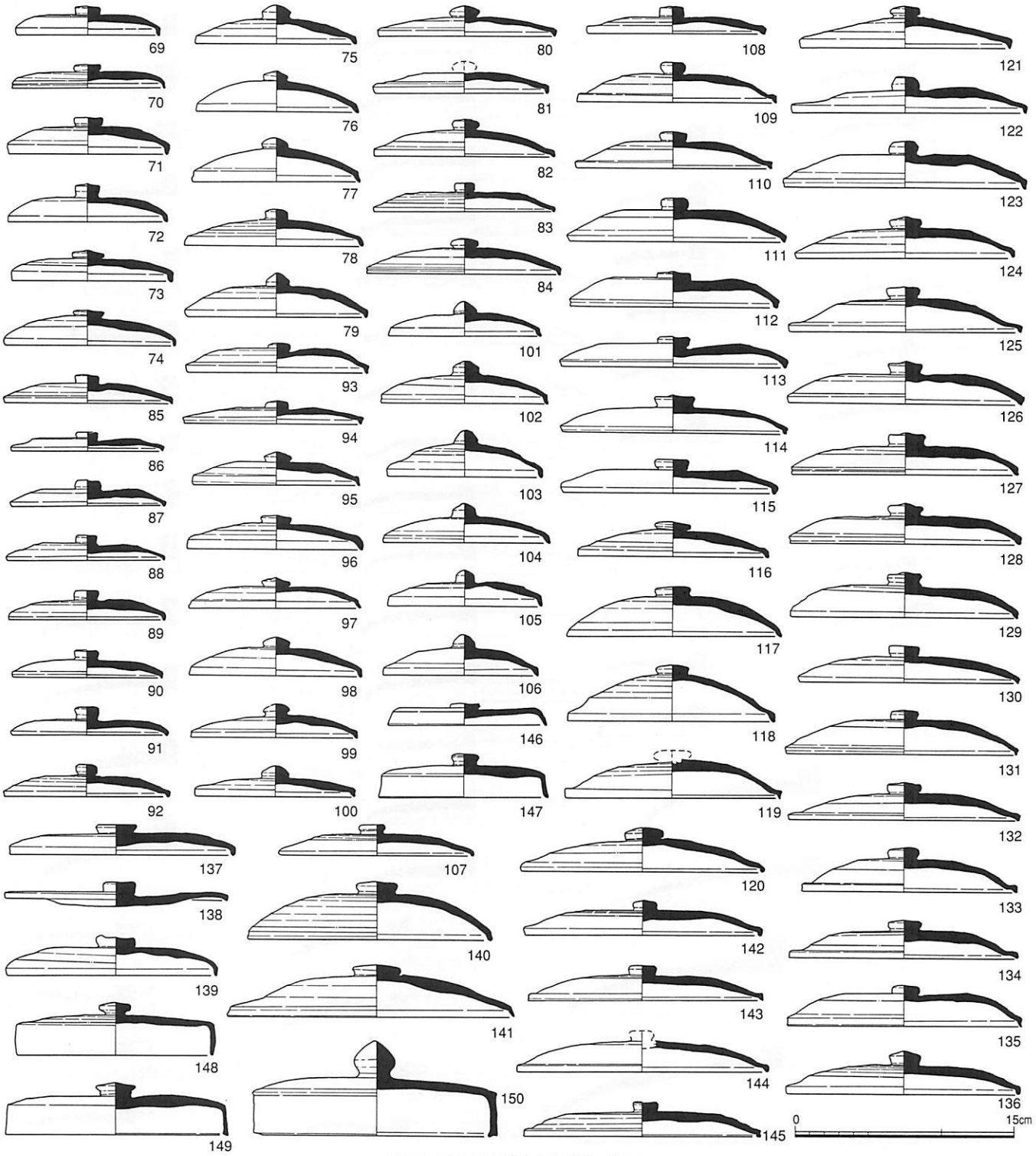


図31　SK5283出土土器（2）　1：4

器壁が薄い。A3群（15·16·28～33·54～57）はやや軟質に焼き上がるもの。A4群（17～2·34·35·53）は焼成が不良で、灰黒色や灰白色を呈する。

B群　青灰色や灰白色の胎土で、多量の黒色粒子と白色粒子を交える。黒色粒子はナデや削りで墨を引いたように流れる。硬質に焼きあがるB1群（22～24·43～45）とやや軟質で白色粘土を含むB2群（46～50·58）に分かれる。

C群　灰色～淡青灰色を呈して極めて硬質に焼きあがり、C1群（25～27·59·60）、C2群（36～42·61）に分かれる。C1群は水簸した様な胎土で、砂粒をほとんど含まず、C2群は石英、長石や黒色粒子を少量含む。

D群　白色～灰色を呈し、多くの石英、長石粒と少量の黒色粒子を含む。D1群～D4群に分かれる。D1群（62～64·119·120）は内面が平滑で、端部を丸くおさめるもの。D2群（80～84·121～125）は内面の仕上げが粗いもの。D3群（126～130）はやや軟質で、黒色粒子が流れる。端部には浅い沈線を入れる。D4群（108～111·131～136）は白色～青灰色を呈し、多くの白色・黒色粒子を含む。

E群（142～145）　暗青灰色を呈し、特に多くの黒色粒子を含む。つまみは小型である。

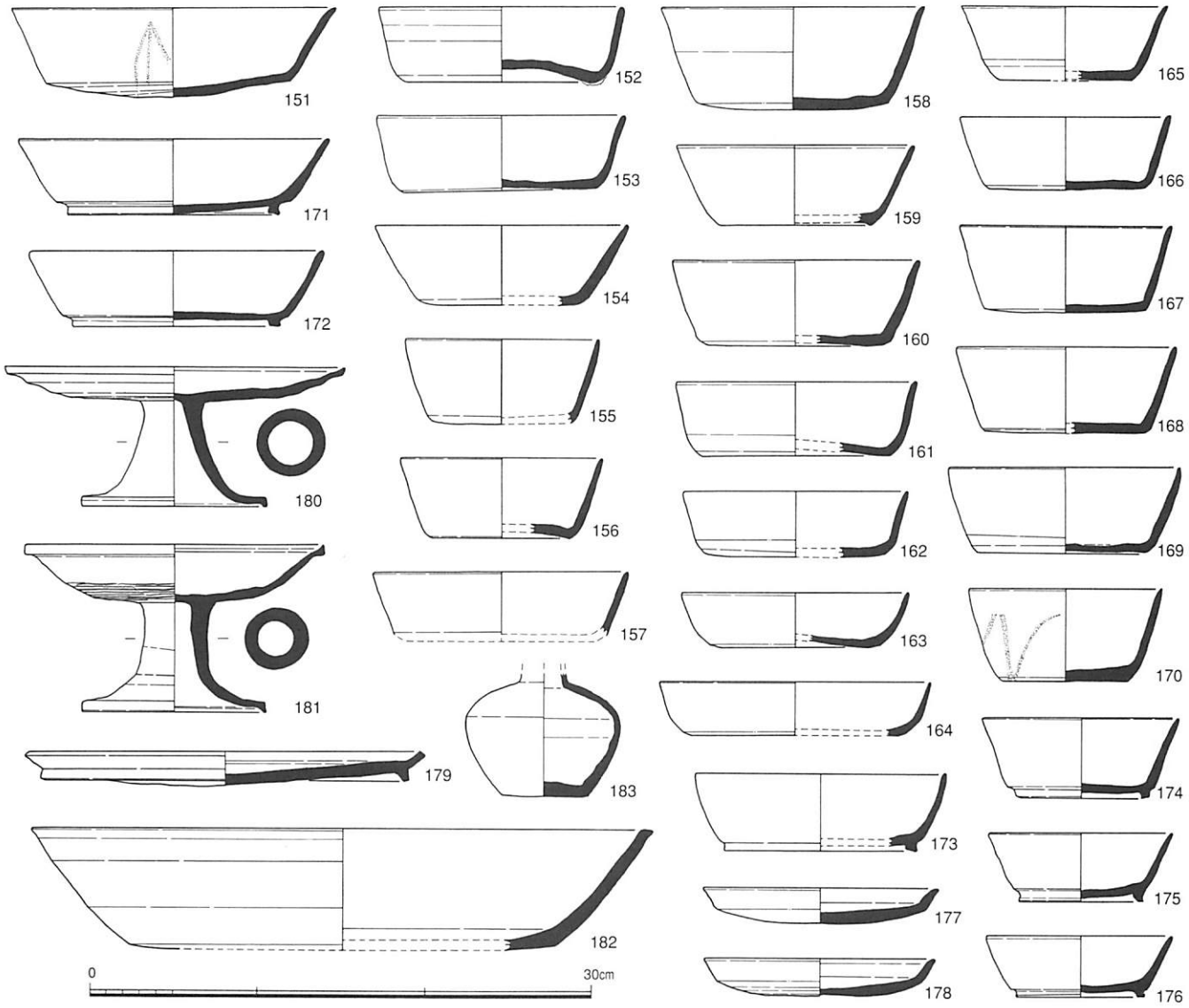


図32　SK5283出土土器（3）　1：4

F群（69～74·112～115）淡灰色～淡黄灰色で、白色・黒色粒子は少なく、内面は平滑である。

G群（75～79·116～118·140·141）灰黒色を呈し軟質で、白色・黒色の微砂粒を多く含む。

H群　硬質に焼きあがり、内面は灰白～青灰色を呈し、外面に降灰が見られる。白色・黒色粒子を含む。つまみは多様な形態を示し、H1群～H4群に分けられる。H1群（85～94·107）は灰白色でつまみは円柱状、H2群（95～100）は青灰色でつまみが算盤玉状になり、黒色粒子は極めて少ない。H3群（101～106）は淡青灰色でつまみは乳頭状のもの。H4群（137～139）はその他を一括した

これらの群別は産地の差を反映したもので、従来の群別との比較ではA群がⅠ群、B群がⅡ群、C群がⅢ群、D1群がⅥ群にほぼ対応する。D2群とD3群の一部（80·81·122～129）は備前産の可能性が強い。A～H群に属さないものも130個体以上あるが、今回は割愛した。

ⅢB蓋（65～68）　65はB1群、66はB2群、67はC1群、68はG群に属する。66は尾張産の可能性がある。

151～170は杯Aで、158～170は底部をロクロ削りする。

170は底部外面に「×」の線刻がある。

171～176は杯B、177·178はⅢA、179はⅢD、180·181は高杯、182は盤A、183は壺M、146～150は壺蓋である。

なお、土器の産地については総社市教委の武田恭彰氏、各務原市教委の渡辺博人氏に教示を得た。

（川越俊一・玉田芳英）

表5　SK5283出土須恵器の構成

器種	個体数	比率(%)	器種	個体数	比率(%)
杯A	120	23.2	盤A	8	1.5
杯B	19	3.5	壺A	1	0.2
杯B蓋	345	63.4	壺A蓋	1	0.2
ⅢA	5	0.9	壺M	1	0.2
ⅢB蓋	19	3.5	壺	5	0.9
ⅢD	2	0.4	平瓶	1	0.2
鉢A	5	0.9	甕	5	0.9
高杯	1	0.2			
			計	544	100.1

◆平城宮北辺地域の調査
——第293-3次・第293-4次

1．平城宮北方遺跡の調査（第293-3次）

はじめに　個人住宅建設に伴う調査。平城宮北面大垣の西北角から東に約80m、北に約45mの位置にあり、地形的には北から南へ向かって低くなる傾斜地にあたる。南北に長い3m×2mの調査区を設定した。

検出遺構　調査区の中央に東西方向の基壇状の高まりSX01を検出した。この遺構の高い部分は地表下20cmにあり、幅1m内外の平坦面で、南側と北側は30cmないし40cm低くなっている。SX260の北端および南端近くはシルト質土の地山であり、その内側の南北幅1.6～1.9mの範囲は表面がとても固く締まっている。断面図にみるように、この部分は掘込地業の積み土である。南側の掘込線は削平されて分明でないが、北側ではおよそ32°の傾斜で掘り込まれていることがわかる。掘込地業内の積み土は40cmの厚さで21～25層あり、土質は粗砂と細かい礫との混じった粘質土を基調としている。

掘込地業SX260は建物ないし築地塀の基壇に伴うものと考えられる。SX260の築成土層の細かさをみると、調査地のすぐ東に15～16世紀に存続した超昇寺城の中枢部が想定されているものの、これに伴うものとは考えがたい。近隣地での既往の発掘調査の成果をみると、いずれも住宅改築等に伴う小規模な調査であるが、今回の調査地の西8mで実施した第282-17次調査では、SX260の南約5.5mにあたる位置で、柱間寸法が10尺（3.0m）の東西方向の掘立柱列が確認されている。また南方約15mの第223-2次調査では幅約1.5mの奈良時代の人工的な東西溝のあったことがわかっている。この東西溝は平城宮の北面大垣の推定位置の北約25mにあり、そこから今次調査のSX260までは約18mの距離がある。

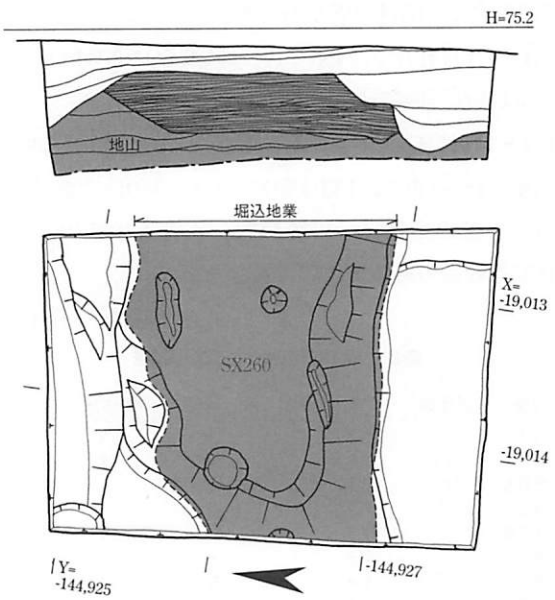


図33　第293-3次調査　遺構平面図・断面図　1：50

まとめ　地形図にみるように、この一帯は急な傾斜地であり、平城宮の時期には雛壇状に造成された比較的小規模な敷地が続いていたとみられる。平城宮の外ではあるが、さらに北にある前方後円墳群（日葉酢媛命陵古墳など）との間に位置するこの地域には、整然とした方位を示す掘立柱建物や基壇を伴う構築物あるいは溝などのあったことがわかり、平城宮の北側の性格を究明する上で興味深い様相を示している。

2．平城宮西北地区の調査（第293-4次）

はじめに　調査地は平城宮の西北角に近い、佐紀池の西40mに位置する。すぐ北側には3mほどの急な段差があり、佐紀神社や釣殿神社のたつ丘陵が迫っている。

検出遺構　調査区の南東部分では現地表面から15cmで黄灰色粘質土の平坦な地山面である。それ以外の部分は濠状の深い落ち込みSD18060となる。調査区の中では、90°に屈曲する濠状遺構SD18060の岸の西北角を確認したにとどまるが、幅は東西2.5m以上、南北5m以上と推定される。底は平坦面をなし、遺構検出面からの深さは90cmをはかる。このSD18060の埋土には粘土や腐植土が目立ち、滞水していた期間が長かったことを示している。

図36　平城宮西北角周辺の地形図　1：2500

18世紀頃の陶磁器や瓦片が出土しているので、埋没の時期はその頃であろう。SD18060からは、破片であるが、鞘状の木製品も出土している。材質はサクラ亜属で、内側を幅3.2cm、厚さ1.8cm以上に刳り抜き、その先端を尖円頭形につくっている。

まとめ　調査地の北方には15世紀中頃から16世紀後半までの記録に現れる超昇寺氏の居城、超昇寺城の故地があり、一辺が30mほどの方形の主郭を中心に空堀、外郭などの城郭構造が比較的明瞭に現地形に遺存している。村田修三氏により復元された縄張案の南端は、今回の調査地の北80mほどにある（村田修三「超昇寺城」『日本城郭体系第10巻』1980）が、その南にも、主郭の立地する佐紀丘陵が続き、前述の約３mの段差に至る。

超昇寺城は数度にわたる破却と修復を繰り返したあと、天正８年（1580）の一国破城の時までその存在がしられる。濠状遺構SD18060が埋没したと考えられる18世紀とは、やや年代差があるが、人為的に埋められた形跡のないことや、周辺の地形から判断すると、SD18060が超昇寺城の南辺に関わる遺構である可能性が高いと考える。

調査地は奈良時代の庭園遺構の確認された佐紀池の西に隣接した場所にあるが、今回の調査地には、平城宮に直接関わる遺構は遺存していなかった。　（井上和人）

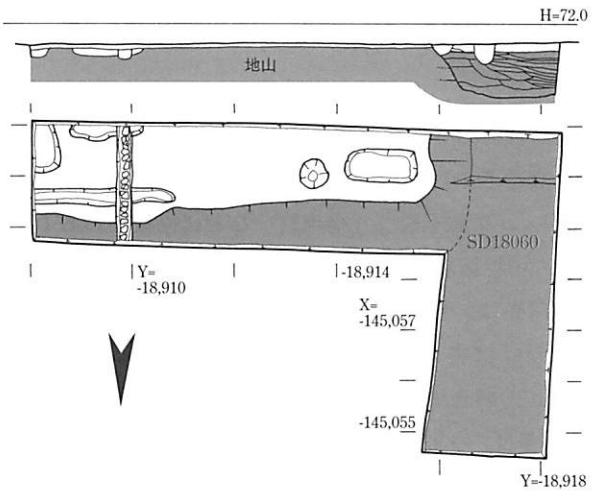


図34　第293-4次調査　遺構平面図・断面図　1：50

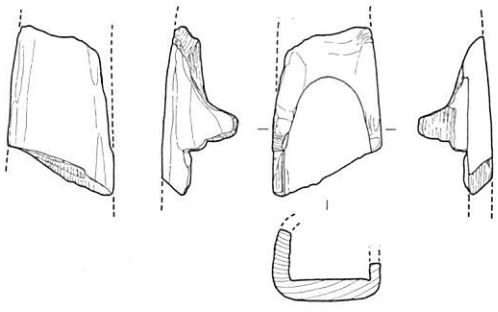


図35　第293-4次調査出土　鞘状木製品実測図　1：3

◆東院地区の調査 ―第292次・第293-10次

1．第292次調査

調査の目的と調査区の概況

平城宮には東に張り出した部分があり、その南半には文献に見える、「東院」、「東宮」、「東内」などと称される施設があったと推定されているため、現在、東院地区とよんでいる。

なかでも「東院」という呼称は奈良時代後半の記録に集中し、皇太子または天皇の居住空間であったほか、宴会、儀式、叙位等にも利用されていた。

神護景雲元（767）年に竣工した「東院玉殿」、宝亀年間（770年代）の記録に見える「楊梅宮」も東院地区にあったものと考えられている。

東院地区は、南辺部、西辺部を中心にこれまで何度か調査されており、南東隅に園池、南・西辺部に多くの区画施設やその内部の密度の高い建物群を検出している。しかし、「東院玉殿」、「楊梅宮」などに直接関わるような東院の中枢施設はまだ見つかっていない。

本調査は、東院地区西辺部の状況把握を目的とし、西辺部のほぼ中央に、南北約51m、東西約35m、面積約1780m²の調査区を設定した。本調査区は第270次調査区（1996年度）の北東にあたり、西端は一部、第128次調査区（1981年度）の南東隅と重複する。調査期間は1998年4月1日から7月3日である。

基本層序

本調査区の基本層序は、上層から順に、耕土、床土、中世の土器片をふくむ黄灰褐粘性砂質土の遺物包含層、橙褐色粘質土の地山となるが、古墳時代以前の遺物を含む暗茶灰色粘質土の整地土層が地山上面に部分的に残存する。この整地土層の上面と地山面が遺構検出面である。地山面はおおむね東から西になだらかに下がっている。しかし、付近の土地は後世の耕作などに伴う削平のため西へ向かって段状に下がっており、遺構検出面のレベルも各段で異なる。このため奈良時代の遺構面は、最上段の東から順に、おおよそ標高65.4、64.9、64.4mと3段の段差がある。

検出した遺構

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物13棟、掘立柱塀10条、溝2条のほか、土坑、石敷遺構等である（図37）。以下、遺構の重複関係、建物配置、建物方位の振れ、周辺既調査区の遺構との関係、出土遺物等をもとに遺構を5時期（A～E期）に分けて説明する。

A期　奈良時代前半

SA17801　調査区東半中央の東西塀。柱間寸法は10尺等間。3間分検出し、さらに調査区東方へ延びる。SB17805（B期）、SA17816（D期）と重複し、これらより古い。柱掘形より軒丸瓦6313Aa型式（平城宮軒瓦編年Ⅱ-1期。以下、時期のみ記す）が出土した。

SA17802　調査区西辺の南北塀。柱間寸法は10尺等間。調査区を南北に貫き、両端はさらに調査区外へ延びる。17間分を検出。北から13間分は第128次調査区と重複し、その調査所見では、本調査区内に延びるSB9586・9589・9597・9609の一部とされている（『年報1981』。以下、第128次調査の所見についての出典は同じ）。しかし、本調査区ではその続きを確認できなかったので、一連の南北塀と判断した。SA17816（D期）と重複し、SA17802が古い。また、調査区内の南端から6間目で後述する東西塀SA17803と交差し、北端から3間目で西に延びる東西塀SA9610が取り付く。SA17802は第270次調査で検出したSA17416と柱筋が一致し、第270次調査ですでに一連の塀であろうと推測している（『年報1997-Ⅲ』。以下、第270次調査の所見についての出典は同じ）が、本調査の成果もこれを裏づける。但し、現在確認されているSA17802の南端とSA17416の北端の柱穴の間隔は58尺あり、10尺等間では連続しない。

SA17803　調査区南西部でSA17802に取り付き、そこ

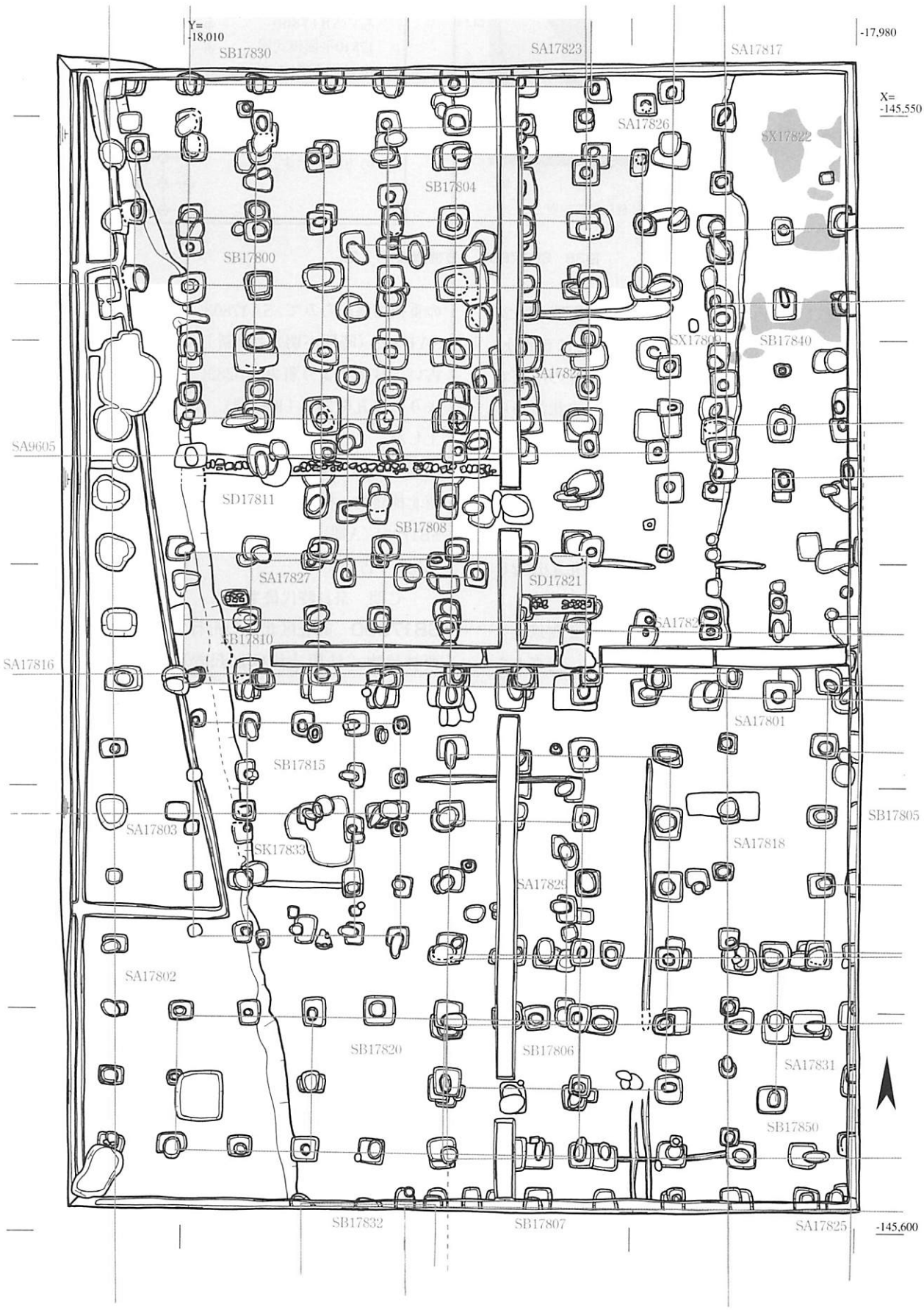


図37　第292次調査　遺構平面図　1：250

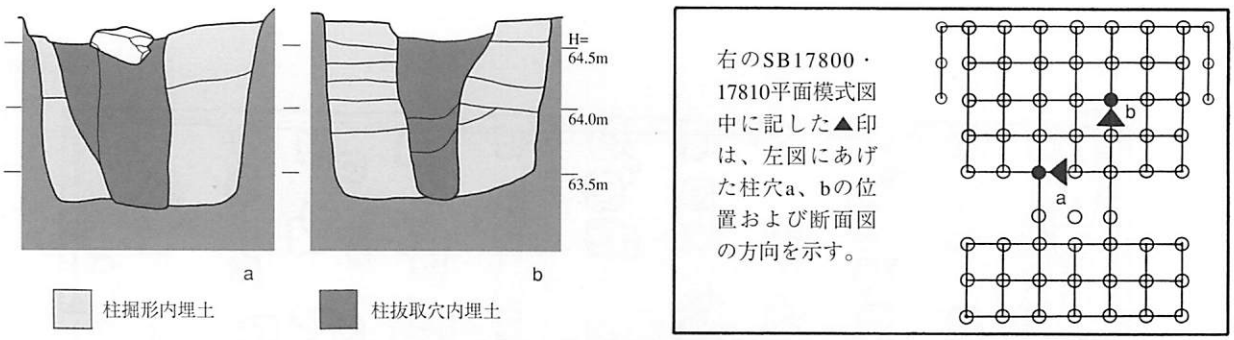


図38　SB17800　柱穴断面図　1：30

から東へ5間延びる東西塀。柱間寸法は10尺等間。第128次調査区では、この塀の西側の延長線上に、さらに5間分、柱間、柱筋をそろえた柱穴が並ぶ。第128次調査の所見ではSB9589の一部とされているが、柱間、柱筋の状況からみて、SA17803と一連の塀である可能性が高い。

SB17804　調査区北半中央の桁行5間×梁間2間の南北棟建物。柱間寸法は、桁行が北端間のみ11.5尺で、他は7尺、梁間は10尺。SB17808（B期）、SB17800（C期）と重複し、これらより古い。柱抜取穴より軒丸瓦6282G型式（Ⅲ-1期）が出土した。

SB17840　調査区北半東端にかかり、桁行2間以上×梁間2間の身舎に南北庇をつける東西棟建物。西妻から2間分を検出し、さらに調査区東方へ延びる。柱間寸法は身舎の桁行の内、端間が10尺で他は8尺、身舎梁間と北庇の出が10尺等間で南庇の出は7尺。SA17817（D期）と重複し、SB17840が古い。

SB17850　調査区南東部の桁行6間以上×梁間2間の身舎に北庇をつける東西棟建物。西妻から6間分を検出し、さらに調査区東方へ延びる。柱間寸法は身舎の桁行が端間のみ14尺と広く、他は10尺等間。梁間と庇の出は10尺。調査区の外に出が10尺以上の南庇がつく可能性もある。SB17806（B期）、SB17820（C期）、SA17829（時期不明）と重複し、これらより古い。

B期　平城還都後

SB17805　調査区中央東端の桁行1間以上×梁間2間の身舎に南北庇をつける東西棟建物。西妻柱筋を検出し、さらに調査区東方へ延びる。柱間寸法は梁間、南北庇の出、ともに10尺。桁行5間の南北棟となる可能性もある。SA17801、SB17850（いずれもA期）と重複し、これらより新しい。

SB17806　調査区南半中央の桁行5間×梁間2間の身舎に東庇をつける南北棟建物。柱間寸法は10尺等間。北妻から2・4番目の柱筋に間仕切り柱の痕跡がある。遺構の重複関係からみて、SA17803、SB17850（いずれもA期）、SA17829（時期不明）より新しく、SB17820（C期）より古い。柱掘形より軒丸瓦6282C型式（Ⅱ-2期）、柱抜取穴より軒丸瓦6131A（Ⅲ-1期）・6308B型式（Ⅱ-2期）が出土した。

SB17808　調査区中央北寄りの桁行5間×梁間2間の南北棟建物。柱間は10尺等間。遺構の重複関係からみて、SB17804（A期）より新しく、SD17811（C期）、SA9605（D期）より古い。

C期　奈良時代後半～末

SB17800　調査区北半の桁行6間×梁間4間の総柱東西棟建物。柱間寸法は10尺等間。後述するSB17810、17820、17830と柱間、柱筋、桁行がそろう。数カ所の柱穴を断割調査した結果、その深さにはばらつきがあるものの、他の時期のものと比べるとはるかに深く、削平を受けている遺構検出面からでも1.6mの深さに達するものがあった（図38）。建物の東西両側には、北東、北西隅柱から東と西に各1間（8尺）の幅で、南に2間（10尺等間）飛び出す張り出しが付くが、これはSB17800に昇る階段に伴う屋根状施設（階段室）と考えられる。

SB17800は遺構の重複関係からみて、SB17804（A期）より新しく、SA9605（D期）、SA17823、17824（いずれも時期不明）より古い。柱掘形より軒平瓦6685A型式（Ⅱ-1期）、柱抜取穴より軒丸瓦6284Ec型式（Ⅳ-1期）が出土した。

SB17810　調査区中央やや西よりの桁行6間×梁間2間の総柱東西棟建物。柱間寸法は10尺等間。SB17800より南へ20尺離れる。ところが、両建物間の桁行中央2間分の南北柱筋をつなぐように、SB17800から南へ12尺、SB17810から北へ8尺の位置に柱穴が並ぶ。その位置からみて、これは後述するSD17811を跨いで、SB17800とSB17810をつなぐ廊下または階段と関わる遺構の可能性がある。SB17810は遺構の重複関係からみてSA17827

(時期不明) より新しく、SA17816 (D期)、SA17828 (時期不明) より古い。柱掘形より軒平瓦6691A型式 (宮内ではⅢ-1～Ⅳ-1期)、柱抜取穴より軒丸瓦6311Ba型式 (Ⅱ-1期)、軒平瓦6721Ga型式 (Ⅱ-2期) が出土した。

SD17811 SB17800、17810の間の東西溝。底石のみ残存。幅は約0.8m。溝心がSB17800の南側柱から南へ8尺の位置にあり、雨落溝を兼ねていたものと思われる。後世の削平による段差のため、調査区西辺でいったん途切れるが、第128次調査区で検出しているSD9604の延長上にあることから、これと一連の溝と考えられる。ところが、SD9604は溝底に石を敷いていないので、底石はSB17800の南側、つまり建物雨落溝の部分に限られるものと推定される。なお、このSD9604の西端はSA5760の東側の雨落溝である南北方向の玉石溝SD3109につながっている。遺構の重複関係からみてSB17808 (B期) より新しく、SA9605 (D期) より古い。

SB17820 調査区南辺の桁行6間×梁間2間の東西棟建物。柱間寸法は10尺等間。2間ごとに間仕切りを持つ。SB17810の50尺南に位置する。SB17850 (A期)、SB17806 (B期)、SA17829 (時期不明) と重複し、これらより新しい。

SB17830 調査区北端の桁行6間の東西棟建物。南側柱筋のみ検出し、調査区北方へ延びる。柱間寸法は10尺等間。SB17800とちょうど10尺の間隔があり、連結した建物である可能性が高い。

D期 奈良時代末～平安時代初頭

SA9605 第128次調査で検出された東西塀の続き。柱間寸法は10尺等間。本調査区内で10間分を検出した。総長16間。東端は北へ90度折れ曲がり、SA17817となる。SB17808 (B期)、SB17800、SD17811 (C期) と重複し、これらより新しい。柱抜取穴より軒丸瓦6133Aa型式 (Ⅳ-1期)、軒平瓦6732C型式 (Ⅳ-1期) が出土した。

SA17816 SA9605から南へ約10mはなれて平行する東西塀。柱間寸法は10尺等間。10間分を検出した。第128次調査区ではこの塀の西延長線上にさらに6間分柱穴が並ぶ。第128次調査の所見ではこれらの柱穴をSB9589、9590の一部としているが、東側の本調査区へ延びるとされていたSB9589の続きが見つからないこと、SA17816と柱間、柱筋がそろうこと、SA9605と平行し柱穴が対をなす位置にあることから一連の塀である蓋然性が高い。また、東端では、南へ90度折れ曲がりSA17818となる。このSA17816、17818とSA9605、17817は、SA5760に開く門SB9606の心を東西軸とし、南北に対称形をなす。このことから、SA9605、17816は、門SB9606から続く東西通路の南北を画する塀であると考えられる。SA17801、17802 (A期)、SB17810 (C期) と重複し、これらより新しい。いくつかの柱抜取穴より奈良時代末から平安初頭にかけての土師器が炭とともに出土し、別の柱抜取穴より軒平瓦6691A型式 (宮内ではⅢ-1～Ⅳ-1期) が出土した。

SA17817 調査区北東でSA9605と連続する南北塀。柱間寸法は10尺等間。6間分検出し、さらに調査区北方へ延びる。SB17840 (A期) と重複し、SA17817が新しい。

SA17818 調査区東半でSA17816と連続する南北塀。柱間寸法は10尺等間。SA17817と柱筋をあわせる。8間分検出し、さらに調査区南方へ延びる。SB17850 (A期) と重複し、SA17818が新しい。

E期 平安時代以降

SD17821 調査区ほぼ中央の東西溝。後世の削平のため、溝底の石敷のみが部分的に残存する。幅はかなり不明瞭であるが約0.6m程である。調査区ほぼ中央に長さ約3m分、そこから約13m西にその続きが約1m分残る。SB17810 (C期) の上層にあたる。

SX17822 調査区北東辺の石敷遺構。後世の削平のため、調査区内で最も標高が高い部分にのみ、わずかに残存していたが、広がり具合からみて、本来、もっと広範囲にわたって面的に存在していたものと思われる。直径数cmから拳大ほどの石を敷き詰めている。SB17840(A期)、SA17817 (D期) の上層にあたる。

時期不明の遺構

SB17807 調査区南端にかかる東西棟建物。桁行7間以上で、柱間寸法は10尺等間。北側柱筋のみ、西妻から7間分を検出し、調査区の東・南方へ延びる。東西塀の可能性もある。柱抜取穴より、軒丸瓦6151A型式 (Ⅳ-2期) が出土した。

SX17809 調査区北東の土師器埋納遺構。南北0.59m、東西0.36mの南北に長い隅丸方形土坑の中に奈良時代の壺形土器が2点、南北に並んで埋納されていた。

SB17815 調査区西半中央の南北棟建物。桁行4間×梁間2間の身舎に東西庇をつける。柱間寸法は身舎部分と西庇の出が8尺等間、東庇の出は7尺。SA17803 (A期)、SX17833 (時期不明) と重複し、これらより新しい。

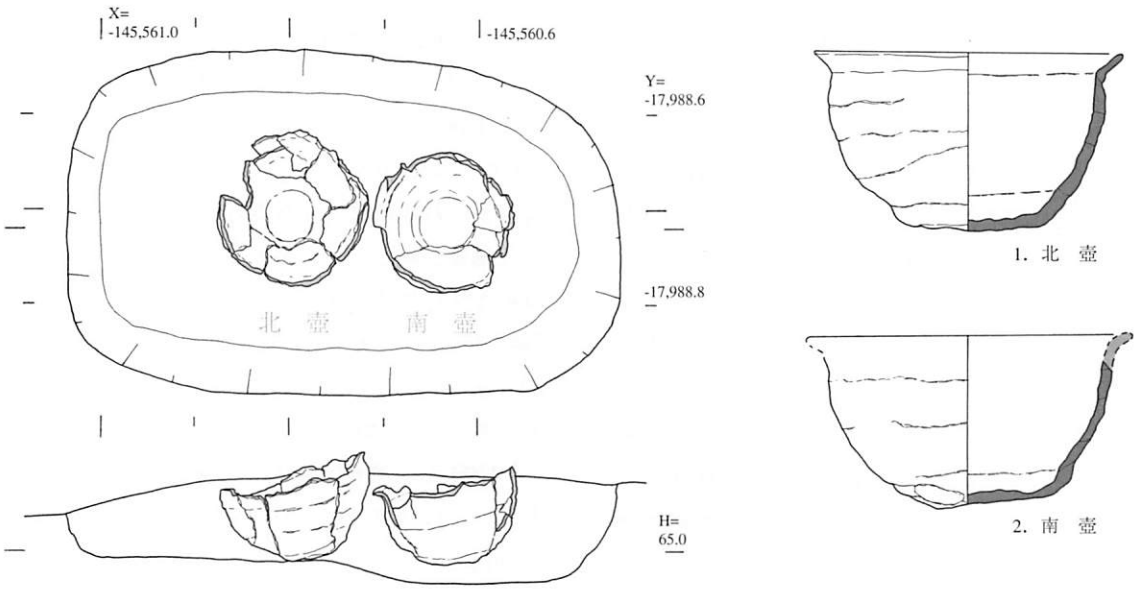


図39 土師器埋納遺構 SX17809（左） 1：8・出土土師器壺（右） 1：4

SA17823 調査区北東の南北塀。柱間寸法は8尺等間。3間分検出し、さらに調査区北方へ延びる。SB17800（C期）と重複し、こちらが新しい。柱抜取穴より軒平瓦6664F（Ⅱ-期）が出土した。

SA17824 SA17823の延長線上で、16尺南に位置する南北塀。柱間は8尺。長さは1間しかないが、柱間2間分空けてSA17823につながる一連の塀であろう。

SA17825 調査区東端にかかる南北塀。柱間寸法は10尺等間。10間分を検出し、調査区東、南方へ延びる。本調査区南側の第243次調査区（1993年度）で検出したSA16260と柱筋が揃い、一連の塀となる可能性がある。この場合、第243次調査の所見では奈良時代前半（『年報1994』）、第270次調査の所見では平城還都直後の時期に属する。

SA17826 SA17823、17824の4m東側に位置する南北塀。柱間寸法は10尺等間。8間分検出し、さらに調査区北方へ延びる。SB17800（C期）と重複し、こちらが新しい。

SA17827 調査区西半中央の東西塀。柱間寸法は10尺等間で、長さ3間。SB17810（C期）と重複し、SA17827が古い。

SA17828 調査区中央の東西塀。柱間寸法は10尺等間。6間分検出し、さらに調査区東方へ延びる。SB17810（C期）と重複し、こちらが新しい。

SA17829 調査区中央南半の南北塀。柱間寸法は8尺等間で、長さ3間。重複関係からSB17850（A期）より新しくSB17806（B期）より古い。B期の直前に造られた仮設的な塀か。

SA17831 調査区東辺南半の南北塀。柱間寸法は10尺等間で、長さは2間しかなく、性格は不明。

SB17832 調査区南端の南北棟建物。梁間2間。柱間寸法は10尺。北妻のみ検出し、調査区南方へ延びる。

SK17833 調査区南西の不整形土坑。南北約3m、東西約3mの範囲に広がる。SA17803（A期）、SB17815（D期）と重複し、これらより古い。土坑埋土中から蓋形等の形象埴輪を含む多量の埴輪が出土した。平城宮造営時の整地に伴う土坑か、あるいは奈良時代以前の遺構である可能性もある。

出土遺物

木製品、石製品、金属製品 SB17800南東隅柱の柱抜取穴より用途不明の板材1点が出土。この他、床土、遺物包含層より砥石、鉄釘が出土した。（清野孝之）

土器 SA17816の柱抜取穴から土師器の皿、椀、高杯がまとまって出土した。これらの土器は奈良時代末から平安時代初頭にかけての時期と考えられる。また、土師器埋納遺構SX17809については以下に述べることとする。

SX17809出土土器について 土師器埋納遺構SX17809は、土坑内部に2つの土師器壺が据えられた状況で検出された（図39）。壺の内より遺物の出土はなかった。削平の為、蓋の有無は確認されていない。壺は共に胴部内外面に粘

土紐積上げの痕跡を残す。また、底部に近い部分に大きく段をもっている。この特徴をもつ壺は、人面を墨書するものが多く見られ、祭祀等特殊な用途をもつものと考えられている。

以上の点から今回の埋納遺構も、地鎮等の目的が想定されるが、今後類例等の検討が必要である。　（金田明大）

瓦塼類　本調査区から出土した瓦塼類は集計表の通りである（表６）。軒瓦は69点（軒丸瓦39点、軒平瓦30点）出土したが、調査面積に対する出土密度は低い（約3.9点／100m²）。遺物の残存状況には様々な条件を考慮する必要があるものの、丸瓦、平瓦の出土量や分布にもまとまりが見られず、調査区内に総瓦葺建物が存在した可能性は低いものと考えられる。

次に、軒瓦のうち時期が判明するもの（46点）について、時期別の出土比率に着目すると、平城宮軒瓦編年Ⅱ、Ⅲ期（本調査における時期区分のA、B期）の軒瓦が大きな比率を占めている。このことから、A、B期には、軒瓦を使用する施設がいくつか存在したものと見られる。但し、出土軒瓦の型式、分布には特にまとまりが認められず、瓦使用施設の特定は困難である。また、Ⅰ期の軒瓦は極めて少なく（軒丸瓦２点、軒平瓦１点）、当該地域の本格的利用が開始された時期をうかがわせる。遺構の時期を特定する手がかりとなる出土軒瓦については、すでにそれぞれ検出遺構の項で説明した通りである。

東院地区から多く出土し、本調査区の東に接する第128次調査区でまとまって出土した施釉瓦塼は、本調査では認められなかった。しかし、SB17807の柱抜取穴から出土した軒丸瓦6151Ａ型式は同笵品に緑釉を施した例がある。施釉した例と本調査出土品は胎土、焼成が非常によく似ており、本調査区出土品は元来存在した釉が剥落した可能性もある。

凝灰岩も出土量は少ないが、特筆すべきものとして、SB17810の南東隅柱抜取穴より凝灰岩製の切石が出土した。加工痕を明瞭に残すほぼ完形の大型品で、重量は30.14kgである。その形態から、建物基壇の葛石と考えられるが、本調査区内に基壇建物の痕跡はなく、どの建物に使用されていたか不明である。

本調査区とその周辺の利用状況の変遷

ここで、本調査区の利用状況の変遷を、遺構配置の特徴、西側の第128次調査区、南西側の第43（1967年度）・270次調査区との関係を通して検討する。

表６　第292次調査　出土瓦塼類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6131	A	5	6644	A	1
	B	1	6663	A	1
6132	A	2	6664	D	1
6133	Aa	1	6685	A	2
6151	A	2	6691	A	3
6225	C	1	6710	A	1
6282	C	2	6719	A	1
	G	2	6721	Da	1
	?	1		E	1
6284	D	1		Ga	3
	Ea	1		Hc	1
	Ec	3		?	3
6308	A	2	6732	C	1
	B	3	型式不明		10
6311	Ba	1			
6313	Aa	1			
6314	B	1			
型式不明		9			
軒丸瓦計		39	軒平瓦計		30

	丸瓦	平瓦	塼	凝灰岩
重量	146.7kg	388.4kg	43.1kg	44.8kg
点数	1,337	3,566	26	13

時期	Ⅰ	Ⅰ-1～Ⅱ-1	Ⅱ	Ⅱ-2～Ⅲ-1	Ⅲ	Ⅲ-1～Ⅳ-1	Ⅳ	合計
点数	2	1	18	2	13	3	7	46
比率(%)	4.3	2.2	39.2	4.3	28.3	6.5	15.2	100

A、B期（図40①、②）　本調査区では、両時期を通じて、南北棟の脇殿を伴う二面庇付き東西棟の正殿が建てられる。Ａ期には、南北二面庇付き東西棟SB17840を正殿とし、南北棟SB17804が脇殿の位置に並び、さらに南には、北庇を持ち、南庇も付く可能性がある桁行６間以上の大規模な東西棟SB17850が配置される。Ｂ期には、調査区東端の建物SB17805を南北庇の付く東西棟と考えると、これを正殿として、東庇付き南北棟SB17806が脇殿の位置関係となる。こうした建物配置からみて、本調査区は宮殿あるいは官衙中枢部分の西半である可能性が高い。

これに対し、第128次および第43・270次調査区では、両時期を通じて、東院西辺部を区画する南北塀と、それに続く塀によって区切られた領域に建物が数棟並ぶ。ところが、これらは特に目立ったまとまりを見せないことから、何らかの施設の周辺部分に当たるものと考えられ、本調査区とは対照的なあり方を示す。

ところで、第128次および第43・270次調査区で東院西辺部を貫く南北塀SA5740が検出されているのであるが、第128次調査の所見では、これを奈良時代前半（恭仁遷都以前）に当て、第270次調査の所見では奈良時代中ごろ

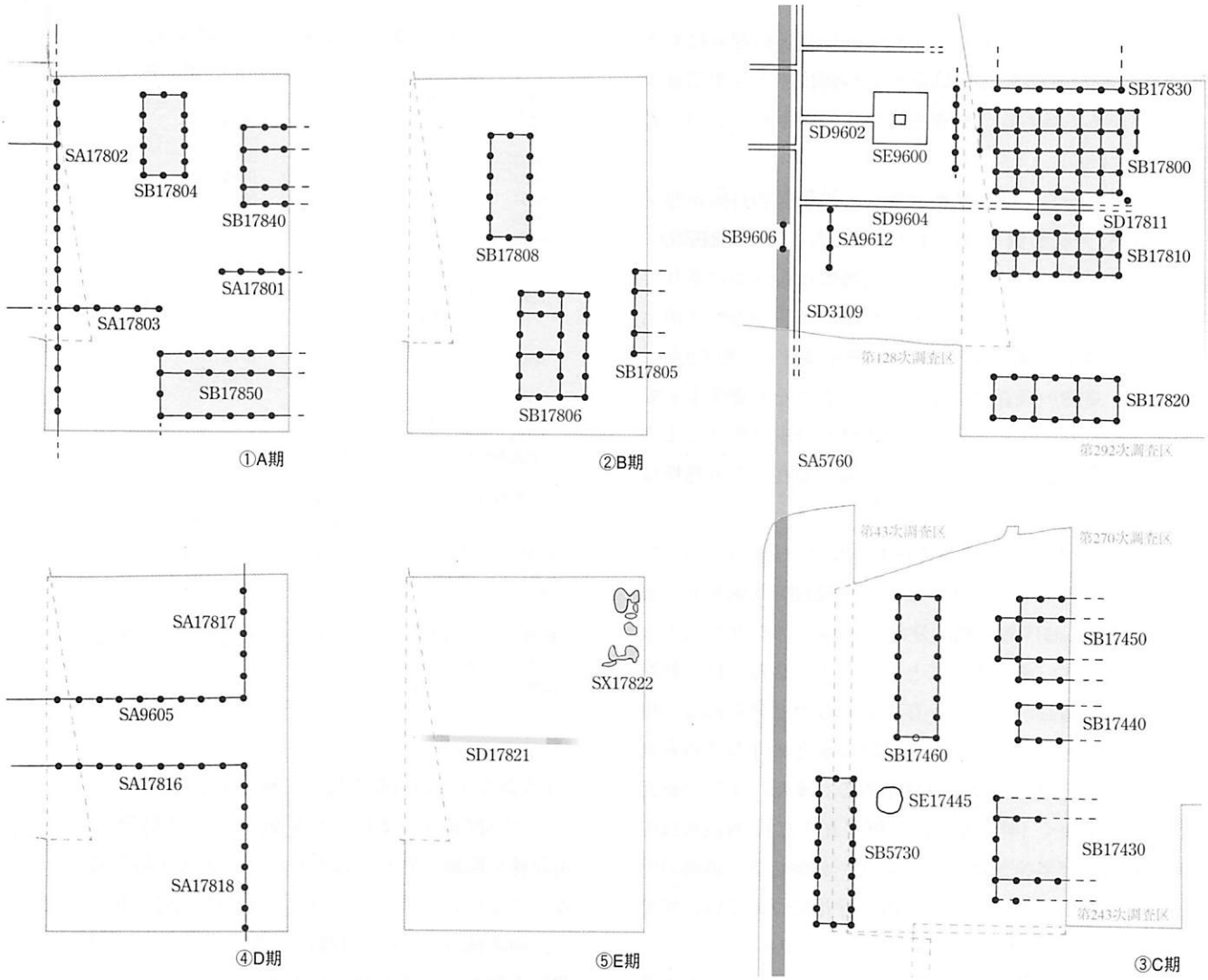


図40　第292次調査　遺構変遷図

（平城還都後）に比定している。東院西辺部の遺構変遷を考える上で重大な問題を含むが、本調査の成果からはこれに関する手がかりを得ることは出来なかった。

C期（図40③）　本調査区では廊下または階段で連結されたSB17800・17810および、これらと一連の建物群と思われるSB17830が並び、3棟が南北に並び立っていた可能性が高い。また、その50尺南には、SB17820を設けている。これらの建物はいずれも柱間、柱筋、桁行を一致させており、東西棟4棟が南北に極めて整然と配置されている。

これに対し、第43・270次調査区では、南北棟の脇殿と東西棟の正殿の組合せが南北に2組並び、これらの建物が身舎、庇の柱間、柱筋を合わせて整然と配される。こうした建物配置は宮内でもほとんどみられず、南側の正殿の梁間が3間であることも加えて、極めて特徴的な空間となる。

このように本調査区と第43・270次調査区におけるこの時期の建物群は、いずれも整然と配置され、それぞれ、ある区画の中枢施設になるものと考えられる。ところが、両者間では柱間、柱筋が全く揃わず、別計画で建てられた可能性が高い。両者は建物配置、建物構造にも大きな違いがあり、性格を異にする区画であったと推定できる。

一方、本調査区のSB17800・17810の間を流れる東西溝SD17811は第128次調査区のSD9604と一連の東西溝であり、さらに東院西辺を区画する築地塀SA5760の東雨落溝SD3109へとつながる。これらの溝や塀が整然と配置されることから、一連の計画の基に造られたものである可能性が高く、本調査区は、その西側と関連の深い空間であったことを示唆する。

なお、第128次調査区東端にかかるSB9613・9614は、本調査区に延びる建物の一部とされていた。ところが、本調査区ではその続きが検出されなかったため、これらは建物になりえないことが判明した。南北塀と考えるのが妥当であろう。これは大型の井戸SE9600に隣接しているため、この井戸の目隠し塀であった可能性が高いものと見られる。

D、E期（図40④、⑤） D期にはSA5760に開く門SB9606から東へ通じる幅約10mの通路が設けられる。通路の南北は塀SA9605・17816で区画されるが、門の東約54mの地点でこれらの塀がそれぞれ南、北に90度折れ曲がる。この通路が第128次調査区と本調査区にまたがることからみて、この時期、本調査区とその西側は一連の空間として機能していたことがうかがえる。

E期の遺構はA～D期遺構面の上層で検出した。検出レベルがほぼ同じなので、一括して同じ時期としたが、時期を特定できる出土遺物を欠くため、これらが併存したか否か不明である。また、調査区内は後世の耕作にともない段状に削平されているため、この時期の遺構は残存状態が悪い。第128次調査区では平安時代に降る南北棟やバラス敷が認められるが、特にまとまった配置を見せるような状況ではない。

なお、第43・270次調査区では、D期はC期と同じ様相、E期については不明である。（清野）

SB17800・17810・17830の特徴と性格

C期のSB17800・17810・17830は非常に特徴的な柱配列を示す一連の建物群である。ただし、本調査では遺構の機能や性格を示唆するような遺物が出土せず、発掘の成果だけではこれを明らかにし得ない。そこで、SB17800・17810・17830と類似する遺構を平城宮内に求め、機能や建築構造に関する考察を加えておきたい。

建物構造の特徴と類例 すでに述べたとおり、SB17800・17810・17830は3棟が南北に並列して共存した一連の施設と考えられる。また、SB17800・17810は総柱建物で、とりわけSB17800の柱穴は非常に深い。一般的に総柱式の柱配列をとる建物は、楼門や高床倉庫に多くみられるが、SB17800・17810の規模はすこぶる大きく、門や倉庫などの施設とは別種のものであり、一連の楼閣建物群と推定できる。

ところで平城宮内では、これまでいくつか楼閣建物の遺構がみつかっているが、それらは門や築地塀に附属する「望楼」的な施設（第一次大極殿院東楼SB7802・第一次内裏東南隅の楼閣SB7601など）と、一定の区画の中心施設（内裏地区Ⅰ期後殿SB4700、第一次大極殿地区第Ⅱ期正殿SB6610・6611・7150）に大別できる。今回検出した楼閣建物は敷地のほぼ中央に位置する大規模な建築群であり、後者に属するのは明白であろう。この場合、注意しておきたいのは、後者の柱配列が内裏正殿SB450Aなどの揚床（あげゆか）式大建築の遺構とも近似することである。しかし、揚床式建物の場合、床束に相当する柱掘形が小さいので、床面はそう高くはなく、床下は人の使用しない閉ざされた空間であったはずである。これに対して、側柱列の柱掘形と棟通りの柱掘形がほぼ同規模となる総柱建物は、床面が非常に高く、床の上下双方を生活空間としたものと推定される。したがって、内裏正殿に代表される巨大な揚床式建築と総柱式の大建築群は、機能と構造の両面

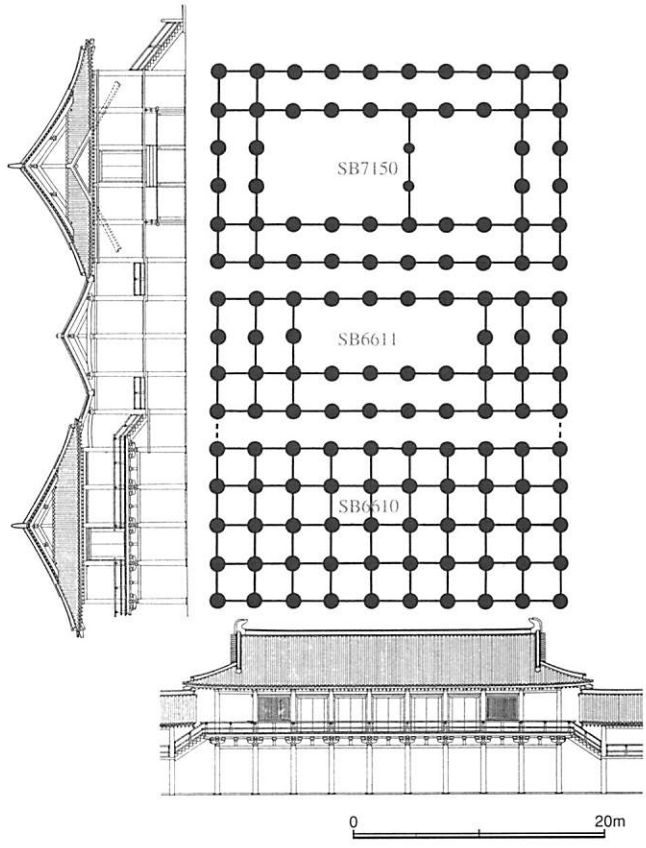


図41 第一次大極殿地域第Ⅱ期正殿遺構配置図（1：300）と復原正面・側面図

図42　唐長安城大明宮麟徳殿復原透視図（左）と復原平面図（右）（1：1000）

において性格を異にする施設であり、本稿では後者のような総柱建物を「楼閣宮殿」、今回検出したSB17800・17810・17830の3棟をとくに「東院楼閣宮殿」と呼ぶことにしたい。

第一次大極殿地区第Ⅱ期正殿と東院楼閣宮殿　さて、SB17800・17810・17830と最も性格の近似する遺構は、第一次大極殿地区第Ⅱ期正殿SB6610・6611・7150（いわゆる西宮「百柱の間」）である。『平城報告XI』によると、SB6610・6611・7150の3棟はいずれも桁行9間の東西棟で、柱筋を一致させながら南北に並列している（図41）。加えて、同じ区画にある脇殿等の附属施設とともに、すべての遺構が柱位置を10尺方眼に合わせて整然と配置されている。一方、今回検出した東院楼閣宮殿も、柱間がいずれも桁行6間でやはり柱筋をそろえながら南北に並列している。さらにこの3棟の50尺南の位置には、柱筋をそろえた平屋建物SB17820を配しており、これらすべての遺構の柱位置をやはり10尺方眼に合わせている。要するに、東院楼閣宮殿はSB6610・6611・7150の桁行規模を3分の2に縮小し、同じ柱配置の原理を共有しているわけである。

一方、年代的にみても、第一次大極殿地区第Ⅱ期は天平勝宝六（754）年～天応元（781）年にあたり（『平城報告XI』）、本調査におけるC期と重複する。すなわち、SB17800・17810・17830とSB6610・6611・7150は、それほど隔たらない時期に建てられ、同時併存した可能性が高いのである。建物配置や構造上の共通性も考慮すると、両者が何の関連もなく、まったく別個に計画されたものとは考え難い。密接な関わりをもって建てられたものとみるのが妥当ではないだろうか。

ところで『平城報告XI』は、第一次大極殿地区の第Ⅱ期施設群を称徳朝の「西宮」に比定している。この説には異論もあるが、そのなかの正殿が総柱式の楼閣宮殿であったことは注目に値する。それは唐長安城大明宮の麟徳殿（図42）がそうであったように、周辺地域の眺望を楽しみながら、大宴会を挙行する施設であった可能性を示唆するものであり、内裏正殿などの揚床式建築と一線を画する重要な用途上の特徴を見出せるのである。東院楼閣宮殿の場合、宴会を催した施設であるという直截的な根拠は乏しいが、『続日本紀』には東院で宴会を挙行した記事が数多くみられ、その宴会に利用された施設の一つであった可能性は否定できない。

加えて、麟徳殿は含元殿、宣政殿、紫宸殿といった大明宮の中心的殿舎の北西側に配され、大明宮の西辺に位置する。また、第一次大極殿地区第Ⅱ期正殿も当時の内裏、大極殿の西（北西）側に設けられる。こうした殿舎配置も考えあわせれば、東院楼閣宮殿が東院中心部の西側に配されることは単なる偶然とは思えず、建物構造や用途とともに、殿舎配置の理念をも受け継いでいる可能性を考慮すべきであろう。

以上みてきたように、第一次大極殿地区第Ⅱ期正殿が大明宮麟徳殿を和風化する形で奈良時代後半に出現し、それを3分の2の規模に縮小した楼閣宮殿が東院の地に建設されたという歴史的経緯を、一応想定できるのではないだろうか。そして、それら日中の巨大高層建築群には、「眺望」と「宴会」という二つのキーワードが見え隠れしている。

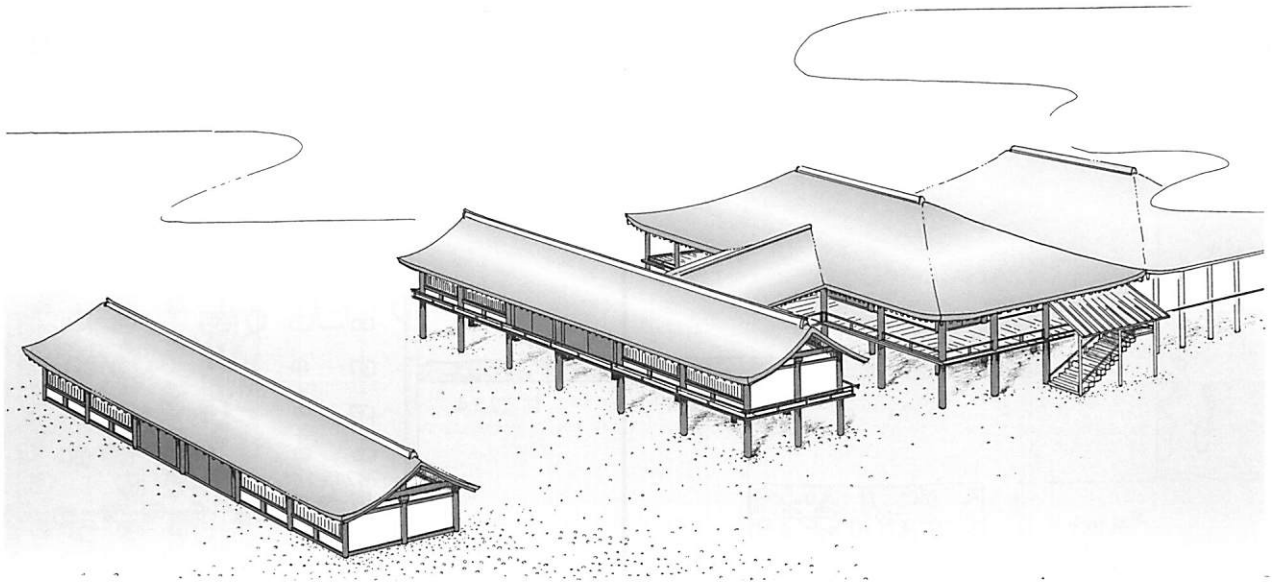


図43　東院楼閣宮殿復原透視図

東院楼閣宮殿の復原　最後に、SB17820も含め、東院楼閣宮殿の復原案を提示しておく（図43）。柱配置からみて、SB17820は切妻造の平屋、SB17810は切妻造の楼閣と考えられる。一方、四面庇を有するSB17800の屋根は入母屋と寄棟の両方が可能だが、桁行・梁間のすべての柱間が10尺等間であることを重視し、麟徳殿復原案との共通性も勘案して、寄棟造の楼閣と推定した。SB17830については、SB17800と軒を接する双堂式の建物とみて、SB17800と同様の構造を想定したが、南側柱筋しか検出していないため、根拠は乏しい。なお、SB17810は梁間2間と規模が小さく、柱掘形もいくぶん浅いので、SB17800より床面を若干低くしている。これにより、SB17800・17810をつなぐ空中廊下（中国でいうところの「複道」もしくは「閣道」）は、南下がりとなる。屋根材は、遺物の項ですでに触れたとおり総瓦葺には復原できないので、檜皮葺が妥当と考える。但し、SB17800の側面に取り付く階段の屋根は板葺とした。（浅川滋男・清野）

調査成果と意義

主な調査成果は以下の通りである。①奈良時代前半から中頃（A、B期）には、本調査区は宮殿あるいは官衙中枢部の西半にあたるものとみられる。②奈良時代後半から末（C期）にかけては東西棟3棟が連結した特異な構造をもつ楼閣建物群（東院楼閣宮殿）が建てられる。③奈良時代末～平安初期（D期）には東院西辺を区切る塀SA5760に開く門SB9606から東に延びる幅約10mの東西通路が設けられる。

このように、本調査区は周辺の既調査区とは異なり、A～C期を通して、ある施設の中枢部として機能した空間であったことが判明した。中でもC期の東院楼閣宮殿は中心的殿舎の西側に存在したことをうかがわせ、D期の様相も、本調査区の東側に中枢施設の存在を想定させるものである。このような状況は、本調査区が東院地区中央部の西側にあたることに深く関わっていると思われ、本調査区東側の未調査地にさらに重要な区画が存在することを予想させる。実際、SB17810の柱抜取穴からは凝灰岩製の葛石がほぼ完形で出土しており、周辺に格式の高い基壇建物が存在した可能性を暗示している。

また、C期の東院楼閣宮殿は、その特異な構造から、第一次大極殿地区第Ⅱ期正殿とともに、唐長安城大明宮麟徳殿の影響を色濃く受けた施設であることを推定した。日中の古代都城を比較研究する上で新たな資料を提供したものと評価できよう。

一方で、本調査区では施釉瓦がほとんど出土しなかったことから、施釉瓦を葺いた建物と推定されている「東院玉殿」に関する直接的な手がかりは得られなかった。また、文献にみられる「東院」「東宮」「東内」「楊梅宮」といった施設との関係もいまだ不明である。こうした文献にみえる諸施設の解明は今後の課題として残された。しかし、これまでほとんど詳細が不明であった東院中枢施設が、本調査区とその東側に存在した可能性を示唆する成果を得たことは意義深い。（清野）

挿図出典
図41『平城報告XI』より一部改変して転載。
図42　楊鴻勛1986「唐大明宮麟徳殿復原研究」『中国考古学研究－夏鼐先生考古五十年紀年論文集（二集）』（のち、楊1987『建築考古学論文集』に再録）より一部改変して転載。

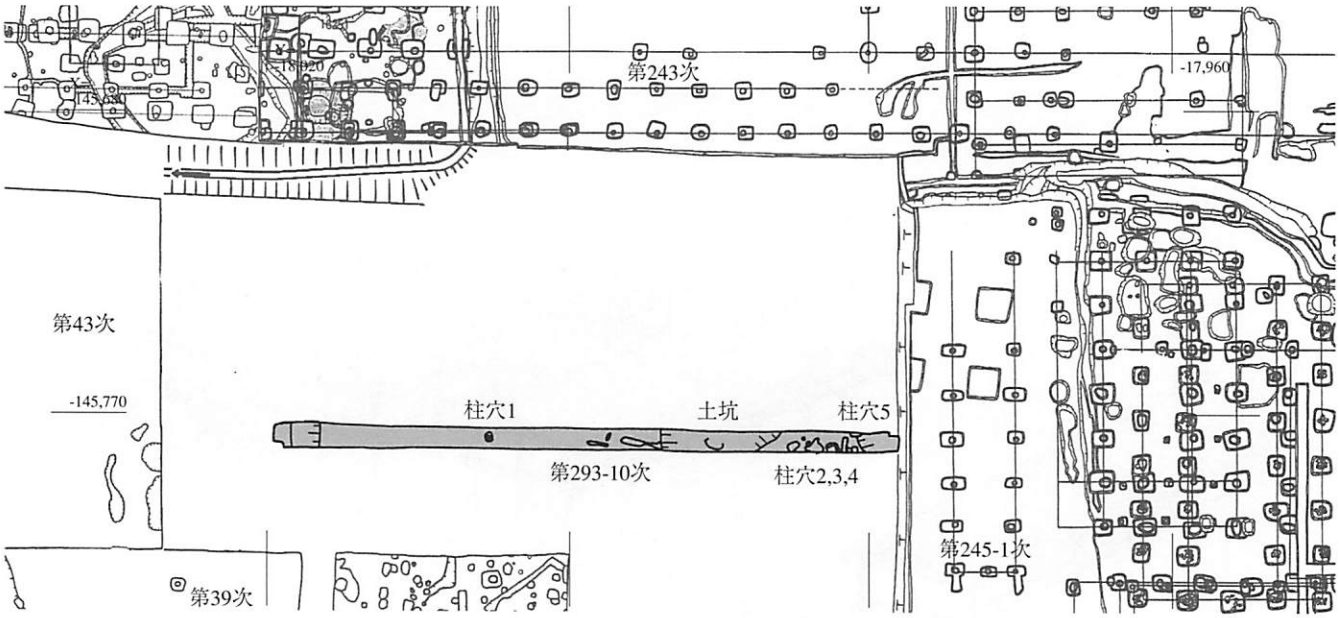


図44　第293-10次調査区と周辺の遺構平面図

2．第293-10次調査

東院地区駐車場整備工事に伴い、排水路計画地を掘削したところ表土直下で地山面が現れたので、急遽、発掘調査することとなった。調査範囲は工事で掘削した東西40m強、南北約１mである。この場所は第39、43、243、245-1次調査区に囲まれた中の未調査地であり、本整備前は仮駐車場としていた。その際、旧耕土は大部分取り去られ、遺構面直上にかろうじて旧耕土または床土の一部が残っている状況であった。遺構面は地山である大阪層群の砂礫層または粘土層である。しかし、この面に掘られた柱穴の残存深さから見て、検出した地山面自体すでにある程度の削平を受けている。

検出した遺構は、奈良時代の柱穴５箇所と古墳時代の溝もしくは土坑１箇所である。

柱穴１は掘方の径60cm、柱痕跡の径20cmで、残存深さは20cmに満たない。東西につづく柱穴がないことから、南北方向の塀の一部かと考えられる。

柱穴２、３、４は調査区東部南辺に並ぶ柱穴群である。掘方の径50～80cmで、掘方内には奈良時代の瓦片や凝灰岩片が含まれており、平城宮の建物の柱跡であろうが、これらが同一の建物か否かは不明である。

柱穴５は柱穴４の北にあり、掘方が北壁にわずかにかかって検出された。北壁部分での径は75cmである。

古墳時代かと考えられる溝もしくは土坑は調査区東半部にある。幅約７m、検出した深さ40～50cmで、西辺はほぼ南北方位に合うが、東辺は北で東へ約56度傾く。人為的に掘られた凹みを、おそらく平城宮の造営時に埋めたものであろうが、この埋め立てに際し、近くにあった古墳を壊し、その埴輪をまとめてこの中へ投棄している。埴輪は溝中央部に集中しており、敷並べたように面をなす部分もあった。埴輪は円筒、家形、朝顔形などで５世紀中頃を中心とする。少量ではあるが須恵器、土師器もある。また、埋土の最下層である茶褐粘質土からはサヌカイト製の国府型ナイフ形石器（長さ約５cm）１点が出土した。

（高瀬要一）

平　城　専（こらむ）欄　②

◆「平城宮跡発掘見学会」顛末記

1998年４月に朱雀門・東院庭園復原記念イベントが盛大に行われ、平城宮内は大いに賑わった。その中で、第292次調査現場も、「平城宮跡発掘見学会」と称するイベントに組み込まれ、常時、見学者を受け入れた。

この期間中の平日２回、現場担当者が調査の概要を説明することになった。しかし調査は始まってまだ半月足らずで、話のネタがない。頭をひねったあげく、調査の手順を説明したり、遺物に触れてもらったりしてみた。ところが苦肉の策が意外にも好評。特に土が付いたままの遺物は臨場感抜群で、百の言葉に勝る。マスコミにも取り上げられ、結局期間中に数千人の方々が現場を訪れた。

お客さんの反応は様々。説明を熱心に聞く人、遺物に触るだけであっさり帰ってしまう人、中には壮大な自説を滔々と語り出す人も…。ともあれ、人前で話すことに不慣れだった現場担当者には貴重な経験になりました。　(S)

Ⅱ 平城京等の調査

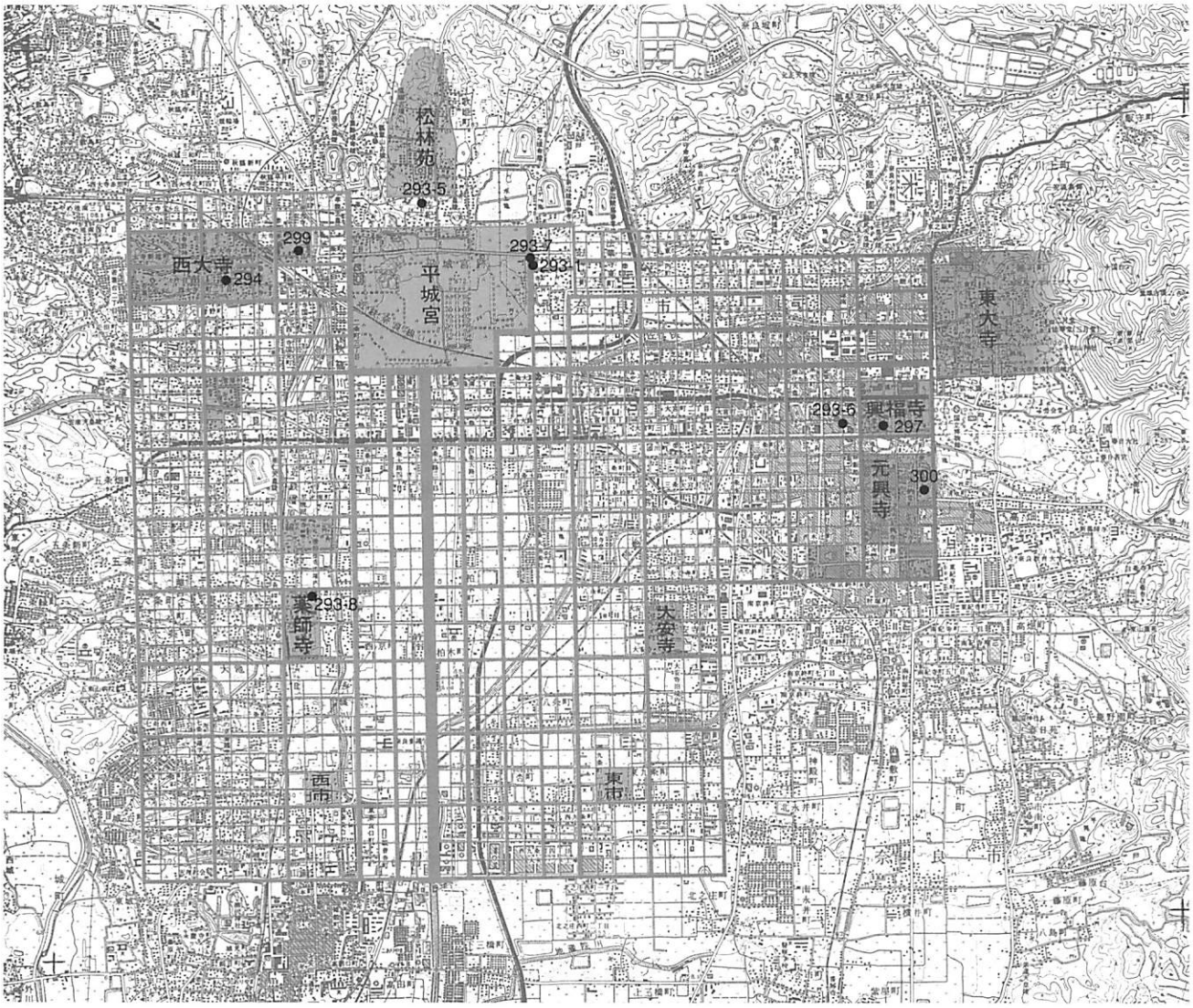


図45　1998年度　平城京内発掘調査位置図　1：50000

◆西大寺境内西南隅の調査 ―第294次

西大寺興正殿の新築工事にともなう事前調査である。興正殿は鎌倉時代の西大寺復興を推進した興正菩薩叡尊上人の記念堂で、現境内の西南隅に位置する（図46）。その敷地は、文亀二年（1502）の「西大寺寺中曼陀羅」にみえる「三銘松」、すなわち灌頂堂と南大門の中間に植えられた松林あたりに相当する。調査トレンチは東西12m×南北15m（180m²）で、遺構検出面は上層が海抜73.40m前後、下層が海抜73.10m前後である（図47）。基本層序は、上から盛土、近代の耕土、中近世遺物包含層、中世耕土層、遺構面となる。

1．検出遺構

SE850　発掘区中央西寄りの円形井戸。二段掘りの形状に抜き取られている。抜取り穴は上面の直径約３m、深さ約70cmで半分の径となり、さらに一段深く掘り下げている。底までの深さは、およそ115cmを測る。また、上層面を10cmほど掘り下げたところ、抜取穴の周辺から砂粒化した凝灰岩と花崗岩が環状に並んだ状態でみつかった。井戸館の柱礎石の可能性がある。

SE851　西壁際の中央でみつかった円形石組井戸。井戸の直径約80cm、掘形の直径約170cmで、井戸底は10～15cm×3cmの杉板材を縦に組み、その上に石を積み上げている。石組の残高は約１m。埋土からは近代の遺物が集中して出土した。西大寺境内には数ヶ所に井戸が現存するが、それらもSB851と同種の石組円形井戸であり、その上部を方形の井戸館で覆っている。

SD852　西壁よりの南北斜行溝（南で西に約３度振れる）。幅約25cm、深さ６～15cmで、北から南に流れる。

SD853　北壁に流れ込む南北小溝。耕作溝か。

SD854　東壁よりの南北斜行溝（南で東に約５度振れる）。幅約30cm、深さ15～45cm。溝の両壁はほぼ直にたちあがり、黒褐色の埋土に遺物は含まれず、全体を叩き締めている。溝というよりも、柵状構造物の基礎のような感があり、SD856・857に切られているので時期的にも古

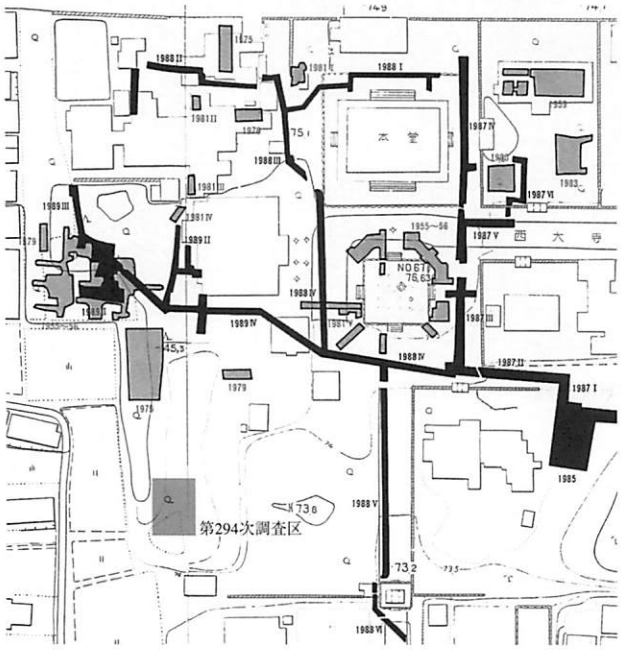


図46　発掘位置図　1：2000

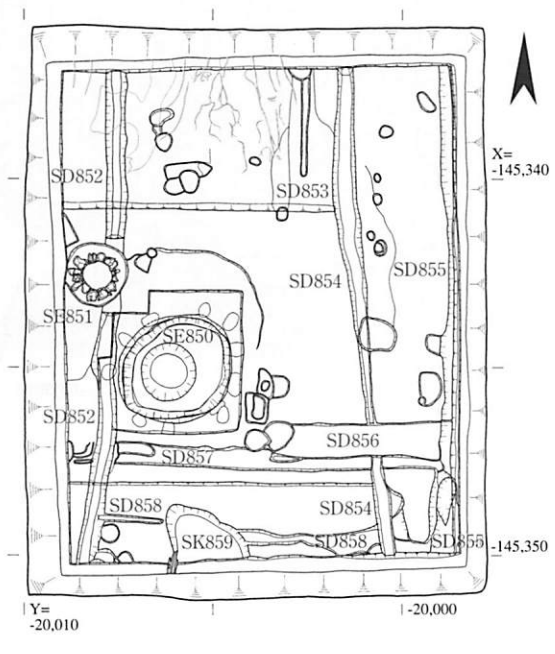


図47　遺構平面図　1：200

図48　SE850出土木製品・金属製品　1：4　（右端挿図は『七十一番職人歌合』二十一番草履作『群書類従』巻503より）

く、SE850と共存していた可能性がある。

SD855　東壁際の南北溝。いくぶん西に振れている。

SD856　SE850の東南隅近くから東へ流れる東西溝。

SD857　SD856に南接する東西溝。重複関係からみて、SD856よりも新しく、溝底まで掘り下げたところ、SD854の一部が検出された。幅20～30cm、深さ約8cm。

SD858　南壁寄りの東西斜行溝（東で南へ5度振れる）。SD852・855とほぼ直交関係にあり、中近世耕土層（灰黒粘土）にともなう施設の可能性がある。

SK859　南壁沿いの土坑。近代の瓦が大量に出土した。

以上のほか、トレンチ南北両側の下層遺構検出面では、しがらみあう松の樹根痕跡が認められ（実測したのは北側のみ）、SE850の埋土からは御用松の松ぼっくりも出土しており、中世に松林が存在したことを裏付けている。

2．出土遺物

土器類　SE850の埋土から、完形に近い瓦器と羽釜・鍋の破片が出土した。いずれも1350年以降の土器である。

瓦塼類　おびただしい量の瓦が出土した（表7参照）。とりわけ注目されるのは、SE850の埋土から出土した中世の軒瓦で、叡尊による伽藍復興期（1280年頃）のものがめだつ。（浅川滋男）

木製品・金属製品　包含層である青灰土中より漆塗り容器蓋、SE850底部より栓（図48-1）、横櫛（3）、箸（5）、蓋板、曲物、草履状木製品が、また抜取より鉄鏃（2）が出土した。4は蓋板。円盤に2ヶ所の小孔を設け、一方には木釘が残る。直線をなす側面にはそれぞれ一対の小孔がある。板を合わせるためのものであろう。6は草履状木製品。左右対称の2枚の板材からなり、これを芯にして藁などを編み込み緒をつけたものである。左右の切取部の位置を合わせると、長さ24cm、幅8cmに復原できる。厚さは1.5～3.5mm。先端・後端ともに方形に作り、切取以後の側縁を外反ぎみにする。図の左は両面割裂、右は片面ケズリ、片面割裂。ヒノキ材。広島県福山市草戸千軒町遺跡では、本例と類似する形態のものが、14世紀中頃～後半の遺構に伴っている（下津間康夫「履物類の様相－下駄・草履状木製品－」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』1996）。なお第282-6次調査では、端部の丸い形式で長さ15.4cmの小型品が出土している（『年報1998-Ⅲ』：p.66-67）。（次山　淳）

表7　第294次調査出土瓦塼類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
西大寺 82	A	1	西大寺 303	A	8
86	I	7	313	A	1
184	A	1	317	A	1
中世		2	333	A	1
小型菊丸		24	350	A	1
鎌倉巴		4	392	C	3
中世巴		2	392	I	1
近世巴		1	394	A	1
軒桟小型巴		1	中世		2
			近世		7
			型式不明		2
軒丸瓦計		43	軒平瓦計		28

丸瓦		平瓦	道具瓦他			
重量	155.0kg	497.5kg	留蓋	1	雁振瓦	1
点数	1,079	3,455	面戸	1	熨斗瓦	1
			隅木蓋	2	鳥衾（巴）	2
			隅切平	1		

3．まとめ

西大寺が造営された奈良時代称徳朝において、本調査地には建物類が一切存在しなかった。おそらく叡尊による伽藍復興の前後に井戸SE850が掘削され、それは松林とも共存していたが、14世紀後半以降、井戸枠が抜かれて廃絶し、ここは一時期田畑と化した。しばらくして境内地に復旧したものの、近代に再度田畑と化し、それが再び境内地に復旧して今日に至る。それにしても、叡尊を記念する施設の事前調査において、叡尊ゆかりの遺物や遺構が数多く出土したことは、偶然とはいえ、まことに幸運であったというほかない。（浅川）

◆興福寺中門・南面回廊の調査
―第297次

1．はじめに

興福寺では、「興福寺境内整備構想」に基づき、平成10年度から平成19年度までの10年間を第1期整備事業期間として設定し、興福寺旧境内の主要堂宇地区の中金堂、中門・回廊、南大門、および周辺地区を対象に遺構等の整備をおこなうこととした。本調査は、この整備事業に伴う発掘調査年次計画の第1年次にあたり、中門およびその両脇に取り付く南面回廊を含む841.5m²を調査の対象とした。

2．中門の歴史

興福寺は、平城京外京の左京三条七坊、現在の奈良市登大路町に位置する。

中門の建立は記録にないが、中金堂の建設とともに和銅3年（710）の平城遷都後まもない和銅年間から養老年間の頃のことと考えられている。

中門と中金堂を結ぶ回廊に囲まれた区画を中金堂院と呼ぶが、平安時代以降、この中金堂院に限ってみても、永承元年（1046）の火災を最初に、7度の火災を受け、6

図49　興福寺全景・調査区を含む（南上空より）

度の再建を重ねている。特に有名な出来事は、平安時代の末、治承4年（1180）の平重衡による南都の焼き討ちである。興福寺では、火災のたびに再建を重ねてきたが、江戸時代の享保2年(1717)に起こった7度目の火災の後、中門は再建されることなく、明治の廃仏棄釈をへて奈良公園の芝地の一画となっていた。

3．発掘調査の成果

① 建物・基壇

中門の遺構面は、最も遺存の良好な棟通りの東西部分において、現地表下約5cmで基壇土に達する。中央間に相当する部分では東西約6m幅で参道敷設による削平を受けており、近世以降の松の植樹による撹乱も存在するため、遺構の残りは必ずしも良好であるとはいえない。

基壇の断ち割り調査の結果、中門地区の旧地形は、調査区東半で南に向かう谷がはいっており、調査区南端中央、階段付近で現地表面から約90cm下、同東端の回廊北側通り付近で110cm下において、旧表土面を確認した。この谷を切土により埋め立て、整地の後、基壇築成をおこなっている。

中門SB7415　礎石はいずれも花崗岩で、基壇上に3基が遺存し、他はすべて抜き取られている。現存する礎石の大きさは上面で約1.2×1.2mをはかる。また、各々の抜き取り穴のなかに数個の根石を確認した。

これらの礎石または抜き取り穴から推定される中門の建物規模は、東西23m（78尺）、南北8.4m（28尺）で、桁行き5間、梁行き2間に復原できる。柱間の寸尺は、桁行き中央3間が16尺等間、両端間が15尺等間、梁行きが14尺等間となる。

基壇は、その平面規模が東西27m（92尺）、南北14m（48尺）に復原できる。基壇の出は、平方向が10尺、妻方向が7尺となる。階段の幅は、中央3間分である。

また、棟通り東から2基目の礎石の東南に近接して、表面に円形の穴を2つ穿った花崗岩を、基壇に据え付け

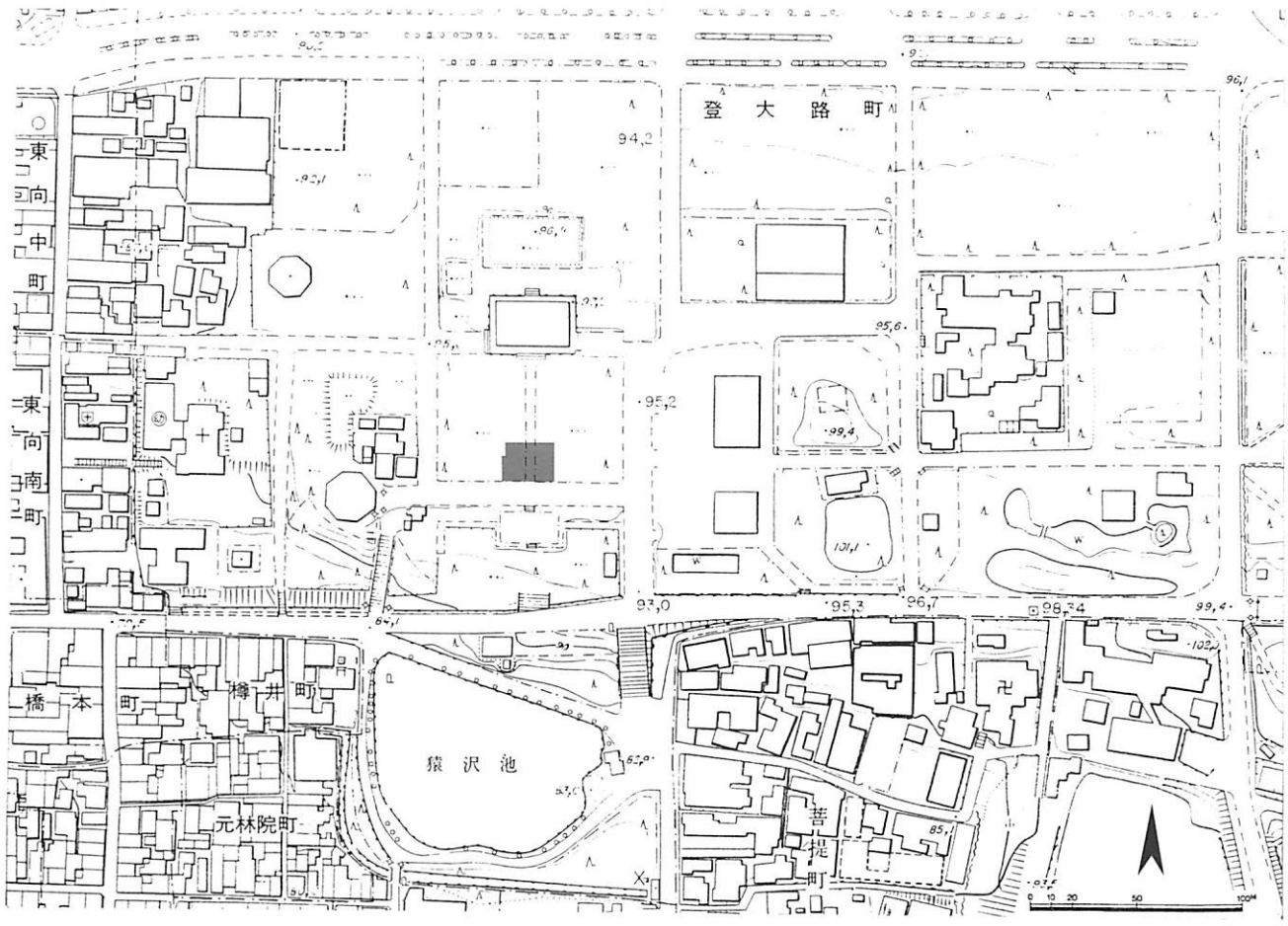


図50　調査地位置図

図51　従鬼像台座石SX7424据付け状況（東より）

られた状態で検出した（SX7424）。上面は東西（横）60cm、南北（縦）30cm、穴は径11cm、深さ20cm、心々が27cmで東西方向に並ぶ。東の穴の中からは、銅・鉄製品が出土した。SX7424は、東端間に安置された従鬼（夜叉）像の台座石と考えられる。

南面回廊SC7416・7417　礎石は花崗岩で、西側基壇取り付き部で1基が遺存し、他は東西合わせて8基の抜き取り穴を確認した。回廊の建物規模は、南北7.1m（24尺）、梁行き12尺2間等間、中門取り付き部の桁行き2.6m（9尺）、SC7417において確認した西の桁行き、4m（13.5尺）となる。基壇幅は、10.6m（36尺）、基壇の出は6尺である。

また、中門および南面回廊基壇上で足場穴と考えられる複数の柱穴を確認した。このうち足場SS7425は、桁行き5間、梁行き2間、柱間は約4mで、柱穴のひとつから14世紀後半の瓦質火鉢が出土した。

②　基壇・基壇外装の変遷

基壇外周において、現在確認される最も古い遺構は、北側の基壇外装にあたる凝灰岩地覆石列と羽目石SX7418、階段の出にあわせて幅54cmに玉石を3列敷きならべた東西妻までの犬走りSX7419、その外側に直線的にめぐる幅40cm玉石敷きの雨落ち溝SD7420である。さらに雨落ち溝側石の外側に玉石敷きSX7421が幅66cmでめぐる。断面観察の結果、据え付け掘りかた埋土に焼土を含み、地覆石に転用のみられることから、この時期を**B期**とし、それ以前を**A期**とする。

C期　基壇羽目石の外側に凝灰岩切石をおく（SX7418b）。また雨落ち溝の側石、外周の玉石敷きの一部を抜き取り、凝灰岩切石をおく（SX7421b）。

D期　基壇最上面では、多量のバラス・焼土・土器・瓦を含む複数の積みなおし基壇土が認められ、その上面に凝灰岩による金剛柵地覆石SX7422・回廊棟通り地覆石SX7423の痕跡がのこる。基壇外装では、凝灰岩切石との間に焼土を含む間層をはさんで、花崗岩による基壇化粧がおこなわれる（SX7418c）。また、外周の凝灰岩切石の上に大きさの不揃いな玉石を用いた石敷きがつくられる（SX7421c）。

E期　西側南縁基壇外周において、切石石列が認められる（SX7438）。これらは、花崗岩基壇外装の抜き取り後に設けられている。

③　回廊内の遺構

調査区北半にあたる回廊内は、表土から、黒褐色土、褐色土、茶灰色土の堆積がみられ、約40～50cmで遺構確認面である黄色砂整地面に達する。

瓦溜SX7426・SX7427　SC7417の北側で検出した瓦溜。SX7426は創建期の軒瓦を含み、SX7427は永承の火災以降で治承の兵火以前の軒瓦を含む。

地鎮遺構SX7428　中門から回廊内に入った北約7mの地点において、黄色砂上の茶灰色土層から掘り込まれた径30cmの小土坑を検出した。土師器小皿を21枚埋納しており地鎮遺構と考えられる。

柱穴列・小穴群SX7429～7432　回廊内では多数の柱穴を確認した。まとまりを把握できないものも多いが、中門階段正面をはさみ、その左右に並ぶ東西方向の柱列にSX7429～7431がある。このうちSX7430はほぼ同一位置に5回の重複がある。柱間は、2.4m。SX7432は、雨落ち溝SD7420側石抜取りの位置に南北に斜方向に打ち込まれた小穴群。東西は基壇の範囲に収まる。

廃棄土坑SK7433～7436　いずれも瓦および基壇化粧の石材などを多量に含む廃棄土坑である。　（次山　淳）

図52　地鎮遺構SX7428　土師器小皿出土状況

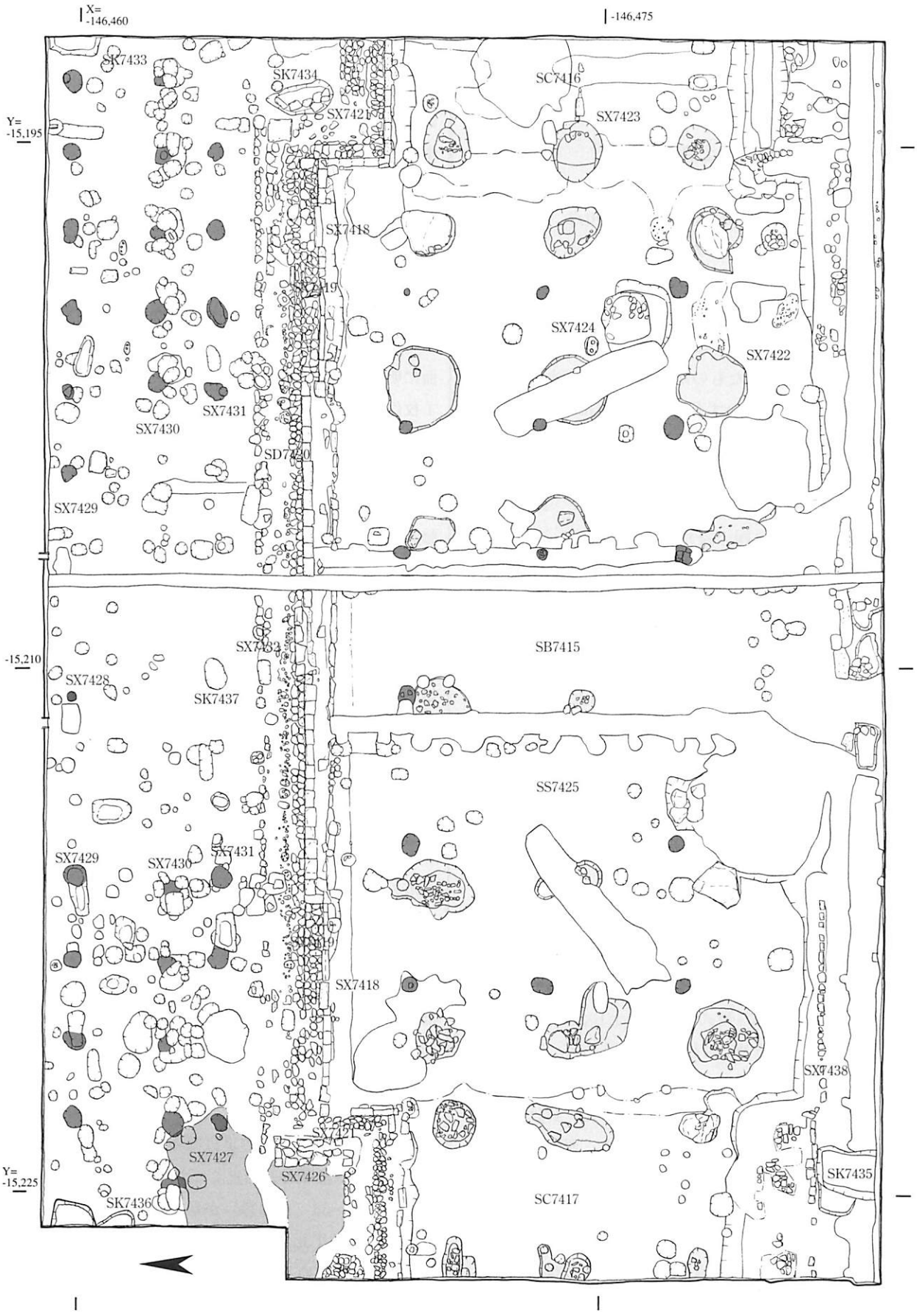


図53　第297次調査遺構図　1：160

4．出土遺物

瓦

軒丸瓦103点、軒平瓦80点、丸瓦約5000点、平瓦約12300点、鬼瓦３点他が出土した（図54）。

軒丸瓦　１は6271Bで１点出土。久米寺と同笵。6301型式は11点出土。２は6301A。6301Aと認定できるものが６点あり、うち４点が瓦溜SX7426出土。次山淳によると、6301Aには笵傷の進行したものがあるとする。本調査区出土例は笵傷は少ない。いずれも瓦当裏面に（瓦当裏面調整の）布目痕を有する。３は線鋸歯文縁無子葉単弁の軒丸瓦。法隆寺軒丸瓦22Aと同笵とされるが、現物照合を要する。以上は興福寺創建期の軒丸瓦。

４は珠文縁、５は素文縁の複弁８弁軒丸瓦。６・７は唐草文・珠文縁の複弁６弁軒丸瓦で、７は法隆寺軒丸瓦62Aと同笵。瓦溜SX7427出土。８は中房に巴文を配する単弁８弁軒丸瓦。９は梵字文軒丸瓦。梵字アークの逆字（笵型の正字）を配する。他に梵字アークの正字を配する小破片出土。９は新薬師寺例（法金剛院『古瓦譜』所収）と同笵だろう。12は三巴左巻軒丸瓦。４～９、12は永承火災以降で、治承の兵火以前の軒丸瓦。

10は中房に４＋８の蓮子を配し、11は中房に１＋８の蓮子を配する複弁８弁軒丸瓦。ともに養和再建期を代表する軒丸瓦。13・14は中世の三巴文軒丸瓦。

軒平瓦　15は変形忍冬唐草文軒平瓦で6645A。久米寺と同笵。顎部の叩き文は、平行叩き痕の残るもの（15左半）と縄叩き痕の残るもの（15右半）とがある。16は上外区・脇区に杏仁形珠文、下外区に線鋸歯文を配する均整唐草文軒平瓦で、6671A。6671型式は15点出土し、6671Aと確実に認定できるものが６点、他も6671Aであろう。SX7426で６点出土。顎部長が8.4cmの長いものから５cmの短かいものまである。以上は興福寺創建期の軒平瓦。17は中心飾りを有しない均整唐草文軒平瓦で6739A。西隆寺と同笵で、奈良時代後半のもの。

18は均整唐草文軒平瓦で、平安時代前期のもの。19は主葉と支葉が連続する均整唐草文軒平瓦。『興福寺食堂報告』28と同笵。20は主葉の巻きと支葉とを結合させ、複線で唐草を表現する均整唐草文軒平瓦。『興福寺防災報告』124と同笵であろう。19・20とも平安前期の軒平瓦。21はSX7427から出土した特異な文様の軒平瓦。左右両端に半截した蓮華文をおき、中央下半にも蓮華座風の文様を配する。中央上半の文様は不明だが、動物文と解するのも一つの考えであろう。笵型によらないものか厳密にはわからないが、工具による切り込みが残る部分があり、手彫りと粘土貼り付けを組み合わせて瓦当文様を作ったものであろう。SX7427からは、この軒平瓦と組み合う平瓦が多数出土し、そのうち全長のわかるもの13点で27.3cmから30.6cmの間にある。凹面の布目は比較的細かく、凸面に明瞭な叩き痕はない。布の合わせ目がないことから１枚作りであろう。軒平瓦・平瓦のいずれの狭端面にも、わら状圧痕の痕跡が残り、狭端面を下にして乾燥させたことがわかる。

22・23は段顎形態の軒平瓦。22は波状文風の文様（薬師寺・興福寺瓦又資料）に類似するが、先端は巻き込み唐草文軒平瓦である。24は右偏行唐草文軒平瓦で、『防災』140と同笵であろう。直線顎。25は中心飾り・主葉・支葉が連続する唐草文軒平瓦。直線顎で、平瓦部凸面は瓦当近くまでタテケズリをおこなう。26はSX7427出土の均整唐草文軒平瓦。『薬師寺報告』267と同笵。薬師寺例は段顎だが、本例は直線顎で、平瓦部凸面は瓦当近くまでタテケズリをおこなう。27は線太の主葉を反転させた唐草文軒平瓦。直線顎。28は唐草が連続する軒平瓦。『食堂』66と同笵。曲線顎。29は３回反転の均整唐草文軒平瓦。『防災』159と同笵だが、本例は外区の圏線がなく笵の切り縮めか。曲線顎。30は中心飾りのない左右に別れる均整唐草文軒平瓦。『食堂』62と同笵。曲線顎。31は均整唐草文軒平瓦。仁和寺出土瓦（山崎「大和における平安時代の瓦生産」第14図１）に酷似する。曲線顎。32は唐草文軒平瓦。曲線顎。33は均整唐草文軒平瓦で、『薬師寺』344と同笵。笵両端を切り縮めている。34は木の葉文軒平瓦。『薬師寺』288と同笵。曲線顎。35は均整唐草文軒平瓦。

22～34までは永承の火災以降、治承の兵火以前の軒平瓦。22～27（段顎と瓦当近くまでタテケズリする直線顎）が古く、28～34（曲線顎）が新しい。36は養和再建期の均整唐草文軒平瓦だが、文様はくずれる。顎は曲線顎で古い形態をとどめる。15～36まで顎はりつけ、以下は瓦当はりつけの軒平瓦。37は興福寺の銘。38は連珠文。39は菱形唐草文。40は菊水文軒平瓦で、瓦当中央上部に菱形の刻印。東大寺と同笵。

（山崎信二）

図54　興福寺出土の軒瓦　1：5

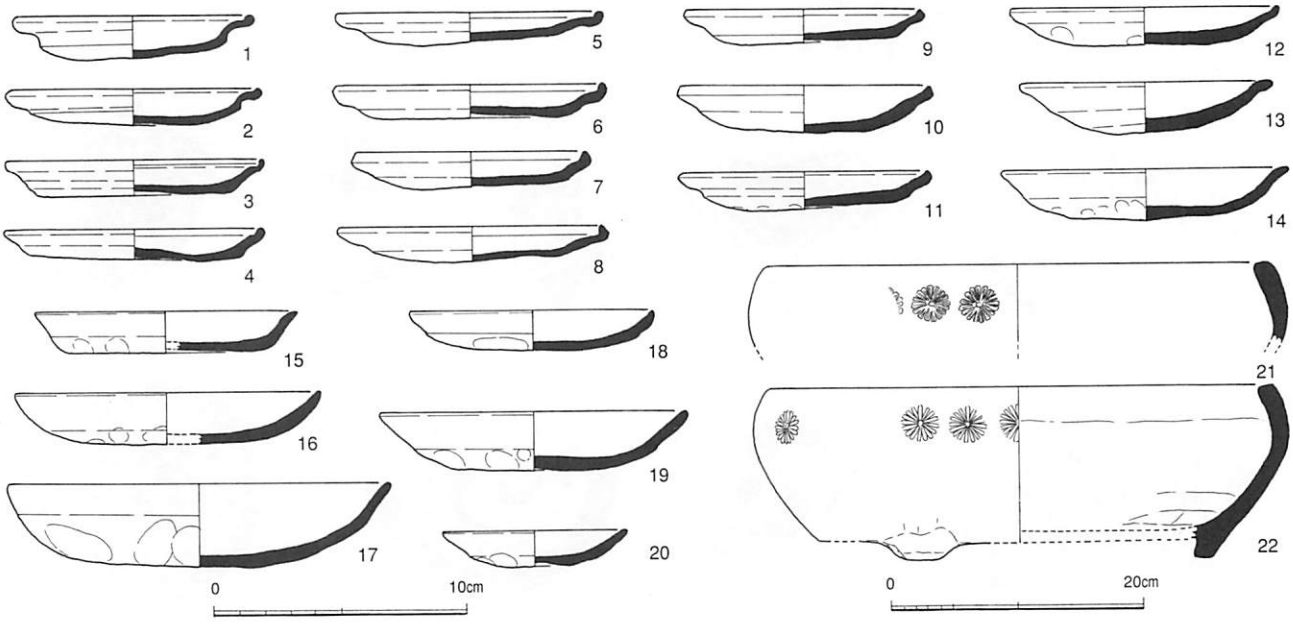


図55　第297次調査出土土器　1~20　1：3　21~22　1：6

土器

調査区全体で遺物整理用コンテナ約20箱分の土器が出土した。古代の土師器、須恵器、緑釉陶器から備前焼の擂鉢、そして近現代の陶磁器まで各時代のものがある。

そのなかで主体を占めているのが、後に述べる地鎮的性格をもつ一括埋納土器群と同時期の土師器皿であり、微量の瓦器がともなう。これはその時期に興福寺の焼失と再建が相次ぎ、中門付近にも大掛かりな整地が行われたことを示すものである。茶灰色のこの整地土は細かく砕かれた同種の土師器片を大量に含んでおり、包含されている土器の量は、個体として取り上げた量の何倍にも達しよう。

SX7428一括埋納土器群は、基本的に「ての字状口縁」をもつほぼ似た法量の土師器皿21点からなる。このうち14点を図示した（図55）。図示したものの口径は平均10cmである。また、すべて器厚３ないし４mmと、「ての字状口縁」の皿の中では厚手のものとなっている。色調は橙褐色あるいは茶褐色を呈す。細かく見ると、強く屈曲して端部を丸くおさめるもの（1・2）、屈曲した口縁内面に稜ができるもの（3・4）、屈曲は緩いが端部を丸くおさめるもの（5・6）、屈曲は弱く、端部が外側に面をもつもの（7・8）、屈曲が弱く外面を一段横ナデしているだけにみえ、端部もほとんど肥厚しないもの（9~11）、屈曲も横ナデも弱いもの（12）などがあり、一括使用の「ての字状口縁」皿のヴァラエティを把握できる好資料といえる。これらにともなって口縁端部を外に引き出すように外反する坏に似た形状の皿（13・14）が出土している。年代的には、11世紀後半を中心とする時期に比定することが妥当であるが、永承の火災の直後か、それとも永長の火災の直後のものかを断定することは難しい。状況からして、最初の大規模な整地のし直しにともなうものといえるであろう。

15~22には、この他の柱穴や土坑から出土した土器類を提示した。15は奈良時代に遡る可能性のある土師器小皿でSK7437出土。16~18の土師器と、21・22の瓦器は14世紀頃に比定できるもので、この時期のものも比較的多く出土している。このうち、２点の瓦質土器は浅鉢で、いわゆる奈良火鉢とよばれるものである。その形態や花文のスタンプなどから14世紀後半に位置づけられ、うち21は足場ＳＳ7425の１基から出土したものである。このことから、それが嘉歴の火災後の応永の建て替えにともなうものであることが推測できる。19・20は、さらに時期が新しくなるものであろう。20は、調査区北東のSK7433出土。

（高橋克壽）

金属製品

銅製品・鉄製品が多量に出土した。銅製品には、垂木先金具、飾り金具、鋲などがあり、鉄製品には、釘、鏃、手斧刃状品などがある。

銅製垂木先金具は、円形のものが2種類確認された。1つは、復原径が14.5cm、厚さ2.3mmで、薬師寺金堂跡出土の対葉形唐草文を表現したものと類似する。いまひとつは、径12.5cm、厚さ2.5mm。1つの対葉花文と2つのC字唐草文を組み合わせて三角形の花弁を表現し、この花弁4枚を内向きに配列し宝相華を構成する（図56）。柱に留めるための釘穴は中心に設ける。大官大寺・薬師寺など飛鳥・奈良時代の垂木先金具は透彫りと線刻によって文様を表現するが、本例に線刻はなく透彫りのみで文様が表現されている。また、その文様自体も比較的細い線によって表現されている。こうした表現の垂木先金具は、京都府宇治市平等院鳳凰堂、岩手県平泉町中尊寺金色堂の事例がある。対葉花文とC字唐草文による三角形の花弁表現と類似したものには、平安宮豊楽殿出土の垂木先金具、興福寺北円堂寛治再興の埋納品があり、このうち前者は三角形花弁4枚を内向きに配し宝相華を表現したものである。これらの事例から、本例は11世紀から12世紀の所産と考えられる。（加藤真二）

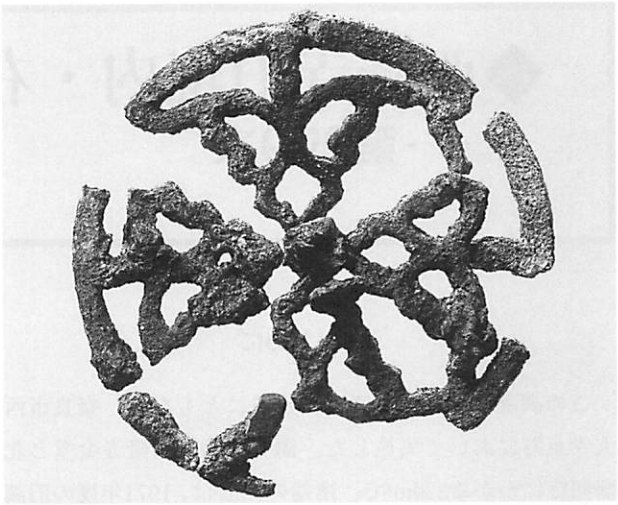


図56　垂木先金具

銭貨

表土および褐色土中より、永楽通宝1点、寛永通宝22点が出土した。

5．まとめ

A　今回の発掘調査により、従来文献・絵画資料および地表からの観察にもとづいて検討されてきた中門の規模を明らかにした。礎石および礎石抜き取り穴から判明した中門の建物規模は、桁行き5間78尺、梁行きは2間28尺で、『興福寺流記』に中門は「長七丈八尺、広二丈八尺」、桁行きの柱間は「五間」とあり、これと一致する。また、興福寺の度重なる再建の特色のひとつに、奈良時代とほぼ同じ規模を踏襲して、それぞれの建物の復興を行ってきたことが指摘されてきたが、礎石の位置が確認されたことで、そのことが裏づけられた。

B　中金堂院の罹災と再建は、以下の経過をたどる。

①永承1年（1046）12月24日 類焼
　永承3年（1048）3月2日 供養
②康平3年（1060）5月4日 焼失
　治暦3年（1067）2月25日 供養
③嘉保3年（1096）9月25日 焼失
　康和5年（1103）7月25日 供養
④治承4年（1180）12月28日 兵火
　建久5年（1194）9月22日 供養
⑤建治3年（1277）7月26日 雷火
　正安2年（1300）12月5日 供養
⑥嘉暦2年（1327）3月12日 放火
　応永6年（1399）3月11日 供養
⑦享保2年（1717）1月4日 焼失
　文政2年（1819）金堂仮再建

伽藍の中心に位置する中金堂院という性格上、火災痕跡は必ずしも成層的なありかたを示すものではない。今回の調査では基壇および基壇外装の改修・重複を確認し、遺構の状況および出土遺物から、A期を創建期、B期を永承から治承、C期を建久再建、D期を応永再建、E期を享保の火災以降に対応させることができる。

C　中門の安置像については、『興福寺流記』に「在四王二躯従鬼八口。宝字記神王二鋪云云。延暦記云。従鬼各四口云云。」とあり、治承以前のありかたを基本に描いたとされる『興福寺曼荼羅図』では、中門の基壇上に二天像と立像の従鬼を描く。従鬼像台座石SX7424が原位置で発見されたことは、中門安置像のありかたを検討するうえで重要な材料となるといえる。（次山）

◆西隆寺旧境内・右京一条二坊の調査
―第299次

1．はじめに

この調査は、都市計画道路建設にともない、奈良市西大寺東町において実施した。調査区は、西隆寺金堂と北面回廊にかかる320m²で、南端の70m²は、1971年度の旧調査区と重複させた。調査地の周囲は、東に第209次（1989年）、北に第212次（1990年）、第221次（1991年）の各調査区が隣接している（図57）。

今回の調査では西隆寺関係の遺構のほかに、西隆寺造営以前の平城京（右京一条二坊十坪）の遺構、および平城京以前の遺構も検出した（図58）。なお、調査区全面にひろがる近世以降の細溝類は記述、図示を省略した。

2．基本層序

調査区の基本的な土層は、上から近年の盛土、水田耕土、床土、灰褐色土（包含層）と続き、現地表下約0.8m（標高71.70～71.80m前後）で西隆寺関係の遺構を検出した。その下の灰色または黄褐色砂質土面で平城京および平城京以前の遺構を検出した。西隆寺造営時の整地土（黄褐色砂質土）は、回廊以南で薄く認められた。遺跡のベースは基本的に砂質土あるいは砂層である。

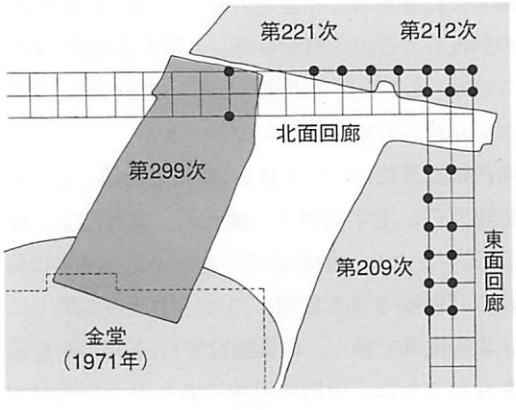


図57　第299次調査区位置図　1：800

3．検出遺構

西隆寺関係の遺構

SC450　北面回廊。調査区北端で、回廊東北入隅から数えて7間目の柱位置に礎石据付掘形を南北2箇所に検出した。いずれも一辺約1.3mの隅丸方形で、掘形底部がわずかに残る（深さ0.1～0.2m）。掘形埋土は暗褐色砂質土である。間隔は4.8m。回廊の南および北側柱筋にあたる。基壇の掘込みは認められず、直接ベースの砂質土に掘形を穿っている。後世の削平のため基壇土、基壇外装、雨落溝などは失われている。調査区全体でも回廊部分は近世以降の土坑や溝が錯綜し、削平が著しい。

SK697他　土坑群。西隆寺廃絶後、瓦片や、凝灰岩片を廃棄した土坑で、金堂基壇の北側に10箇所ほど群集する。一辺0.5～1m、深さ0.4～0.6mほどのものが多い。

平城京の遺構

SD095　坊間西小路東側溝。調査区南西部の南北溝で、1971年調査のSD095の北延長部。溝内の土層は、大きく上・中・下の3層に分かれる。溝の規模は下層が幅約1.1m、深さ0.4m、中層が幅1.4～1.9m、深さ0.25m、上層は幅約2.5mである。溝の勾配は南下り。中層（暗褐色砂質土）・下層（茶褐色砂質土）が堆積層で上層（灰褐色砂質土）は埋立土である。上層埋土には、小穴3箇所（SX694～696）が穿たれる。各層から土器、少量の瓦、埴輪片が出土。中・上層の土器は多量である。上層からは銀製帯先金具、銅製瓔珞などの注目すべき遺物も出土した。

SD690　条間北小路南側溝。調査区北よりの東西溝で、大きくA・B・Cの3期にわたる変遷がある（図59）。Aは幅1m、深さ0.25mで、堆積層は上下2層に分かれる。A下層（灰色砂質土）は、調査区のほぼ東半分のみに認められ、北岸の一部に護岸の杭列跡とみられる小穴群がある。堆積層上面は酸化鉄やマンガンが沈着し暗赤褐色をおびる。A上層（灰色砂質土）は、調査区全体を東西に貫通

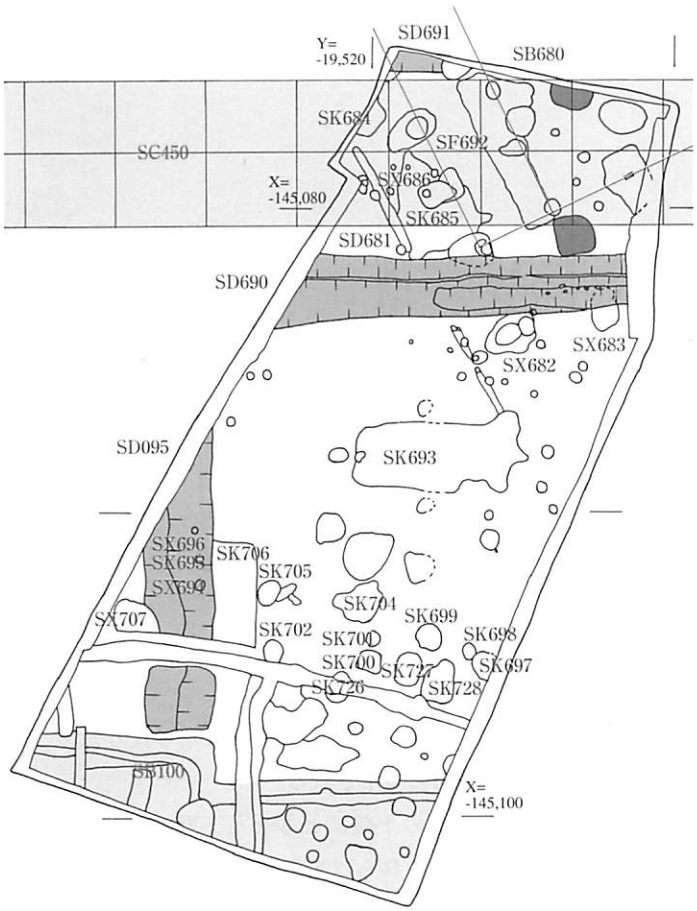
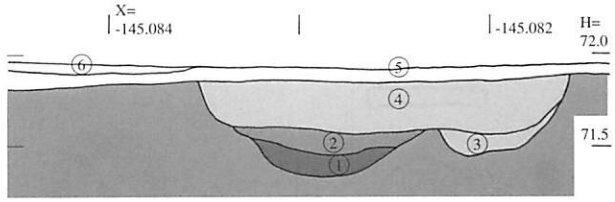


図58　第299次調査区遺構平面図　1：250



①SD690A下層　②SD690A上層
③SD690B　④SD690C　⑤・⑥整地上

図59　SD690断面図（Y=-19,518）1：40

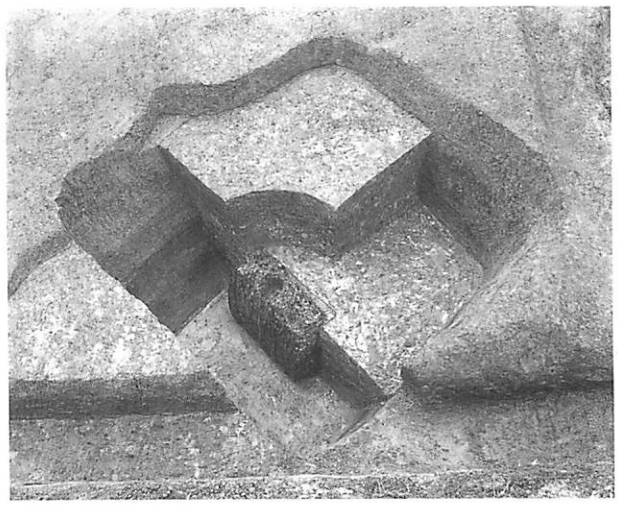


図60　SB680の角柱（東から）

する。B（灰色砂質土）は、Aの心々約1m北にあり、幅0.75m、深さ0.25mある。Cは幅2.1m、深さ25cm、溝の最終的な埋立土（黄褐色砂質土）である。溝底部の勾配は基本的に東下がり。A、Bについては、遺構どうしの直接の重複関係はないが、出土土器の様相などからBが新しいと判断できる。各層から土器が出土した。Aでは、少量で、上·下層とも平城宮Ⅰ期に限られる。B·Cからは多量に出土しており、時期は平城宮Ⅲ期までである。

SD691　条間北小路北側溝。調査区北西隅に検出した。後世の土坑と重複してわずかに南辺の底部を残すのみ。

SF692　条間北小路。SD690とSD691とに挟まれた東西方向の空間。路面幅は約6.0m。

SK693　土坑。東西約5.8m、南北約2.1m、深さ約0.25m、皿状をなす長方形の土坑である。埋土は暗褐色砂質土で、平城Ⅲ期までの土器が少量出土した。

これらの遺構は、西隆寺造営に際しての整地土（黄褐色砂質土）により覆われている。

平城京以前の遺構

調査区北端の掘立柱建物、溝、土坑などである。

SB680　掘立柱建物。北で大きく西に振れる（ほぼN25°W）大型建物の西南部分。この建物の平面、規模は確定しないが、西側に庇のつく平面と仮定して記述する。身舎の柱位置3箇所は布掘状の掘形（幅1m、長さ5.5m。北よりで東に1mほど張り出す。）内にある。庇掘形は4箇所あり、1×1.5m前後で東西に長い。妻柱掘形は、2.1×1.2mと南北に長い。掘形の深さは身舎が0.2～0.4m、庇では0.2～0.5m、妻柱掘形が0.9mで最も深い。掘形埋土はいずれも黄褐色粘質土を主体とする。妻柱掘形には角柱の柱根（断面が23×51cmの長方形、長さ42cm、図60）を残し、他は抜き取られている。柱間寸法は、梁間が約2.3m、桁行と庇の出はいずれも約2.7m。

柱根については、当研究所埋蔵文化財センター光谷拓実によって樹種鑑定と年輪年代測定を行ない、材はヒノキで、最外年輪が西暦265年という値を得た。この資料は、樹皮、辺材（シラタ）は残っていない。

SD681·SX686他　SD681はSB680の西約2.2m離れ、SB680と同一の方位をとり、南にのびる細溝。埋土は黄褐色粘土で共通し、SB680と同時期と推定される。SX686他は、小穴群で、埋土は黄褐色粘土であり、SB680の足場穴が含まれている可能性がある。

SK684　土坑。調査区北西隅で検出した一辺1.2mほどの土坑の一部。大部分は調査区外になる。埋土は炭化物混じりの暗褐色砂質土で、古墳時代の須恵器が出土した。

SK685　土坑。SB680庇南端の掘形に重複する。一辺約3m、深さ0.7mまで確認。出土遺物はなく、時期、性格とも不詳だが井戸の可能性がある。　（千田剛道）

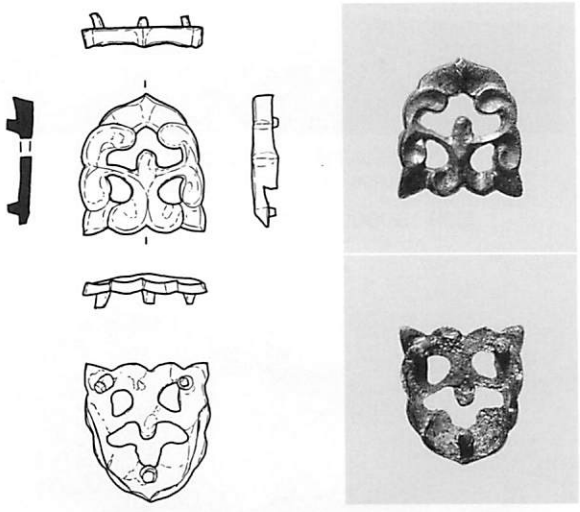


図61　第299次調査出土　銀製帯先金具　1：1

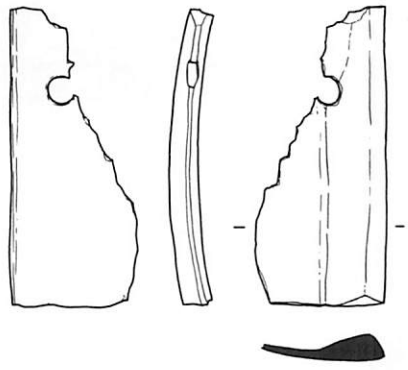


図62　第299次調査出土　銅製瓔珞　1：1

4．出土遺物

出土遺物には、廃棄土坑出土の大量の瓦塼類、SD095、SD690出土の多量の土器類に加えて、SD095出土の金属製品など注目すべきものがある。

①金属製品・石製品　整地土や条坊側溝埋土中などから銀製帯先金具、銅製瓔珞などの金属製品、砥石、鉱滓が出土した。

銀製帯先金具（図61）SD095上層出土。頂部中央に対葉花文を基部左右に栓形花を配した花唐草を透かし、裏面に3本の鋲足をもつ表金具である。長さ1.81cm、幅1.64cm、厚さ頂部0.36cm・基部0.15cm、ほぼ純銀製で重量2.8g。類似する文様は、正倉院北倉御冠残欠の飾金具や、東大寺大仏殿鎮壇具金鈿荘大刀の平脱文にみられる。

この帯先金具の用途については、裏面の形状から推定される帯の幅が1.5cm程度とかなり細いことから、腰帯に加えて、刀装具や馬装などに用いられた可能性が想定される。「衣服令」によれば、一品以下、五位以上の朝服として金銀装の腰帯、武官の礼服・朝服として衛府の督・佐に金銀装の腰帯とともに金銀装横刀の佩用が許されていたことが知られる。

刀装具の例としては、東大寺大仏殿鎮壇具金銅荘大刀とともに出土した小型の帯先金具がある（帝室博物館『天平地寶』1937）。これは幅約1.45cmと本例に近く、帯執緯の先金具（紐先金具）とされ、天部像等の短甲付属具との関連も示唆されている（上田三平「東大寺大佛殿須彌壇内に於て發見せる遺寶に就て」『寧樂』第8号、1927）。また、唐草文をモチーフとした銀（鍍金）透金具は、鎬の形状等に本例との差異はあるものの、正倉院北倉金銀鈿装唐大刀、あるいは中倉の60口の刀子鞘にみられるように帯執、鞘尻等の装飾に多用される。

馬装では、正倉院中倉の十鞍にともなう三懸、および鐙靼の先端にみられる。これらは金銅製で植物文を表現し、裏金具と3本の鋲でとめるもので、長さ2.5～3cmと本例に比してやや大きい（鈴木治「正倉院十鞍について」『書陵部紀要』第14号、1962）。

なお、正倉院には刀子・玉魚など腰帯に付帯する佩具も伝えられており、これらにともなう細帯の金具である可能性も考慮する必要があろう（吉村苣子「唐代の跕躞帯について」『美術史』第93～96冊、1976）。

いずれにせよ、本例のように銀製で文様を透かした帯先金具の類例は乏しく貴重な資料である。なお、本例と大きさの近い金銅製の帯先金具が、中国陝西省永泰公主墓より出土している（陝西省文物管理委員会「唐永泰公主墓発掘簡報」『文物』1964年第1期）。

銅製瓔珞（図62）SX695出土。銅椀の口縁部を転用したものである。本来は、口唇部を一方の長辺とし、長さ4.0cm、幅1.7cmの長方形に加工されていたものと推定されるが、上半1/3を欠失する。上端から約1cmのところに、径3.0㎜の円孔をもつ。銅椀は、推定口径21cm以下、口縁部は断面三角形状に内面に肥厚する。

銅椀を加工・転用した方形の瓔珞は、平城京右京八条一坊十一坪、同二坊十二坪（西市）などに類例が知られる。これらは、長辺と短辺の比が本例ほど大きくなく、定型化した転用品との指摘がある。

砥石・鉱滓　SD095上層、SD690上層などから砥石8点が出土し、西隆寺造営時の整地層からは鉱滓が出土した。調査面積に比して砥石の量がやや多い。　（次山 淳）

表8　第299次調査　出土瓦塼類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6237	A	1	6761	A	10
6282	Ha	1	6764	A	3
	?	1	型式不明		9
型式不明		6			
軒丸瓦計		9	軒平瓦計		22

	丸瓦	平瓦	塼	凝灰岩	道具瓦他	
重量	182.5kg	478.9kg	1.1kg	4.4kg	面戸瓦	1
点数	2,471	7,399	4	39	隅切平	1
					刻印平「上」	1
					道具瓦	1

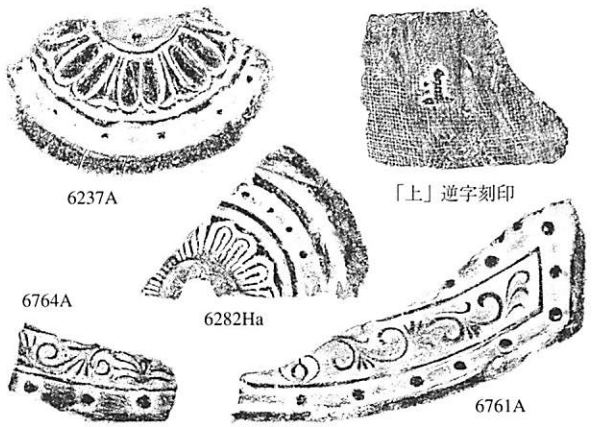


図63　第299次調査　出土瓦　1：4

② 土器類　土器は主としてSD095とSD690から出土した。時期的にはSD690Aでは平城Ⅰ期に限られ、ほかは平城Ⅲ期までを含む。土器の構成はいずれも土師器、須恵器からなる食器類が主体である。SD690Bでは完形または完形に近い大破片がめだった。ほかに奈良時代の土器は、SK693からも少量出土した。やはり食器類で、平城Ⅲ期までに納まる。SK684からは、6世紀後半の須恵器杯が出土している。

SB680掘形からは土師器の細片がごく少量出土しているが、時期を限定できるものはなかった。

③ 瓦塼類　SK697ほかの土坑群から多量に出土し、SD095、SD690からも少量出土した（表8、図63）。SD095出土の軒丸瓦（6282Haおよび6282種不明）は、平城Ⅱ-2期に編年され、西隆寺創建以前の平城京宅地の時期に対応する。土坑群出土瓦には、西隆寺創建時の軒丸瓦6237A、軒平瓦6761A、6764Aなどの軒瓦や、平瓦凹面に「上」の逆字の刻印を有するもの（SK727）がある。

5．まとめ

まず、西隆寺北面回廊については、柱位置の予想位置に礎石の据え付け跡を確認した。柱間も桁行10尺、梁間各8尺の複廊として無理がない。これにより金堂の背面には回廊が通ることは確実となり、講堂がとりつく可能性は、ほぼなくなったとみてよい。

次に、西隆寺に先行する平城京の遺構に触れる。十坪に関しては、これまでもSD095の存在などにより、1町以下の宅地であることが想定されてきたが、今回、北を限るSD690の検出により、それが確定したことになる。十坪の北西隅には塵芥処理用と思われる土坑（SK693）の他には建物などの顕著な遺構が存在しないことも、宅地の隅の様相としてふさわしい。なお、溝と土坑の間には塀などの顕著な閉塞施設は検出されなかった。

SD690については、条間北小路南側溝とみなした。第212次調査（1990年）で、今回の調査区の東約25mの位置から東へ約14mの長さにわたって、1対の東西溝（間隔約6m）が検出されており、その南側の溝SD452は、SD690Bの、北側の溝SD451はSD691のそれぞれ延長上に位置するので、本来一連の溝と認められよう。先述のようにSD690については、大きく3期の変遷が認められたが、問題になるのは、SD690Aの性格である。SD690Aは比較的短期間のうちに廃絶し、位置を北にずらしてSD690Bとなっている。この移動は、土器からみて平城宮Ⅰ期のうちであろう。平城京内の各所で実例のあるように『続日本紀』にみえる和銅6年（713）の尺度改定による条坊道路側溝の掘り直し（注：井上和人「古代都城制地割再考」『研究論集Ⅶ』1985）に関連する可能性がある。かつて『西隆寺発掘調査報告書』（1993）では、SD451·452について「九·十坪の坪境小路心の想定線より北約15mに位置し、坪境小路に関連するものとみるには距離が離れすぎる。九坪内での区画溝であろう」とした。今回の調査区では「想定線」に該当する遺構は存在しない。SD451·452の延長に位置する一対の東西溝が、東西50mにわたって確認されたことにより、この遺構を条坊側溝として、この地域の条坊の様相の再検討が求められているとみたい。

平城京以前の遺構として大型の建物が検出されたことも特筆される。断面長方形の角柱は、藤原宮下層（藤原宮第41次調査 SB3650、『藤原概報15』）に類例があるが、非常にまれなものである。西隆寺周辺の調査では、これまで、SB680と同様の、北で西に大きく振れる方位をもつ遺構（掘立柱建物、竪穴住居、溝など）が検出されており、相互の関連に関心がもたれる。　（千田）

◆旧大乗院庭園の調査 ―第300次

1．はじめに

本調査は（財）日本ナショナルトラストによる「名勝旧大乗院庭園保存修理事業」の一環として行った。平成10年度は北岸西半部を対象とし約200m²を発掘した。池の東北隅部にも別にトレンチ２本を設定し、護岸復原整備の資料とした（図64）。

主調査区の８m東に設けた昨年度の北岸中央部調査区では中世期以前に遡る北岸は、現汀線の12m北の位置（X=−146,906.0m付近）で確認された。今回はその西延長ラインと北西隅部の確認を主たる目的としている。

2．調査区の現状と江戸時代の絵図

調査区の現状は昨年度の北岸中央部調査区付近から池北西隅に向けて、北に入り込んだ形をなし、岸の斜面は急勾配で立ち上がっている。汀には護岸石もなく、草付きの斜面となっており、水面と北岸肩との比高は調査区西端で約２m、東端では約４mあった。

江戸時代の絵図のうち庭園の様相がわかるのは大乗院門主であった隆温大僧正（1811〜75）が描いた絵図である。絵図は写しを含めて現在３種が伝わるが、このうち最も詳細なのが、写しではあるが奈良ホテル所蔵のものである（図65）。この図によると池北西部には石積の護岸があり、護岸は中央部で開口している。開口部の奥は舟溜まりとなり、脇には草葺きの舟小屋もある。開口部上には屋根つきの橋がかかり、御殿のある屋敷地区と北側丘陵地の寺社地区とを境していたようだ。

3．岸北西部と池底の遺構

岸と池底の遺構は少ないところで１期、多いところで３期確認できた。古い方から第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期として概要を記す。

第Ⅰ期の遺構　地山面からなる岸と池底である。地山が露出している池底は調査区中央部から南にかけての範囲で面的に検出している。地山は灰色砂礫層であり、今回の調査区内での池底の高さは標高89.2〜４mであった。地山の岸は発掘区北東隅で行った北壁と東壁の断ち割りで確認している。東から西へつづく北岸が北へ入り込む角の部分である。角部分の北岸が40度前後の急勾配で立ち上がっているのに対して、東岸は15度ほどの緩やかな

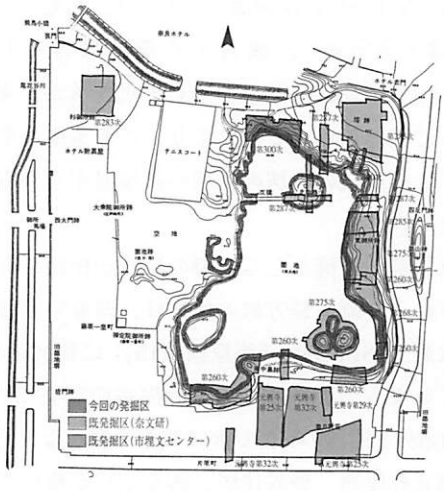


図64　第300次調査位置図　1：3000

図65　大乗院庭園四季写真図（部分、奈良ホテル蔵）

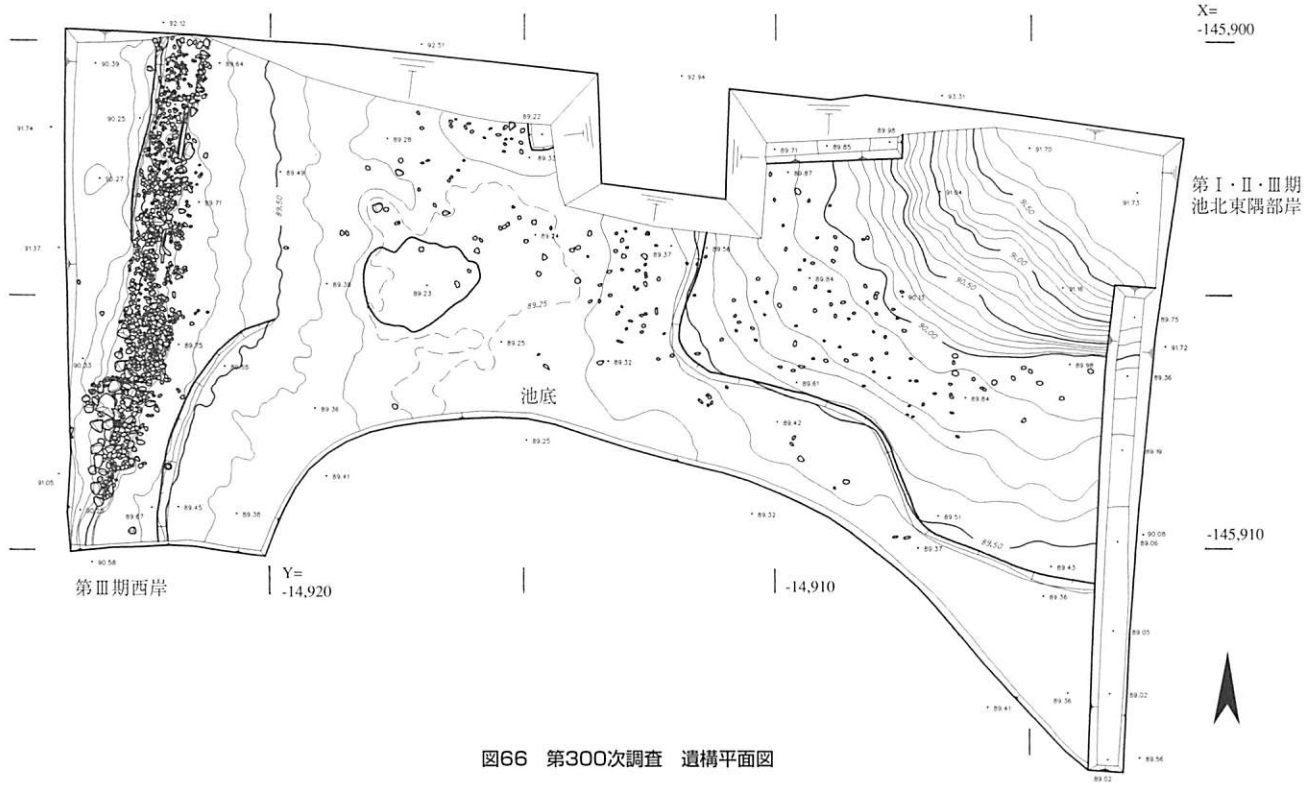


図66　第300次調査　遺構平面図

勾配である。立ち上がりの天端はほぼ平坦であり、その高さは91.0m弱である。入り込み部の北岸と西岸は調査区外となり確認できなかった。

第Ⅱ期の遺構　第Ⅱ期の面は調査区北東隅部と西岸の盛土断面で確認した。地山上に積まれた盛土は灰褐～黄褐色砂質土がそれぞれ５～20cmの厚さで６～８層積み重なっており、これを時間的な差と見るか、工程差と見るかで時期の認識は変わるのだが、ここではこれを基本的に工程差と考え、池底の堆積層との連続性から分かれる２時期にのみ区分した。つまり、盛土下半部が第Ⅱ期の遺構であり、厚さは全体で0.6～1.0mである。立ち上がりの勾配は地山よりきつい。北岸は垂直に近く、東岸も平均すると30度前後となる。西岸の勾配は第Ⅲ期の護岸の掘り込みで切られており確認できない。

第Ⅲ期の遺構　明治末期に園池北側の丘陵地に奈良ホテルが開業するが、この敷地造成として丘陵を削り、池の埋め立てが行われた。第Ⅲ期はこの埋め立てで生じた池底と岸である。調査区北東隅の岸は第Ⅱ期の盛土上に斜面部で40～60cm、岸上部で20～40cmの厚さに砂質土を積み、築成される。岸の勾配は北岸、東岸ともに45度ほどの斜面に変わる。北に入り込んだ部分の西岸はしがらみと礫を用いた護岸となり、現池西岸の２mほど内側の位置にある。護岸は最下部に径約15cmの丸太胴木を岸に平行に据え、上に径5～10cmの礫を厚さ30cm前後、幅１mほどの範囲に傾斜をもたせて敷く。護岸の前面は高さ30cmほどのしがらみで土留めしていたようだ。この時の西岸肩は標高約91.0mであり、第Ⅰ期の地山面がなす岸と同じ高さとなっている。岸近くの池底は地山上に砂礫土があり、これを最末期の池堆積土である黒色腐植土が覆う。池の中央部寄りは砂礫層からなる池底地山面を最末期の腐植土が直接覆っている。

4．遺物

池底堆積土などから瓦、土器などが多数出土した。

瓦は軒瓦が30点、他の瓦が約1,500点である。軒瓦は奈良時代の東大寺式軒丸瓦が調査区北壁の断割で1点、平安時代１点、中世７点出土した。残りは近世のもので、これらは大半が明治期に埋まる時点での池底の遺物である。問題は第Ⅰ期と第Ⅱ期の年代を決める遺物である。1点のみの出土なので明確ではないが、第Ⅱ期の西岸の盛土中から中世期に入ると考えられる巴文の軒丸瓦があり、他には新しい遺物が出ていないことから、第Ⅱ期の岸は中世期に遡る可能性がある。

5．まとめ

今回の調査で北岸が北に入り込む部分を検出した。この様子は奈良ホテル蔵の絵図に画かれた舟溜まりにつづく入り込み部の形態と合致する。護岸石がなく草付きの斜面であったことも同様である。ただし今回の調査では絵図にある石垣は検出できなかった。絵図のとおりであれば調査区のすぐ北に石垣があるものと思われる。

しがらみと礫で護岸された第Ⅲ期の西岸は絵図では死角となっており確認できない。第Ⅱ期が中世に遡る可能性が確認できたが、軒瓦１点による推定であり、第Ⅱ期の年代観については今後さらに情報が増えることを願う。第Ⅰ期の年代は、本調査では中世期以前としか言えない。（**高瀬要一**）

◆左京三条六坊（興福寺西域）の調査
―第293-6次

1．はじめに

本調査地は、現・三条通りと小西通りの交差点から北に入った小西通り東側に面し、左京三条六坊十二・十三坪にあたる。十三～十六坪の四坪は、興福寺西門外の旧境内地側近であって、奈良時代、興福寺の菜園・園地が置かれていたとされる。調査区内に東六坊坊間東小路や中近世の町屋遺構などが想定された。

今回、店舗改築（奈良大丸）に伴い、98年12月に小トレンチ２カ所を設けて試掘調査を実施したところ、中世瓦器が多量に出土したため、新たに東西34.7ｍ南北1.7ｍ面積59㎡の発掘区を設定して発掘調査を実施した。調査期間は99年1月7日から同14日までである。

2．遺　構

調査区は近現代の攪乱と盛土が著しい。特に調査区中央以西では厚さ60～100cm程の攪乱を被り、それを除去して土器片を含む厚さ約10cmの明茶褐粘質土が現れる。その下が小礫を多く含む黄灰粘質土（地山）である。地山面は東から西へ緩やかに傾斜し（東端で標高約80.5m、中央付近で約80.0ｍ）、西端近くでやや急激に下がる（約79.4ｍ）。遺構検出は地山面で行い、小穴37基、土坑３基、井戸状遺構１基、溝２条などを検出した。以下、顕著な遺構について報告する。

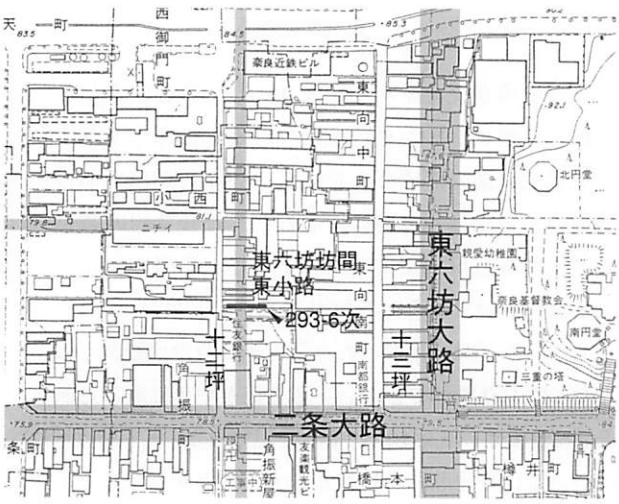


図67　第293-6次調査位置図　1：5000

SD7450　調査区西端で検出した南北溝。東岸を検出した。西岸は調査区外で、溝幅約1.5ｍ以上、深さ0.35ｍ。地山を掘り込んだもので、堆積土は礫を含む茶褐砂質土一層である。14～15世紀の遺物を含む。

SD7451　調査区西端で北壁沿いに検出した東西溝。南岸を2.6ｍぶん検出した。北岸は調査区外で、幅25cm以上、深さ約10cm。東から西に流れ、SD7450に注ぐ。

SE7452　調査区ほぼ中央で検出した遺構。検出面の直径1.3ｍ、底面で0.9ｍのほぼ円形を呈し、深さは0.65ｍ（北壁断面によれば1ｍ以上）。井戸か。埋土は上から、かわらけ片を多数含む暗褐土、黄斑暗褐土、粘性の強い暗褐土である。出土遺物の年代から、12世紀後半の遺構と考えられる。

SK7453　SE7452の東約0.7ｍで検出した中世の土坑。北端は調査区外。

3．遺　物

土器・瓦塼類

遺物の出土量は少ない。土器は包含層から瓦器が整理用コンテナ１箱分出土した。SE7452から12世紀後半の土器が、SK7453から中世の常滑焼の甕破片が多数出土した。瓦塼類は、軒平瓦8500型式（鎌倉時代）と軒丸巴瓦（中世）が各１点、丸瓦が34点（4.3kg）、平瓦が95点（11.9kg）出土した。　（山下信一郎）

鹿角製品

SE7452より出土。右側落角を利用したもので、角幹と第一尖からなるが、角幹の先端を欠損する。長さ11.2cm。角幹基部の内外面を金属製工具により平坦に整形した後、3.0cm×1.9cmの方形の孔をあけ、角幹と第一尖ともに内

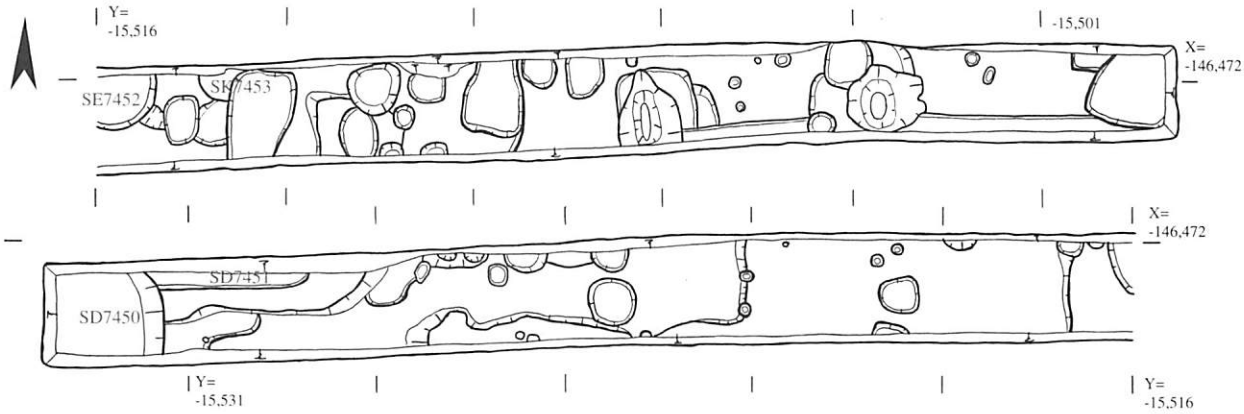


図68　第293-6次遺構平面図　1：120

面側の先端を斜めに切り落とす。切り取られた面は、互いに水平になるようにとられている。用途は不明であるが、側面から先端にかけて摩耗が認められること、内面と外面とでは角坐の摩耗の度合いが著しく異なり、内面側の摩耗が顕著であることなどは、使用状況を推定する材料となろう。

なお、本例ときわめて類似する鹿角製品が、滋賀県米原町入江内湖遺跡で採集されている（梅原末治「珍しい鹿角器」『考古学雑誌』第42巻第３号　1957、佐原真「弥生式時代」『彦根市史』上冊1960、金関恕「図版目録・解説118鹿角製品」『日本原始美術大系』５　1978）。角幹の基部に方孔をもち、角幹と第一尖の先端を尖らせたもので、長さ15.5cm。使用痕が観察されており、方孔に柄を装着し鍬として使用されたとの推定もある。この資料は、弥生時代中期に位置づけられているため、共伴資料の年代との相違など今後に課題は残る。　（次山　淳）

４．まとめ

東六坊坊間東小路の路心の座標はX＝－15,527.6と想定

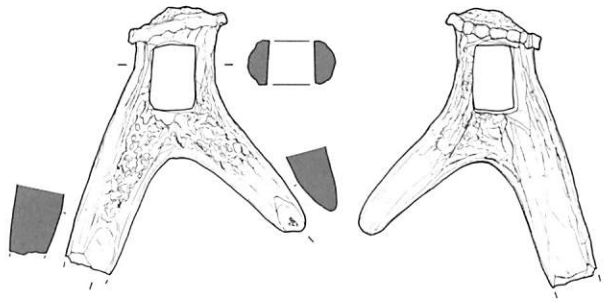


図69　SE7452出土鹿角製品　1：3

されている。東小路の路幅を側溝心々で20尺と考えると、今回検出したSD7450は、東六坊坊間東小路西側溝の想定位置にあたる。SD7450が古代の西側溝を踏襲した中世の溝であると考えることもできよう。しかし、今回、東小路東側溝にあたる遺構は検出しなかった。むしろ、小西通りが遺存地割に由来するとみて、SD7450はその東側の排水溝である可能性もある。SD7450の性格付けについては、当該地域の条坊制の実際とも絡み、今後の調査例の増加を待って結論したい。　（山下）

平　城　専　こらむ　欄　③

◆転任者のイチゴン

10年一昔とはよくいったもので、９年ぶりに戻った研究所は、思っていた以上に変貌していた。たまたま今年は、朱雀門や東院庭園の竣工・公開、奈良市制100周年記念のイベントと'98平城京展の開催など、平城宮跡発掘調査部にとって大きな事業が年度当初から重なったせいかもしれないが、考える間もなしに数ヶ月間が過ぎてしまった。

加えて12月には平城宮跡の世界遺産登録もあった。平城宮跡が、もはや確実に整備活用の段階に入っているとの印象を深くした。自分の庭のような感覚でいた平城宮跡が、別の人の手に渡りつつあるような感じを抱いた。しかし、これが本当の意味で国民の遺跡として還元されつつあるのであれば望ましいことである。

アジア各国との研究交流、とりわけ中国との合同調査の進展は目を見張るものがある。かってはほとんど手つかずのテーマであったから、この点に関しては、はっきりいって浦島太郎で、もっとも不安に感じた仕事である。都城を研究する組織として極めて重要なテーマだけに、今後の安定した研究体制づくりが可能かどうかが問われそうである。

たくさんの個別研究会にも驚いた。以前も、発掘報告をまとめる目的で内裏検討会や朝堂院検討会などの合同研究会を開いたことはあったが、所員から個別テーマを募って研究会を保障するシステムは、新しい展開である。主に発掘と報告書の作成に集約されていたノルマが、今やいろいろなところに個別に嫁せられつつあるようでもあり、うがった見方をすれば、エージェンシー化の準備が着々と進んでいるようでもある。　（T）

◆薬師寺旧境内の調査 ―第293-8次

1．はじめに

薬師寺法具蔵建設にともなう事前調査。調査地は玄奘三蔵院（昭和58年度発掘調査区）の北西に位置し、奈良時代における苑院の推定地である。中世以降は子院が建ち並んだと考えられており、17世紀後半頃の「伽藍寺中并阿弥陀山図」や「伽藍寺中之図」（いずれも『奈良六大寺大観』）をみると、福蔵院の境内となっている。また、11世紀末～12世紀末頃の池を検出した第223-3次調査区からは、南約40mの位置にあたる。調査面積は158m²、調査期間は1999年3月1日～4月5日。

調査地の土層は、基本的には盛土、茶灰砂質土（畑作耕土）、暗灰褐砂質土（整地土）、淡黄褐砂質土（整地土）、緑黄灰微砂（地山）である。後述するように、調査区東半には大小無数の土坑（土取り穴）があるが、西半はそれがほとんどなく整地土もよく残る。これは調査区西半全体が歴史時代以前の流路であり、土取りにむかない地山のためだろう。遺構検出は標高約61.4mほどの淡黄褐砂質土上でおこなったが、下層遺構の状況を確認するため、調査区の北約1/3を地山まで掘り下げた。

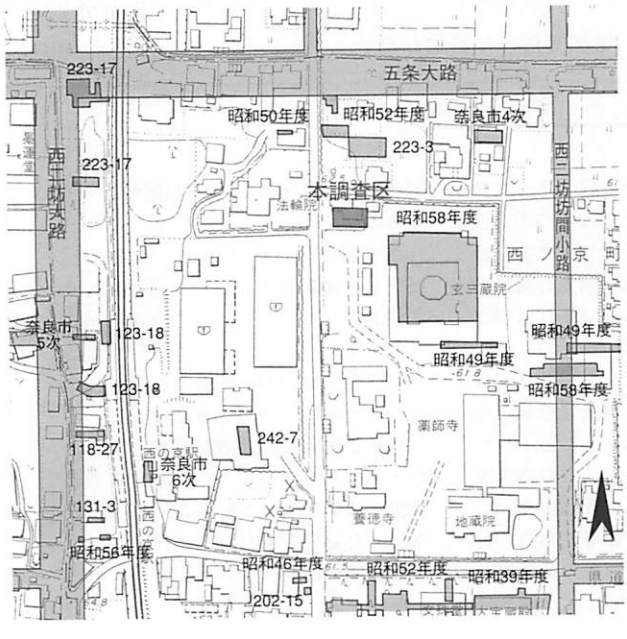


図70　発掘調査位置図　1：4000

2．検出遺構

検出した遺構は、掘立柱建物数棟、井戸4基、溝4条、土坑多数である。

SD2710　調査区西端で検出した南北溝。溝底付近に人頭大の玉石が数個あり、当初は護岸が施されていた可能性もある。溝の西端が調査区外になるため全幅は不明。溝の深さは約40cmで、調査区西壁では溝底の様相を呈している。溝埋土には奈良時代前半～10世紀前半の瓦・土器を含み、前述の淡黄褐砂質土はこの溝を埋めた整地土である。したがって、奈良時代前半に開削され10世紀頃まで存続した溝とみて間違いない。なお、この溝は本調査区の北方、約50mの地点でおこなった昭和53年度調査では、後世の削平のため検出していない。

図71　石組井戸SE2720

SB2711～2714・2716　いずれも調査区西半で検出した掘立柱建物。直径10～15cmの柱根を残す穴もある。このうちSB2716は柱穴が大きいわりに浅く、礎石建物の可能性がある。出土遺物からいずれも11世紀後半～12世紀中頃の遺構である。

SA2717　調査区西半で検出した掘立柱東西塀。

SE2715　調査区北壁にかかる井戸。井戸枠は抜き取られており、抜取穴から10世紀中頃～11世紀後半の土器・瓦が多量に出土した。木簡も一点出土している。

SE2720　調査区中央部で検出した石組井戸。最下部には幅約20cmの板材を敷き、大小の曲物を上下に重ねている。人頭大の玉石を曲物上端付近から約３段積むが、上部は削平されており、玉石の上端レベルはそろわない。埋土には奈良時代～11世紀代の瓦のほか、11世紀前半～12世紀前半の土器を多量に含む。

SD2721　調査区東半で検出した東西溝。底部は凹凸があり、深い部分で遺構検出面から約30cmをはかる。溝の西端をSE2720付近まで検出しており、出土遺物からもSE2720とほぼ同時期の遺構と考えてよい。

SK2722・2723　調査区南東で検出した大土坑。緑黄褐微砂の地山を掘り込み、ただちに埋めたような状況を呈する。調査区東半にある他の土坑（土取り穴）と違って円形をなすため、井戸かもしれないが水はまったく湧かない。SD2721やSE2715より古い。

SD2725　調査区中央を流れる南北溝。整地土（淡黄褐砂質土）の下層にあり調査区北部で平面を検出した。溝幅は約５m。堆積層は粗砂からなり有機物を多量に含むが、遺物を含まない。歴史時代以前の自然流路であろう。

SD2730　調査区南西にある斜行溝。南北溝SD2710を掘り下げた底で検出し、そのレベルでの溝幅は約2.5m。堆積土はSD2725と同様で、歴史時代以前の自然流路と考えてよい。調査区南端部でSD2725と合流する。なお、調査区西半は比較的均質な砂を地山とし、この付近は自然流路が交錯しているようだ。

調査区東半には、SK2724のほか多数の土坑がある。いずれも不整形で深さも一定せず、なかにはフラスコ状に掘られている穴もある。遺物もほとんど出土しないことから、土器製作の原料を得るための土取り穴とみられる。少量の遺物をみると、これらの土坑の掘られた年代は11世紀から12世紀頃と考えられる。　（箱崎和久）

3．出土遺物

井戸枠曲物　SE2720の井戸枠に用いられた曲物は、上段が径48.1cm、高さ27.5cm。下段は径44.3cm、高さ32.3cm。いずれもヒノキ材。上段、下段ともに高さの等しい１組の曲物を、綴じ合わせが対向するように重ね合わせて二重にしている。打ち合わせは右前。側板の表面には、幅１～２cmの削り調整痕が観察される。

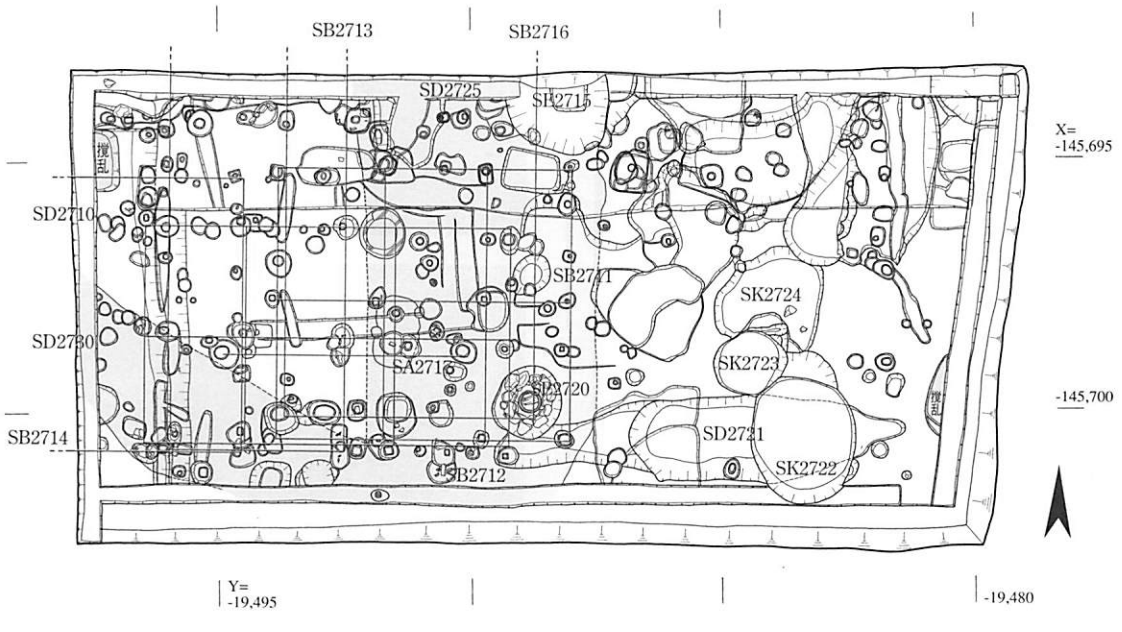


図72　第293-8次調査　遺構平面図　1：150

下段の曲物をみると、側板は上下２枚を継ぎ足しており、その合わせ目を挟んで上下１対の内外貫通する小孔が５ヶ所、口唇部に２ヶ所、底部に３ヶ所確認できる。遺存している例からみて、径２㎜ほどの木釘が打たれていたものであろう。これらは、内外２つの曲物を固定、補強するためのものと考えられる。

また、口縁部には、半円形の刳り込みが１ヶ所ある。こうした刳り込みは、麻を績んだ糸をためておく苧桶、あるいは漆桶などにみられ（岩井宏實『曲物』1994）、下段口縁であることから、転用であることを想定させる。なお、上段曲物の内面には漆の付着が認められた。

側板の下端より10㎝上には、径８㎜の円の中心に支点である小穴をもつ円弧文が３個、三角形に陰刻されている。この陰刻の類例は、岩手県平泉町柳之御所跡で、12世紀後半の井戸状遺構21SE1から出土した２点の曲物にみられ、それぞれ「大」と円弧文５個、円弧文４個を刻している（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『柳之御所跡』1995）。なお、本例については西村歩氏のご教示を得た。（次山　淳）

土器　調査区全域から、多量の土器が出土した。ここでは遺構から出土した土器のうち、代表的なものを示す。

１～４はSD2710出土の土師器。１は坏Bで外面に磨きを施すが、内面の暗文は風化のために確認できない。２はb0手法で調整する坏Aで、底部外面に「大」の墨書がある。１・２ともに奈良時代前半のものであろう。３は皿、４は小皿で、９世紀後半のもの。

５～34はSD2721出土。５～23は土師器で、５～８は坏、９～18は小皿、19～21は台付皿、22・23は羽釜。小皿には口縁端部が外反するもの（９・10・14・15）、肥厚するもの（11～13）と「て」字状になるもの（16～18）がある。５・６・９・14・15・21は灯火器として使用する。24は白磁椀の底部。28～30は黒色土器椀。28は漆の容器として使用し、内面に黒漆が付着している。見込みの暗文は30が放射状で29がジグザグ文。25～27は瓦器小皿で、27は口縁内面の磨きを欠く。31～34は瓦器椀。31の高台内には円環状の突帯をもち、29の底部外面には針による刻書がある。見込みの暗文は31が格子目文、34が螺旋文で他はジグザグ文。これらの土器には11世紀前半～12世紀前半の年代が与えられる。

35～48はSE2715出土。35～42は土師器で、35～39が小皿、40が皿、41・42は杯。43～49は瓦器で、43～46が小皿、47・48が椀、49は小椀。45は口縁部内面に磨きを持

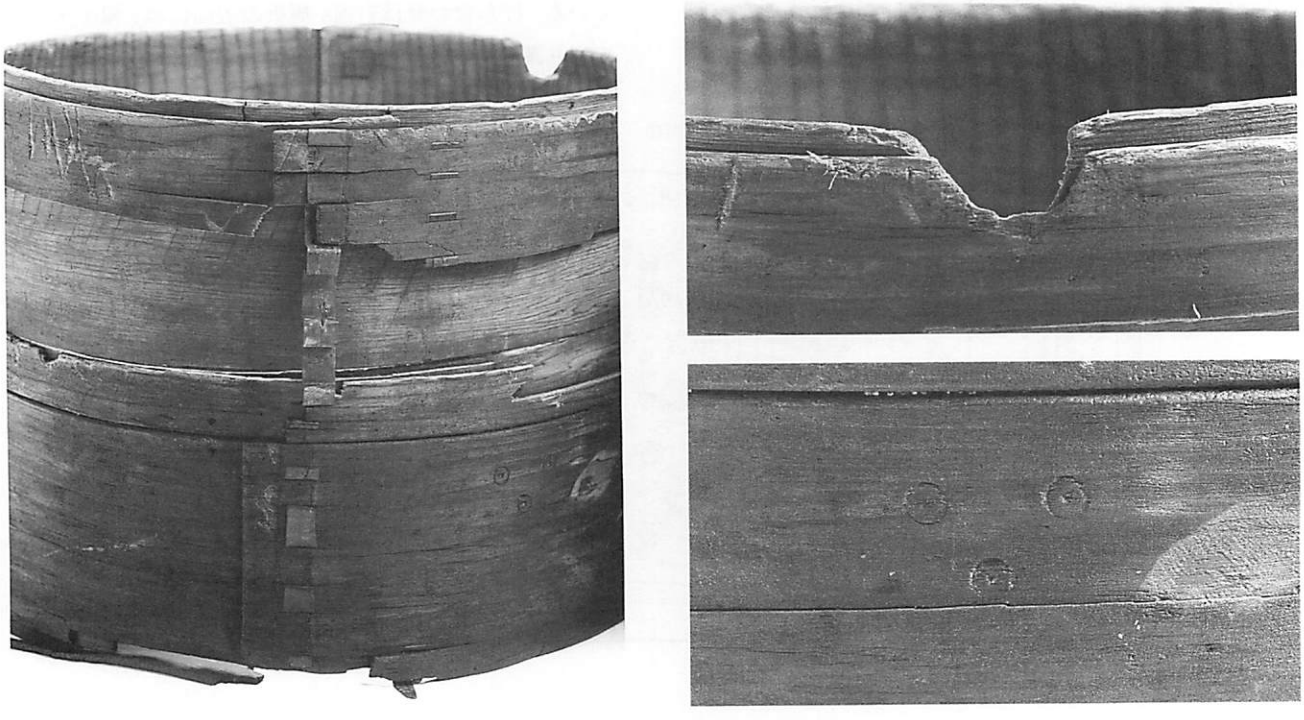


図73　石組井戸SE2720　井戸枠下段曲物

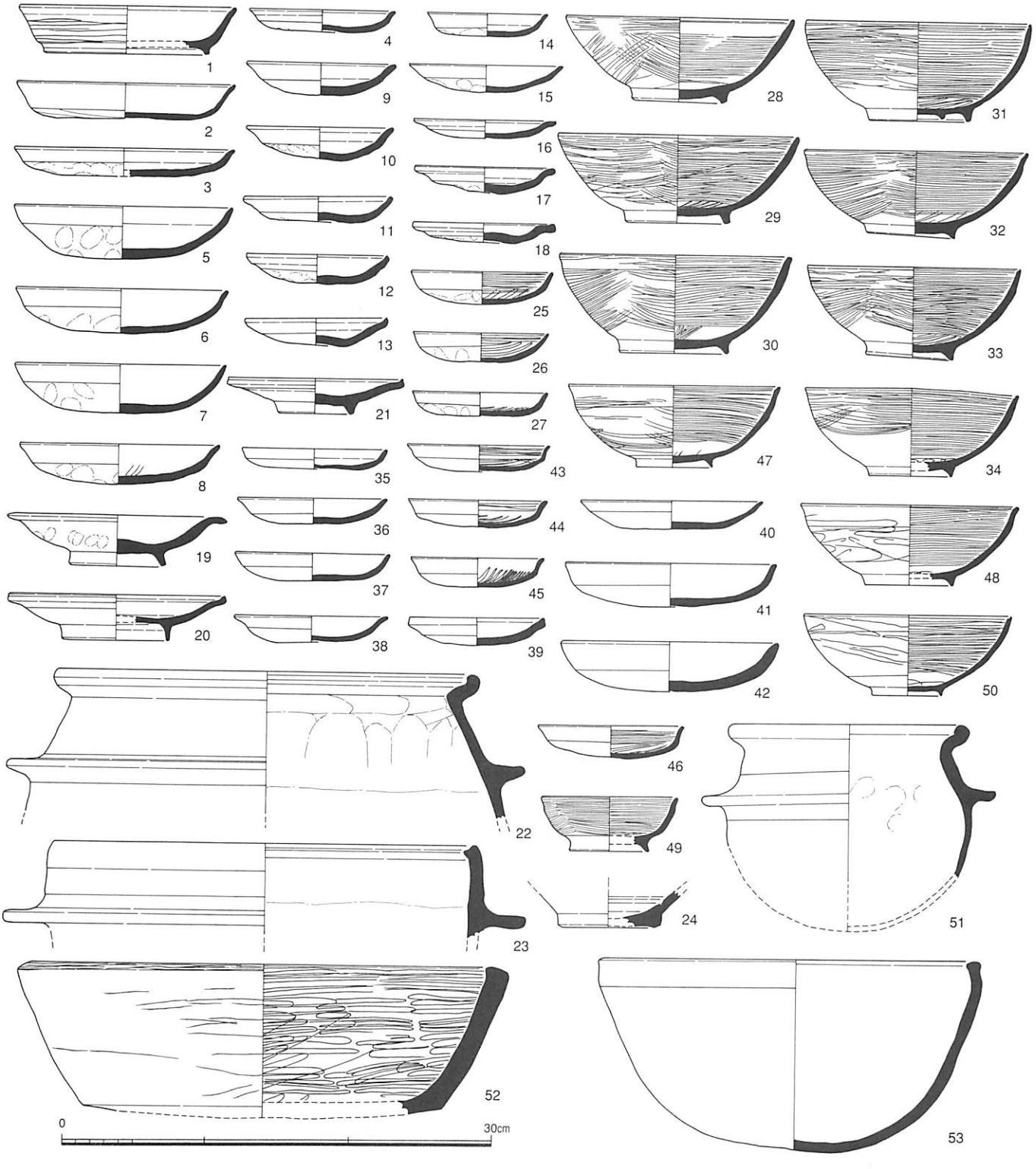


図74　第293-8次調査出土土器　1：4

たない。49は寺院特有の器形とも言うべき土器で、台付Ⅲと組み合わせて仏具の六器として使用する。瓦器椀の外面の磨きがSD2721出土土器に比べて粗雑になり、高台も断面三角形で細くなる。11世紀後半のもの。50·51はSK2724出土。50は瓦器椀で、見込みの暗文は螺旋文。外面の磨きも粗雑になる。51は土師器羽釜で、小型である。ともに12世紀前半代。

52・53はSE2720出土。52は瓦質土器の盤で、外面の磨滅が著しいが、内面は丁寧に磨いている。53は土師器鉢。口縁部直下のみを幅狭くヨコナデする。煮炊器として使用し、外面には煤が付着する。他には11世紀後半～12世紀前半の土師器、瓦器が出土している。　（玉田芳英）

瓦塼類　瓦塼類は暗灰褐砂質土層のほか、SD2710、SE2720、SD2721、調査区西半の小柱穴群などから出土した。薬師寺創建期の軒瓦から中世の巴瓦まで年代的にも幅広く出土しているが、３分の２は平安後半のもので

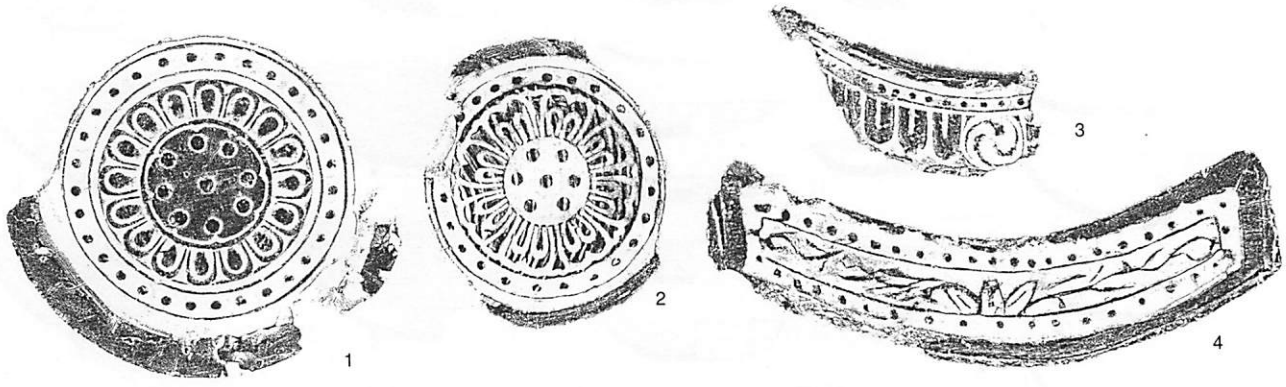


図75　第293-8次調査　出土軒瓦　1：4

表9　第293-8次調査　出土瓦塼類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6276	A	1	6641	G	2
6304	Eb	1	6641	H	2
薬師寺 38		1	6663	I	1
49		1	6763	B	1
50		1	薬師寺 236		1
52		1	255		1
56		1	263		1
82		1	267		1
86		1	277		4
87		1	285		1
89		1	344		1
94		2	平安		13
平安		3	中世		1
中世		1	型式不明		5
中世巴		3			
型式不明		3			
軒丸瓦計		23	軒平瓦計		35

	丸瓦	平瓦	塼	凝灰岩	道具瓦他
重量	399.5kg	1,522.0kg	47.1kg	1.1kg	スタンプ　1
点数	1,897	9,202	61	3	

ある。そのなかでも、薬師寺初出の軒瓦がみられる点と、基壇の四半敷を示す三角形塼が比較的多数出土した点が注目できる。

なお、大部分の瓦は廃棄された状況で出土しており、検出した遺構の所用瓦とは認められない。

SD2710の底部からは718年～738年頃に比定される軒丸瓦6304Ebが出土した。薬師寺創建期の瓦葺建築が、SD2710の近くに共存していたことを示す注目すべき瓦といえる。東西溝SD2721からは、薬師寺創建期から中世にかけての瓦が出土するが、平安後半の軒平瓦（図75－3）は初出である。同様に井戸SE2720からも、薬師寺創建期から中世にかけての瓦が出土し、なかでも初出の鎌倉時代の軒瓦（図75－1、4）は目を引く。また、SB2713の柱穴抜取穴からは、初出の軒丸瓦（図75－2）のほか、薬師寺軒瓦型式49（平安中頃）や同277（平安後半）が出土している。

（千田剛道）

4．まとめ

本調査では、奈良時代の苑院跡を裏付ける遺構は検出しなかった。しかし、SD2710の性格については、今後おおいに検討すべき課題である。SD2710の溝幅は、検出遺構から推して4ｍにおよび、しかも奈良時代前半の開削とみられることから、薬師寺造営時に計画された溝としてよい。この位置に想定できるのは、薬師寺北門から中心伽藍に向かってのびる寺内南北道路（西二坊坊間西小路相当）の東側溝か、もしくは、平城京右京六条二坊九坪に相当する苑院推定区画の西側溝である。西二坊坊間西小路の推定中心線から、SD2710（調査区西端）までの距離は約42尺であり、前者とすれば、寺内道路は大路クラスの幅をもつことになる。一方、後者と考えると、小路クラスの寺内道路が築地等で厳格に区画されていた状況を想定できる。

ところで薬師寺寺域内の坪割に関しては、平城京右京六条二坊の七坪と十坪境にある西二坊坊間路東側溝（昭和49年度・58年度調査）のほか、十四坪と十五坪間にある六条条間路南側溝（昭和46年度調査）を検出しており、いずれも平城京の条坊側溝を寺内まで延長したものである。したがって現時点では、SD2710を苑院区画の西側溝とみる後者の方が蓋然性は高いといえるが、その正否については今後の発掘調査成果を待ちたい。

本調査区では近隣の発掘調査と同様、平安後半を中心とする多量の土器が出土し、このころに子院が栄えていたことをうかがわせる。しかし、四半敷を示す三角形塼や中心伽藍ではみられない型式の軒瓦が出土することは、床を張らない瓦葺仏堂が中心伽藍とはまったく別に造営されていた可能性を示唆しており、子院内における仏堂とその造営体制について、興味深い事例を提供したといえるだろう。

（箱崎）

◆一条条間路の調査 ―第293-7次

1．はじめに

個人住宅改築にともなう調査。発掘面積は約12m²。法華寺の北を画する一条条間路の左京域西端に近い位置であり、その北側溝の検出を試みた。

2．調査の成果

調査の結果、幅2.3m以上の東西溝１条（SD1140）、それに流れ込む南北溝１条を検出した。

一条条間路北側溝とされる東西溝は、本調査区より東方の第82-8次、第164-14次、第95-2次で検出されている。

本調査で検出された東西溝もこれら既往の成果から想定される位置にほぼあたることから、一条条間路北側溝と考えられる。なお、南の溝肩は調査区外にあり、正確な位置を確定できなかった。

東西溝には、炭化物を多量に含む層がみられ、土器、燃えさし等が多数出土した。（加藤真二）

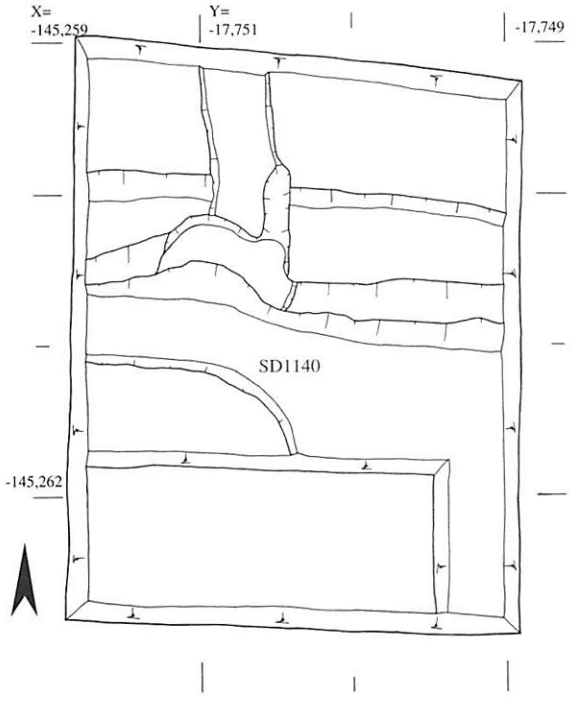


図76　第293-7次調査　遺構平面図

平　城　専（こらむ）欄　④

◆仏蘭西ワールドカップ珍道中

1998年スポーツ界最大のイベントといえば、なんといっても４年に１度のワールドカップ。われら日本代表チームは、そこそこ活躍するかも？という淡い期待をみごと裏切り、終わってみれば三戦全敗の勝点ゼロ。なんともさびしい結末でありました。それにしても、あのジョホール・バルの決戦でイランを撃破しW杯初出場を決めた翌日、驚喜・乱舞のうえに「本戦には必ずや応援に駆けつけるぜ」と豪語した奈文研のサッカー部員たちは、本戦が近づくや露骨に尻ごみし、結局、はるか仏蘭西南部の古城トゥールーズにまでかけつけたのは私とNとMの３人だけ。ところがこの３人、出国直前に勃発した「幽霊チケット騒動」にまきこまれ、とうとうスタジアムには入れずじまい。３人なかよく、河川敷の特設スーパーヴィジョンで、日本対アルゼンチン戦を観賞したのであります。

でも、楽しかった。日本がW杯に出場したら本戦を見にいこうと心に決めていた私は、歳四十をすぎて、ようやくその願いを叶えられたのです（おかげで発掘現場をさぼり、同僚の結婚式もすっぽかしてしまったけれど）。じつは私とNの二人は、イングランド対チュニジア戦のチケットをちゃんと確保していて、日本戦の直後にマルセイユへ移動し、かのヴェロドロームの極上の席に座っていたのです。マルセイユの町はスキンヘッドのフーリガンとチュニジア民族衣装の坩堝と化し、そのなかに身をおいたぼくらは、ただハムサンドをかじりながら騒動をながめるだけだったけれども、それが楽しくてしかたなかった。

４年後はどうするんだって？　もう決めてるよ。済州島のスタジアムで、デンマーク対パラグアイの試合を見るんだから。（A）

表10　その他の調査

調査次数	地　区	概　要
293-1	法華寺旧境内地	南北4m、東西７m、28㎡の長方形の調査区を設定。近代の溝、土坑を確認。近世以降の陶磁器が出土。
293-2	宮西面塀地・西一坊大路東側溝	南北4m、東西3.5m、14㎡の調査区を設定。西一坊大路東側溝の東半（約１m幅分）と塀地を検出。東側溝から丸瓦５点0.4kg、平瓦10点0.5kgが出土。
293-5	宮北辺	南北6m、東西4m、24㎡の長方形の調査区を設定。耕土直下10～20cmで全面地山。遺構無。
293-9	宮内、若犬養門東方	東西３m、南北７m、21㎡、小穴１基、土坑１基、土器・瓦少量。
293-11	宮北面大垣	南北3m、東西6m、18㎡の長方形の調査区を設定。東半に奈良時代の瓦を含む整地土層、西半に近代までの池の護岸を検出。奈良時代の瓦片、近世以降の陶磁器が出土。

●大極殿のいしずえ？　―寄贈礎石の紹介―

本資料は、平成11年春、奈良市高畑在住の石崎直司氏から本研究所へに寄贈されたものである。氏の開業する医院の建て替えにともない、灯篭の台座として使用していた礎石の寄贈を、別の礎石資料２点とあわせて申し出られたのであった。資料は平城宮跡資料館の南側敷地内に設置している。

この礎石は、平城宮跡保存に功績のある棚田嘉十郎が佐紀村から調達し、石崎直司氏の曽祖父の石崎勝蔵氏に贈ったと語り伝えられ、当時の記録も残る。氏は宮跡の顕彰に尽力し、正倉院文書の関係でも知られる。この経緯から、平城宮で使用された可能性が高いと判断され、ここで紹介する。

礎石は、全体の平面形が三角形に近く、２側面に自然面を残す。転用時に打ち欠いた部分があるが、おおよその原形は窺える。法量は長さが地覆方向に200cm、幅は136cm、厚みは現存部最大で78cm。石材は花崗斑岩とみられる。

上面に円形の径105cmの柱座が作り出され、礎石長軸方向に地覆座が延びる。柱座上面には地覆座から続くわずかな段が円弧を描き、内側が柱を受ける部分であったことを示す。推定柱径は約87cm。地覆座は左右で幅が違い、狭い方は約49cm、対し反対は81cmと広いので、本礎石の片側に門などの施設が想定できる。柱座中央部分に径約32cmの出ほぞがあったことが、表面に残る円形の敲打痕から知られ、この形状は同時に寄贈いただいた礎石資料のうち、大きく改変されているが同巧の礎石を参考にできる。

以上が概要であるが、礎石自身の大きさと柱の径から、巨大な建築物を想定せざるをえない。宮内でそれに見合う礎石建物の数は限られ、先の由来から大極殿が有力候補の一つとなる。ちなみに、第一次大極殿が移築されたといわれる山城国分寺金堂の礎石と比べると、石材は異なるが柱座の径は一致し、上面の加工や柱の当たりの径などは塔の礎石と一致する。従って、本資料が大極殿、とくに第二次大極殿の礎石であった可能性を考える必要がある。十分な資料集成の上に慎重な検討が必要ではあるが、この想定が裏付けられれば大極殿建物の基壇高や建築様式の推定に不可欠な資料になる。

最後に、本資料の石崎氏からの寄贈にあたって藤森友和氏、猪熊兼勝氏のご助力があったことを明記しておく。　（高橋克壽）

図77　寄贈礎石写真

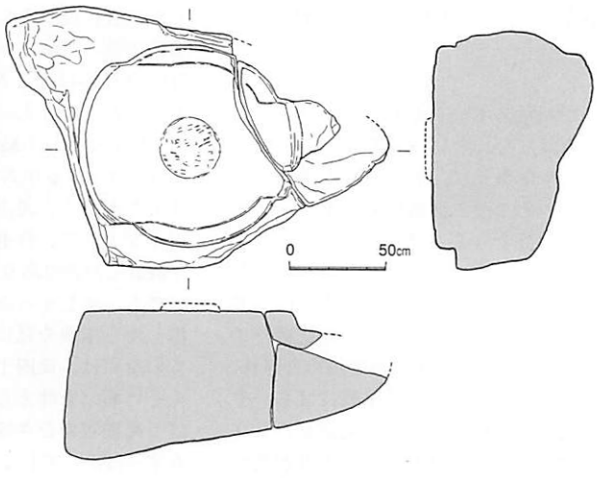


図78　寄贈礎石実測図　1：40

奈良国立文化財研究所
〒630-8577　奈良市二条町2丁目9-1
Nara National Cultural Properties Research Institute
2-9-1, Nijo-cho, Nara-city, 630-8577, JAPAN